

向日庵

8



目次

講演記録

『和紙の旅』に見る典具帖紙について—吉井源太『日本製紙論』からの検討— 1
村上 弥生(香川大学特命講師)

30 歳代の寿岳章子—学び、働き、楽しみ、悩んだ時代— 5
遠藤 織枝(元文教大学文学部教授)

論文

寿岳文章の工藝論 19
島貫 悟(東北大学大学院国際文化研究科非常勤講師)

ウィリアム・モリス、柳宗悦、そして「社会科学」 36
川端 康雄(日本女子大学名誉教授)

寿岳文章の蔵書記録 45
長野 裕子(NPO 向日庵会員)

評伝作家としての寿岳文章—『この英国人—ウィリアム・コベットの場合』の場合 . . . 65
佐藤 光(東京大学大学院総合文化研究科教授)

寿岳文章訳『セルボーン博物誌』 79
中島 俊郎(甲南大学名誉教授)

資料紹介

杉原紙振興ボランティア編『杉原紙論考集』 97

あとがき 99
長尾 史子(NPO 向日庵理事)

『和紙の旅』に見る典具帖紙について－吉井源太『日本製紙論』からの検討－

村上 弥生（香川大学特命講師）

1 『和紙の旅』にみる典具帖紙について

寿岳文章『和紙の旅一時と場所の道一』（芸艸堂、1973年）中、「和紙生産の現状を語る」の章に、次のようなやり取りが記述されている。質問者は、文化庁無形文化課（本書記載による）の柳橋真であった。

「寿岳先生は、典具帖のような紙をどうお思いですか。和紙技術から見ますと、あまりにも特殊に発達しました。（中略）技術の洗練さから見たら、たしかに神わざみたいになってしまって」との問いかけに対して、寿岳は次のように答えている。

「そうですね。おっしゃるとおり、あの手の紙には、和紙の病的現象といえるような点もありますけれど、それも使いかたで生きる。たとえば美濃の典具帖のように、非常に薄くて、火袋にした場合、中の光が外へそのまま出てくる、ろうそくならろうそくの火さきのゆれまでも見える、その特色を活かしたとうろうが、庶民の暮らしや神社仏閣の荘厳具に用いられた間は、それにふさわしいしっかりした用途がありました。ところが、照明具も蛍光灯やプラスチックに変るにつれ、外国へ売られて、ステんシルの原紙になってしまうようなことになれば、病的技術の極限にきた感じがしないでもありませんね。」

「神わざに近いことにうき身をやつすのは考えものです。もっと健康で、強くて、見るからにたくましいというのが、和紙本来の姿だろうと、私は思います」（pp. 223-24）。

ここで典具帖紙は、技術の洗練が極まり、神技のようにってしまった、ついには病的と言える技術で漉かれた紙になっていると捉えられている。そしてこの極限の姿が、典具帖紙を原紙としたステんシル用紙であるとされた。

このように捉えられた典具帖紙の原初の姿はどうだったのであろうか。この紙はもともと美濃産地で漉かれていた紙であるとされている。しかし、その大きさが半紙1枚程度のものであったために、明治期に起こった、多様な需要に対応することができなかった。この紙を大判で漉くことを可能にしたのが、高知県の土佐和紙産地出身の吉井源太であった。吉井は万延元（1860）年に漉桁・漉簀の大型化を成し遂げ、最大で半紙8枚が漉ける器具を考案した。これを吉井源太は「改良」と位置付けていた。典具帖紙もこの大型の器具で漉くことにより、多様な大きさの紙を製造することができるようになった。

『和紙の旅一時と場所の道一』で言及されていたステんシル用紙についても、大判の紙が得られて初めて、切り分けにより、要求される多様な大きさの紙に対応することができるようになる。このようにしてステんシル原紙としての利用が可能になる。その結果、西洋諸国で大量の需要が発生するようになった。

2 典具帖紙とステんシル原紙について

『紙漉村旅日記』（『紙漉村旅日記 定版』、春秋社、昭和61年）において、昭和14年に美濃の紙漉村が調査された際、「美濃の典具帖は殆ど全部がアメリカへ輸出されて珈琲こ

しに」なると書かれていた (p. 314)。

昭和 15 年に岐阜県の産地を再訪問した時、「太田万右衛門という製紙家は、乙狩の工場から上野の自宅へ案内」したと記述されている。太田は、「アメリカへ渡って珈琲こしやタイプライター用原紙になるという典具帖や、鉄筆原紙の実物につき詳しい説明を」おこなった (p. 380)。ここでは、「典具帖は純楮、鉄筆原紙は雁皮に三桎を配合したもの（以下では簡潔のために「雁皮製」とする）」だという説明が書き留められた (p. 381)。

本稿では、昭和 15 年に再度の美濃産地訪問の際に太田万右衛門から聞かされた「珈琲こしやタイプライター用原紙」になる、という典具帖紙について、明治期における、その開発当時の状況を検証し、当時の位置づけを確認したい。

吉井源太は、明治 31 (1898) 年に著書『日本製紙論』を刊行した。ここには、当時存在した各種の紙についてかなり詳しい説明がある。この中から典具帖紙についての内容を確認しておきたい。

3 『日本製紙論』の典具帖紙について

典具帖紙についての『日本製紙論』の記述は次のとおりである。項目としての紙名は「典具紙」となっている。記述内容について、旧漢字及び文章を現代語に改め、少し要約し、文章の区切りと改行を行って、以下に記載する。

典具紙は、典具帖といい、また天狗帖と書くことがある。楮の一原料をもって漉くもので、薄葉紙類に属す。現時点で、改良輸出紙中で主要なものである。古来土佐などで漉いてきた紙であるが、この紙が世の中に紹介されたのは、明治 13 年である。当時、土佐吾川郡伊野村の製紙社において、将来に需要が多くなる見込みがあることを知り、まずその見本を作り、これを東京の紙店に試験的に売った。東京の紙店は、さらにこれを横浜の外商に送ったところ、好評を得た。これにおいて、海外輸出の端緒を開き、以後、その需要が増加し、一時は非常に盛大になった。

しかし国内の悪徳商人が私利をもくろみ、粗製の偽造品を作って正当な典具紙に代え、一時的に外人をだまそうとした。ところが、彼らに見破られて、大いに声価を落とし、信用を失墜するに至った。このため、輸出に支障をきたし、以前は盛んに輸出されたが、典具紙としては一枚も需用が無いという状況となった。輸出物品は、紙類に限らず、いずれの物品にても精選に精選を加えて、信用をもつばらとし、これによって世界の市場で競争し、優位の位置を占めることを努めなければならない。これは実に国と国の間の公益上のことで、決して一人だけの利益を求めるべきものではなく、永久的な利益となるようにしなければならないのである。

この時、大いに悪徳商人の非を糾弾し、また、製紙家の紙類には元々欠点がないことを示

し、種々運動をした結果、紙類の真価を認めさせ、輸出の衰勢を挽回した。

典具帖は、12、3年前、すなわち海外輸出が開始されていない時には、幅が狭く、一つの桁で、二枚もしくは四枚を漉く程度であった。このころ、第一回関西連合共進会が大阪で開催され、自分（註：吉井源太）は、六枚分を1回で漉いた紙を抄造して、出品した。これは、今日一般に製紙の速度を速める道具として盛んに使用される連漉機（れんずきき）が知られた最初であった。これ以後は、典具帖のみならず、たいていの紙類はこの道具を用いて製造しないものは無いほどになった。

典具紙は、国内用としてはその需用が割合に多くないが、紙質が滑らかで美しいので、金銀宝玉のような珍品類を包むのに用いられる。海外の輸出先としては、英米仏独等の諸国があり、前途は極めて有望である。なお海外の国においては、歯科医が医療用に用いて、口中の粘液をぬぐうため従来の綿に代え、またガラス窓の内貼り、書籍・文具の箱や菓子箱等の内貼り、その他、上流社会においては、衣服を包むのに用いとされる。産地として有名なのは、岐阜、福井、高知等で、岐阜と高知とには良品が多い。

以上の記述によれば、典具帖紙は、明治初期に海外からの需要があり、輸出が開始されたが、他の紙類にも起こったことと同様の粗製乱造がおこり、貿易業者からの信用を失うという経緯があったことが書かれている。その後、その衰勢を挽回するに至り、海外へ送られるようになった。

先述したように、典具帖紙は大判の器具で抄造されるようになるが、『日本製紙論』によれば、日本国内ではそれほど需要されなかった。しかし西欧諸国においては各種用途に需要されたことが記されていた。最後に、良好な典具帖紙の生産地は岐阜と高知であったと書かれていた。

4 タイプライター用紙としての典具帖紙の歴史

前項で述べたような歴史を持った典具帖紙が、明治期中期以後にタイプライター原紙として活用されることになる。それは次のような経緯による。W.B.Proudfoot の著書「The Origin of Stencil Duplicating （ステンシル複写の起源）」（Hutchinson & Co（publishers）Ltd, London ,1972）を参考として略述する。なお、W.B.Proudfoot は、イギリスの印刷機製造販売会社の老舗であるゲステットナー社に勤めた人である。薬学と化学を幅広く学んだ後、1944 年にロンドンに移り、トッテナムのゲステットナーリミテッドでゴムの再生に関する戦争作業を行う研究チームに加わった。第二次世界大戦後は会社に残り、その後、ステンシル複製および関連製品に関するゲステットナーの事業についての研究に携わった。

西欧諸国では、会社等における事務的処理作業の発達に伴い、書類等の複製・複数作成が必要不可欠となっていた。複数の書類作成のためにまず発達したのが、手書きによるステンシルによる印刷の方式であった。ワックスコーティングをほどこされた薄い紙に、鉄筆で文字等を書いてその形に穴をあけ、それを原紙として、上からインクを通すことによって、普通紙に原稿同様の書類が複数枚作成できる。日本において謄写版（ガリ版）と

言われた手法である。

しかし産業社会における業務速度がさらに上がってきたことにより、タイプライターによる筆記方法が登場、その印字方法が改良されていった。タイプライターでステンシルを作成する必要が出てきたのである。このために必要となった原紙の特徴は、手書きでステンシルを作成する場合に必要であった紙の特徴とは異なった。

手書きでのステンシル作成に用いられた鉄筆原紙（謄写版原紙）として使われたのは雁皮製紙であった。この紙はきめが細かく、また丈夫すぎた。鉄筆では穴をあけることができるが、タイプライターでは文字の型をカットすることができなかった。このため、タイプライターで紙に文字の形を打ち抜くことによって作られるステンシル用に適する紙が、海外において探索された。その紙は、雁皮製紙より、はるかに多孔性である必要があった。そして、これに適したのが典具帖紙であった。

タイプライターでステンシルを作るための方法で米国特許を取ったのは、ジョン・ブロードリックという人であった。ブロードリックは、典具帖紙を用いる方法でこの特許を取った。「最も多孔質で最も薄い和紙の1つを使用している。この目的に適した唯一の種類の紙だ」とブロードリックは説明していた。

5 典具帖紙の姿

典具帖紙は「カゲロウの羽」に例えられることがある。見た目の様子が似ていることによる。これによく似た紙に、奈良県吉野地方の紙産地で産出される、漆漉し用の紙がある。やはり多孔性を利用するものである。これらの紙の見た目は、奉書紙や半紙類のような、白く、厚みのあるものとは異なる。このことが、典具帖紙を「病的」と表現させたのではないかと考えられる。

『日本製紙論』に書かれていた、明治期の典具帖紙について、その説明や、同時期に、日本に特有の紙であり、そしてそのころの書類複製に欠かせない紙として、西欧諸国から需要されていたことを確認してきた。この紙の特質が、ステンシル用紙の原紙として利用価値を持っていたのである。

冒頭で見たように、『和紙の旅―一時と場所の道―』において、典具帖紙、また、印刷などの用途への和紙の利用については批判的に書かれていたが、近代初期における世界の状況の中で、日本で産出される薄く丈夫な紙が、キーとなる物質であったという事実がある。日本の紙の存在によって、世界の事務処理プロセスの改善が可能であったということもできる。またこれらの紙の生産によって、結果的に産地を存続させたということも事実である。

30 歳代の寿岳章子—学び、働き、楽しみ、悩んだ時代—

遠藤織枝（元文教大学文学部教授）

1. はじめに

昨年 2024 年は、抄物研究の国語学者・ベストセラー『日本語と女』の著者・京都憲法を守る婦人の会代表・婦人問題研究会主宰者・エッセイスト、とまさに八面六臂の活躍をして大きな功績を残した寿岳章子氏（以下敬称抜きで「章子」と呼ぶのを許していただきたい）の誕生から 100 年の年であった。人の世は移ろいやすく、これほどの活躍をした人物も没後 20 年近くにもなると知らない人が増えてきて、その強烈な記憶も次第に薄れてくる。そうしたときに『寿岳章子 女と ことばと 憲法と』（かもがわ出版）を上梓することができ、その縁でお話しする機会を与えられたのは幸いであった。

章子の 81 年は、幼年期と最晩年の病臥の時期を除けば、常に全知能と全体力を傾け、全速力で疾駆し続けた活力あふれる多彩で豊潤な生涯であった。

2019 年の秋、たまたま入手できた日記には、1941 年 9 月～43 年 8 月、京都女子専門学校時代 1 年生から 3 年生まで、1945 年 10 月～1946 年 6 月、東北大学 3 年生で敗戦後仙台に戻ってから卒業まで、1952 年 1 月～1958 年 12 月、京大大学院生と西京大学講師を兼ねていた時期の、ブランクを含む 17 年間の章子の悲喜こもごもが満載されていた。従来発表されていた論文や著作では知ることができなかった新しい側面が次々と現れ出てきた。すなわち、反戦少女から軍国女専生への傾斜、猛烈果敢な受験勉強、古今東西の知を吸収せんばかりに勢い込む研究会活動、その一方で日常生活を尊重し謳歌するおらかな家事への取り組み、豊かな人脈を築く過程で漏れ出てくる鋭い観察眼など、時には美文調で、時には簡潔率直に、そしてある時は皮肉とユーモア交じりの文体で、豊かな章子像が活写されていた。

今回は、その豊饒な日記群の中の 1952 年から 1958 年まで、つまり 28 歳から 34 歳の時期の、新たに知りえた章子像をお知らせしたいと思う。

2. ある日の日記から

1952 年当時、章子は京大大学院生と、西京大学（現京都府立大学）文学部講師のふたつの顔を持っていた。毎日、研究の場である京都大学と、勤務校を行き来しているのだが、その西京大学は下鴨と桂にキャンパスがあり、章子の所属する文学部は桂、会議などが行われる本部は下鴨にあった。そのため、この 3 つのキャンパスを駆け回っているが、その間にはデパートで買い物をしたり、いきつけの美容院に寄ったり、好きな映画もしょっちゅう見に行っている。以下はある日の日記である。（／は改行されている箇所。ただし、最初の例以外は、本文の改行は無視し、＊の記号を 1 日の単位として記すことにする。また日付は、たとえば 1952 年 1 月 1 日は(52/1/1)のように記す。）

六時起床。毎日大変なこと。／洗濯をすまして慌たゞしく下鴨へ。／会議は十一時半に／終了。宮地氏宅／へ。三時半まで。／桂でサラリー後半、あまり少いので／大へん腹が立っ た。／家へかへれば母八尾へ行つてゐての夕／飯支度、洗濯のとりいれ等大忙し。／N響、芥川や

スシの弦楽のため の/三楽章、たのしくきけた。ワインベルグ/ーに似た牧歌的な二楽章が好き。/ギタイ語半枚ばかりかく (53/12/23)。

洗濯をすませて大学へ行き、さらにもうひとつのキャンパスに行き、どこかに寄る。帰宅して夕食の準備と洗濯物を取り込み、食事をする、ラジオで好きなクラシック音楽を聞きながら食後の片付け、それから国語学会¹から依頼されていた国語学辞典用の原稿を書いている。詳しくや重点の置き方に差はあるが、このような日々の営みが綴られている。以下、この日記群に即して、学問研究・日常生活・趣味などいくつかの側面ごとに整理しながら見ていくことにする。

¹ 1944年に橋本進吉らによって創設された。2004年に「日本語学会」と改称され、現在に及んでいる。

3. 積極果敢な研究生活

京大大学院時代の旺盛果敢な研究生活には刮目される。後に章子は、京大から進んだ院生と東北大から進んだ自分との能力差に非常な劣等感を抱いたと告白しているが²、その優秀な京大生え抜きの仲間との差を縮めるために必死だったのだろう。教授たちの主宰するいくつかの研究会に連日参加し、教授の講述を聞き自ら発表しながら研鑽を積んでいく。当時京大の大学院では、遠藤嘉基教授中心の研究会は土曜日に開かれていて、テーマとしては「今昔物語」「保元平治」「平仲物語」などが取り上げられていた。池上禎造教授の研究会は金曜日の夜開かれ、意味論・語彙論・共通語と標準語などがテーマになっていた。浜田敦助教授を中心とする研究会では、捷解新語を取り上げていた。これら、教わる立場の研究会に加えて、同学の士と自主的に立ちあげた「史記の会」「マルゾーの会」、さらに章子主宰の「おあん研究会」「山下清研究会」などもあった。平安時代の今昔物語から、現代語の文法論や文体論、そして方言、17世紀朝鮮の日本語資料、さらに中国史書、またある時期はフランス語原書講読や当時有名だった放浪の画家山下清の文章研究まで、実に多様多彩な幅広い対象に向かって貪欲な研究活動を繰り返していた。そうした研究会についての不満や喜びなどの感想が日記に頻繁に記される。

* 池上先生の研究会、段々最初性格を変へてきて、物をいふにしろ何だか平凡になってきたので面白くない (53/3/15)。

* 大したこともしないのにぐったりしながら研究会。わりに面白かった (つまり私も発表したといふこと) (54/2/26)。

* 浜田さん捷解新語最後の日。これは1年通すことができうれしく思ふ。OBたちみんな落伍した (54/1/30)。

* 意味論ねむくて／＼ほんとうに困ってしまった。今昔のとき少し目をさます (55/6/11)。

* 小田先生のところへK氏とマルゾーの文体論をはじめ、いい勉強なり (57/7/20)。

* 9時～12時 立命にて史記をよむ。のんびりしてたのしい会なり (57/7/29)。

楽しかったり面白い研究会ばかりではなかった。ついていけない会も、土壇場でキャンセルされて憤る会もあった。

*研究会、いきなり核心的問題で些かついてゆきにくかったのは残念(54/1/29)。

*大学院生研究会流会の件で私はモーレッツに腹を立てた。相手が誰であらうとかまない。むらむらである。私はシュンゲンであらうか、否、正確と時間的ケツペキを愛するにすぎない。(53/11/7)。

こうした研究活動の中から徐々に成果も生まれてきて、1952 年 28 歳のとき国語学会機関誌の『国語学』に「抄物とは」を寄稿したのを皮切りに、その後毎年のように論文を書くようになる。この時期に執筆した論文を掲げておく。

1952 年「国語学入門講座 抄物とは」『国語学』国語学会第 10 輯

1952 年「多義成立の一考察：「かなし」の語史と關聯して」『西京大學學術報告・人文』Vol.1

1953 年「抄物の文選読」『国語国文』京都大学文学部国文学国語学研究室 22 卷 10 号

1954 年「昭和 28 年に於ける国語学界の展望 一、国語学史・国語史」『国語学』第 17 輯

1955 年「形容詞の語彙的変遷」『国語学』国語学会第 22 輯

1955 年『国語学辞典』執筆項目「抄物」「擬声語」「擬態語」「対義語」「同音語」「同義語」
国語学会 東京堂

1956 年「擬声語の変化」『西京大學學術報告・人文』Vol.7

1957 年「抄物の会話文」『国語学』国語学会 第 28 輯

1958 年「女のなまえ」『計量国語学』計量国語学会 7 号

1958 年「女のなまえ—ある村ではなし」『言語生活』1 月号筑摩書房

1958 年「室町時代の「の・が」—その感情価値表現を中心に—」『国語国文』京都大学文学部国文学国語学研究室第 27 卷 7 号

これら論文題目の推移から、章子の研究テーマの変化と広がりが見える。初期の、東北大学に提出した卒論以来の抄物を中心とする中世語研究から、「女のなまえ」、つまり、女性の日常のことば研究に軸足を広げて行っているのである。後の岩波新書『日本語と女』に続くジェンダーの視点によることば研究の萌芽の時期であった。

² 『東北大学 女子学生の記録—昭和十八年十月に入学して—』 pp. 89-90

4. 抄物研究と抄物コレクション

抄物についての解説を章子の論文第 1 号「国語学入門講座 抄物とは」から見ておく。

いつの頃からか、五山の学僧の中、すぐれて知識ある人達はまわりに幾人かの弟子達を集めて、或いは貴紳を相手として、自分の学び取ったものを伝えることを盛に行うようになりました。[…]五山の僧達の手にかかったテキストは、宗教書・文学書・儒書を問わず、実に公平な態度でえらばれています。又解釈の態度も仏家の立場を固執せず、大変客観的です。[…]又神道の家柄の吉田家では日本書紀の講義などもしていました。[…]こんなものが実際に色々の形で記録となって珥在の私達の手に残されているのですが、それには大抵——抄という名がついています。(pp. 78-79)

京都五山の禅宗の僧や、博士・神道家たちが漢籍をよみ説いて講義をした、それが、テキストの中からの語を抽出して解説したものであったから「～抄」というと名づけられた、という。その講義を弟子たちが聞き取ったものだから、当時のはなしことばの資料として貴重な存在なのである。その抄物とどう向き合ってきたか。

大学生時代は卒論の中世語資料として抄物を読みながら「史記抄であへいでみる」(46/3/1)などと苦闘していたが、院生の時期、抄物は自家薬籠中のものになっていた。

*夜毛詩抄いさゝか (52/1/12)

*こたつの中ののんびりした勉強。ヴェルレーヌの秋の歌。毛詩抄 (52/ 1/ 14)

「毛詩」というのは孔子が編んだとされる中国最古の詩集で、その「毛詩」の講義版「毛詩抄」を読むのだが、こたつの中でのんびりと読んでいる。しかも「秋の日のビオロンのためいきの」のベルレーヌと同じムードで読めるという余裕ぶりである。

1954年に助教授に昇進してからは、抄物コレクションにも手を染めていく。

*この間リンロウ閣より求めし神代抄をちょっと調べる。天文五年本は他に見当たらないのでいゝものを買ったとうれしく思ふ (54/9/16)。

*書友会の売り立てに行って二万円の三体詩抄買うようにしてきた。久々での買い物。お金の算段たいへんなれど(56/5/25)。

*いままいしいこと二つ ①四河入海 亀井氏の手に入りし由…(55/ 4 / 23)。

*せっかくソリマチが来て周易抄があったのにごたごたのため、電話かけそこね、ちょっとの差でケイオウにとられた。残念なり(56/12/25)。

よい買い物をしたと喜びもするが、「お金の算段」もたいへんだった。2万円の「三体詩抄」は、かなり高価なものだったはずだ。この前年の暮れのボーナスが22000円だったから、1回分のボーナスをほとんどはたいて1冊の抄物を買ったことになる。

迷った末に決心して入札しても国語学畑の先輩の亀井孝に落札されて、時間の差でケイオウにさらわれて、悔しい思いもしている。

やりくり算段の末幸い購入できた抄物はまず、写本を取ることになる。室町時代の貴重な古

文書だから、傍に置いて手に取ってしながら調べるような粗末な扱いは許されない。まず写本ということになる。今のようにコピー機があれば簡単だがこの当時まだコピー機は普及していなかった。「夜 写本」(12/2)、「本日も写本」(12/3)、「抄物の写本をのろのろやる」(12/9)、「写本いささか」(12/15)と、1955 年末の日記では写本が続く。写本を複製して、そこに心覚えを書き込んでいく。異本と校合して、わずかでも違いがあればそれを書き込む。そうやって個々の抄物の実態が明らかになって来ると次は書誌づくりである。各抄物の成立の時期、作者・編者の情報、書物のサイズ、材質、内容などわかっているかぎりの情報を記していく。その集成が目録になるので、同じ作業を章子は目録作成とも言っている。

* 抄物書誌やっと少しばかり書きかけた。残念ながら易全部終わらず。(57/1/6)

* 夜抄物の目録と思ったが手紙書きに終始す。(57/1/20)

* 夜抄物目録。久々なり、又馬力を出さなくては！(57/2/13)

* 夜九時から一時間あまり抄物、中庸終り。牛歩。(57/3/13)

抄物を発掘から始めて、写本作成、異本との校合と資料整理をし、書誌を書き目録を作って、室町時代の言語資料としての枠組みを作りあげていく。言語資料としては、抄物自身の持つ日常語的性質を文章面と語彙面から精査に分析し、また他の同時代の言語資料との比較を通じて、抄物の独自性を浮き彫りにする。室町時代の高僧や博士というインテリの講義した話しことばの中に、意外な日常性を読み取って章子は楽しみながら研究を続けていった。スリルと緊張のうちに入札と落札を繰り返して、買い求めた抄物は全部で 60 冊にも達した。章子は大学を定年で退官するとき、これらのコレクションを集成・編集して『向日庵抄物集全二巻』(清文堂)として刊行した。そしてその原本はすべて京都大学に寄贈した。現在、京大図書館のデジタルアーカイブスで「寿岳章子寄贈」の印の押された抄物を見ることができる。

5. 日常生活を楽しむ

5-1 家事全般を引き受ける

30 代の章子は、中世語研究を続ける一方で、大学の講義では国語学全般と言語生活史を担当していた。中世語の研究では、古い文献の読み解きや新しい資料の掘り起こしに、また言語生活史では歌やことわざ週刊誌など日常の言語のありようの調査と研究に、盛大なエネルギーと精神力を費やしていたはずだが、同時に家事などの日常生活にも十分に力を割きその意義を見出していた。

後年、章子は「家事と母」というエッセイの中で述べている³。

私は十代の半ばころからかなり多くの家事を自分の責任でやっていたし、母が年齢を重ねるにつれ力仕事を医者からさしとめられるその分はすべて私がやった。

東北大を卒業して家に帰ってからは、トイレ掃除や洗濯なんぞ母には全くさせなかつ

た。(p.146)

「午前中から西京へゆく。何かと忙しい」(55/10/22)、「帰るとき／＼舞ひに忙しい。手早く(文字通り)夕食の支度、われながらあざやかなり」(56/12/13)、「午前ちゅう忙しい。向日町へ行ったりセンダクしたり」(57/10/15)、「忙しい家事の合間に些か論文を書いた」(58/5/25)、と。日記の章子はいつも忙しがっている。

この忙しい中で、章子はいつも洗たくや掃除をしている、というか、洗濯掃除が毎日の日課だから忙しいのだが、映画もよく見ている。もちろん、大学の講義の準備もほとんど毎晩しているし、学会シーズンには、綿密な学会発表の準備もしている。普通の大学教員だったら、研究や教育で忙しかったら、家事の手を抜くとか、見たい映画を減らすとかするのであろうが、章子はそれはしない。普通に家事をこなし、両親の食事を整えて、映画を見に走り、おしゃれな服を仕立てて、学会に出かけている。章子のこなしした家事のいくつかを日記から拾い上げてみる。

風呂沸かし：m 講演中々かへってこない。ひとりでおふろたく(55/3/5)。W・Cの掃除や二階のガラス拭きの如き労働に専念する。[…]フロ、今日は1時間十五分でわく(55/12/2)。

掃除洗濯：朝の中は比較的すが／＼しかかったので喜んで洗濯する。しかし、午後のぐちゃ／＼した天気のため、もう一つよく乾かず(55/8/29)。掃除洗濯、靴みがき等朝の仕事たくさん(57/2/5)。洗たく四棹も。風きつく、寒くなった。ひるまで働き通し(57/2/10)。午前中、掃除洗濯、トイレ掃除(57/11/27)。すごい奮闘の一日。掃除、洗濯、WC、アイロン、明日の予習、書評、一切完了。いい気持なり(58/5/27)。

料理：マヨネーズを作り、床をはき[…](56/2/19)。夜ハンバーグ。表がはがこげてこまる(56/5/13)。コンビーフとパンのソテー、コリフラワーのからしすみそ。大根のシオモミ(56/11/26)。湯ドーフとハムモヤシキウリの二杯ず。(57/2/25)

つくろい物：夜は靴下つぎ、手紙書き(54/5/4)。夜はつくろい物に終わってしまう(56/12/14)。

mは母しづのこと、W・Cはトイレのことだが、風呂焚きに1時間15分もかかっている。「今日は」と言っているところからみると、それでもいつもより早くわいたのだろう。スイッチを入れて、10分もしないうちに「お風呂がわきました」と教えてくれる昨今の風呂沸かしからみたら、1時間以上もの間に何度も薪を入れて風呂を沸かすのは大変な労働だった。掃除洗濯はほぼ毎日だから、アイロンかけも頻繁にしなければならない、エアコンもないころの夏のアイロンかけでは汗みずくにもなる。料理もマヨネーズや、あえ物用にからしすみそまで作って本格的である。日本の食卓に入ったばかりの新しい野菜も当時は「コリフラワー」と呼んでいたらしい。

³ 寿岳章子(1999)「家事と母」『京都、大好き。』

5-2 おしゃれに使う時間は惜しくない

1950年代の衣生活は、今とはかなり違って、既成の衣服は型のきまったシャツやブラウスぐらいで、スーツやオーバーなどは生地をもって行って縫ってもらうオーダーメイドが中心だった。安月給の若い女性ではそれがかなわず、自分で作るために洋裁学校に通うのも盛んだった。

大学教師の章子は、専門の仕立て屋に頼むことができたが、毎回、布を買う—それを持って注文に行く—仮縫いに行く—出来たものを取りに行く、の4つの工程を繰り返す必要があった。多忙な章子にはその時間のやりくりも大変だったろうが、おしゃれにはかてなくて、いつもいそいそと仕立て屋の「ヒナちゃん」通いをしている。まず生地を買うところから始まる。章子は生地の名前も詳しい。

* 小林さんそこへ生地見に。グレンチェックを買う (55/2/25)。

* ローズ色のジャージー買う (55/3/16)。

* 欲しかったギンガムチェック買って帰る。柔らかなブラウスをつくってもらうつもり (55/4/21)。

* ドスキン買い、ヒナちゃん (56/11/21)。

小林ひな子さんが、章子のいきつけのドレスメーカーさん。日記ではもっぱら「ヒナちゃん」と呼んでいる。普通なら「チェック」ですませてしまうのを「ギンガムチェック」「グレンチェック」と区別し、一般的には男性の式服などにする重厚な「ドスキン」を買って、オーバーを仕立ててもらおうとしている。

生地が手に入るとヒナちゃんのところへ行って、その生地にあったデザインを相談して、発注となる。その1週間後ぐらいには仮縫いに行くという段取りである。

* 午前中、かりぬひ、小イキな感じで気に入ってゐる (53/9/17)。

* 午前中にヒナ子さんとこでかりぬひ。すてきにできそうでうれしいこと (55/10/13)。

仮縫いは、自分の選んだ生地とデザインがうまくマッチしているか、それが自分に似合いそうかどうか、体に合って着やすいかどうか、注文主としては非常に楽しみでもあり一抹の不安も感じるちょっとスリリングな段階である。この2日の記載は、どちらも、「小イキな感じ」、「すてきにできそう」と素直に喜んでいる。

次は最終段階の出来上がりである。

* オーバ、ジャンパースカート 美しく出来上り (53/12/10)。

* ひなちゃんそこへ。レインコート出来上がり。きっちりきれいにできた (56/6/5)。

美しくきっちりできた時はいいが、思いどおりにできて満足する仕上がりばかりではなかった。

*新しいスカートををはく、足がひらかずチョコチョコあるきでをかしい (54/11/18)。

3日前にできたばかりのスカートをはいてみたら、足が十分に開かないようなタイトなスカートだった。大柄の章子がチョコチョコ歩く姿を想像すると、やはりちょっとおかしい。結局、仕立ててもらったのは、オーバー・ブラウス・ジャンパースカート・ウエストスカート・スーツ・レインコート・ワンピース・ネマキと、下着以外の衣服のほとんどである。これだけのものの仕立注文に応じることができた「ヒナちゃん」は相当有能なドレスメーカーだったはずだ。

靴も神戸まで出かけて注文するし、ハンドバックも見るとつい買ってしまう、美容院にも多い時は月に2回3回と出かけている。おしゃれに時間とお金を使うのは惜しくない章子であった。

5-3 ほとんど毎週の映画鑑賞

章子は、忙しい忙しいと言いながら、月に何本も映画をみている。

*何というヘビー、六時起床、洗たく、映画「土曜はあなたに」(ベラエレン/アステア) 京大、日本考調べ、夜、原コウ 一時半就寝。スゴイ (54/6/8)。

*忙しい。洗たく、十時過ぎ学校。ひるまでしけん。午後いろいろの雑用で四時まで桂、[...] 四時半―五時半 NHK、高山市長との対談頼まれる。八木氏ひっぱりだして色々なことたのむ。それからテッカまき食べて「先生のお気に入り」みる。久々でしゃれた映画 (58/10/3)。

家事をして、映画を見に行き、大学へ行って調べ物をして夜は原稿を書く、そんなヘビーな日程を、自分でも「スゴイ」と感心している。58年10月3日もすごい。洗濯と大学の仕事をすませて、NHKの京都支局へ出向いて、市長と対談の番組に出演。ここには社会時事問題を語る評論家としての章子がいる。その後仲良しの八木氏を呼び出して何か頼みごとをしている。それが終わるとすし屋で鉄火巻を食べる。寿司の味もそこそこに映画館に飛び込んで、最終回の上映にぎりぎり間に合った。どんな多忙な中でも、章子は映画を見ることは犠牲にはしない。あるときは、「教授会合間にファンタジアみる」(55/11/14)こともあった。大学のすぐ近くに映画館があったのだろうか。あったとしても、ずいぶん落ち着かない「ファンタジア」見物だったにちがいない。

映画を見る頻度が、また、すごい。1週間に2回も見ることがあり、6本も見ている月もある。研究会参加には自分の発表もある、大学の講義には予備調べも必要、論文書きには文献調査と集中した分析作業が求められる、手抜きをしない毎日の家事、こうしたびっしりつまったスケジュールの日々に、加えて映画を見る時間とエネルギーをどこからひねり出していたのだろうか。

以下に章子が年に何本映画を見たか、日記中に書かれた映画をすべて拾い上げてみる。本稿で対象としている日記は1952年～58年のものだが、このうち52年と53年は日記にブラ

ンクが多いので、この2年間は除き、ほぼ毎日書かれている54年から58年までの日記に限ることにする。章子の30代は1950年代の日本の映画全盛期と重なっていた。

1954年 39本 (表記は日記による)

バンドワゴン、グレンミラー物語、エベレスト征服、白馬、素晴らしきかな人生、剣とバラ、ワニの王国、三文オペラ、偽りの花園、禁断の木の実、ダンボ
大自然の片すみ、戦慄の七日間、モガンボ、七人の侍、ローマの休日、山河はるかなり、土曜はあなたに、噂の女、愛情の瞬間、百万弗の人魚、黒いじゅうたん、ジョニイダーク、ドンカミロ、スミス都へゆく、探偵物語、波止場、恐怖の報酬、
ビーバーの谷、バンゴ、二十四の瞳、巨象の道、麗しのサブリナ、掠奪された七人の花嫁、女人のやかた、討入前夜、白き神々の座、近松物語、ホワイトクリスマス

1955年 30本

浮雲、東京の空の下で、警察日記、ブリカドーン、砂漠は生きている、ここに泉あり、オズの魔法使い、ピーターパン、スター誕生、喝采、The end of Affair、白鳥の湖、ブルースカイ、血槍富士、蝶々夫人、文なし横丁、ペンギン、ナポリの饗宴、deeping in my heart、遠い雲、旅情、あしながをじさん、コーティ、ファンタジア、緑の魔境、エデンの東、フレンチカンカン、市川馬五郎一家顛末記、浮草日記、続・警察日記

1956年 37本

ベニイグッドマン物語、子どもの眼、白い橋、ミスターロバーツ、恋愛準決勝戦、黒キツネ、ビルマの豎琴、ハリーの災難、姿なき一〇八部隊、滅びゆく大草原、リチャード三世、夜あけ朝あけ、戦争マ、ピクニック、必死の逃亡者、理由なき反抗、野郎どもと女たち、失われた大陸、真昼の暗黒、カラコルム、黄金の腕、ヘッドライト、回転木馬、誘拐、スイスワンワン物語、恋愛時代、女囚113号、他国者は殺せ、夜もすがら、沈黙の世界、赤い風船、空中ブランコ、夜の河、オセロ、生きていてよかった、白鯨、マナスル

1957年 19本

思春期の感情、汚れなきいたずら、追想、南極探検、罪と罰、道、動物たちはどこへゆく、揚子江死の脱走、翼よあれがパリの灯だ、青い潮、パリの不夜城、昼下りの情事 love in the afternoon、群衆の中のひとつの顔、喜びも悲しみも幾年月、おねえさんといっしょ、王子と乞食⁴、カピリアの夜、気違い部落、風前の灯

1958年 33本

絹の靴下、百獣の王ライオン、広場の天使、眼には眼を、情婦、菩提樹、蛍火、この目で見えたソ連、ふんだりけったり、マダムと泥棒、魅惑のパリ、いとしい殿方、戦場にかける橋、パリの休日、無法松の一生、杏っ子、スパイ、駅前旅館、若い獣、非情、女優志願、若き獅子たち、最後の接吻、野ばら、コママ、平和の谷、彼岸花、先生のお気に入り、死刑台のエレベーター、めまい、老人と海、針なき時計、ペリ

日本映画より外国映画の方が多い。外国映画も多岐にわたっているが、「ブルースカイ」

(55/6/7)、「あしながおじさん」(55/10/31)などミュージカルがかなり多い。「旅情」(55/9/3)のような純愛物も、また、フランスの社会派の監督の「目には目を」のように暗い深刻な映画もあるし、「ハリーの災難」(56/2/22)のような「気の利いた娯楽」作品もある。邦画では「血槍富士」(55/6/20)のような時代劇もあるし、夫婦愛を描く「喜びも悲しみも幾年月」(57/10/14)もある。何でも見てやろうという好奇心と、それを受け入れる大きな包容力と貪欲さがある。時には、映画から力も得ている。

*力づよい作品。神父がとても気に入った。些かペシミズムにおちいり、無為に逃避しかける昨今の私の心に些小の勇気を吹きおくれたやうだ。(「波止場」55/8/5)

と、内向きになりそうな自分への勇気づけとすることもある。忙しい日常の中でこうした数々の多様な映画を生活の一部に組み込み、趣味として娯楽として堪能しながら、章子は人間としての深みを増し、魅力ある人としての幅を広げていった。

⁴ この時期公開されていた映画は「王子と踊子」だが、章子はマーク・トウエインの小説名「王子と乞食」と混同して書き間違えたらしい。

6. 豪華華麗な交際録

章子の両親がすでに著名な文化人であり、両親の友人や師と家族ぐるみで付き合いもあったから、章子はその少女時代から京都の学者や文化人に触れることも多かった。しかし、30代の章子の日記に出てくる高名著名な人々は、章子自身の研究や学会活動を通じて獲得した人脈で、その豊かな交友録は、章子の物おじしない楽天ぶりと、人づき合いのよさのたまものであった。交わった人々との交流のひとつまや、章子の寸評を抜き出してみる。

6-1 京大関係の人々

新村出(1876-1967)

午前中、新村先生訪問。つもる雑談(54/10/27)。10時-12時イソポ予習、カビの生えた演習室にて。新村先生来訪さる(57/7/24)。洗たくを急いでしたあと後新村先生とこへゆく。久しぶりなり(58/8/13)。

遠藤嘉基(1905-1992)

六時半起床、下鴨へ。遠藤先生ごきげんうるはしくて来年の契約成立、うれしくてならぬ。やれ／＼(55/2/5)。遠藤先生とこゆく。ピアノがあつて、ギョツ、何ともいやはや。おひるご馳走になって帰る(57/1/10)。

池上禎造(1911-2005)

今晚はメンバーの少い研究会。でも池上先生はまじめにはなしてをられた(54/2/12)。久々で池上先生のお講義、わるくない。[……]夕食池上先生とごいっしょ。じよぼ／＼しゃべりながら食べるからおなが何となくいっぱい(54/9/30)。

浜田敦(1913-1996)

今昔の研究会、くたびれながらダベる。よくない。浜田氏のオールドミスよばりは実に困る。私だって、なげきやかなしみはあるのだから(55/2/12)。午後いつものやうに京大。又浜田氏とケンカ。ずいぶん簡単な頭脳構造の人だと思った(55/6/25)。京大研究会。浜田氏 私がコエタといふのでしゃくにさはる(57/2/2)。(下線は章子)

新村をはじめとして池上までは、師として仰ぎ見る存在であったが、浜田とは、大学院の先輩後輩の関係だったからか、率直なやりとりをしてよく「ケンカ」している。56 年当時、助教授になっていた浜田からは、今だったら 1 発アウトのひどいことばを浴びせられている。それに対して章子は「私だって、なげきやかなしみがある」とずいぶん弱々しくしおらしくつぶやいている。それほど「オールドミス」は女には痛いことばであった。反発や抗議でもしようものなら「ほら、だから…」とさらに傷口が広げられるから黙るしかない、男たちが女をいたぶるに有効で、それだけ、女たちにとっては致命的なことばであった。この 15 年ぐらいい後だったら、章子の胸のすくような啖呵が聞かれたであろうが、時代が少し早すぎた。

6-2 京大以外の言語学国語学関係者

服部四郎(1908-1995)

ひる学士会館にて服部四郎博士、大野氏、浜田氏と食事。上品なゼントルマン(54/10/10)。学会無事終る、やゝこしかったけれど、まづ盛況に終ってうれしかった。[…]ハットリ大先生の優雅なスタイルは内容とまっちしてとてもすてきなり(56/11/3)。亀井孝(1912-1995)

ゴウマンで全然面白くない人、でも人間は知識だの能力だけでもかなり一人前になるからこはいのである(54/5/31)。亀井さんのガ行音のはなし面白くよむ(56/8/21)。

金田一春彦(1913 - 2004)

金田一様よりの年賀状をうれしく思った(53/1/4)。六日にはゆくりなくも金田一さんが京大にこられ、イサハヤさんと京都駅までお送りした。国語学的人間としてはあんな完全な人はあるまいと思ふ(53/4/8)。

泉井久之助(1905-1983)

泉井先生にさんざんのおつきあひ。けったいな先生。でも虚々実々(のつもり)は面白い(57/2/16)。

築島裕(1925-2011)

築島氏の例の如きチミツさ(53/10/11)。築島氏さすがにしっかりする(58/6/8)。

大野晋(1919-2008)

大野さんから便り、返事をかく。バカに金田一氏にむきになってゐるからおかしい(53/6/25)。大野氏より来信。親しげな便り(53/10/29)。夜大野氏よりデンワ(55/10/29)。学会。にぎやかに。大野氏やけにくつつく(55/10/30)。夜大野氏と映画あしながをじさん(55/10/31)。

金田一のことを「国語学的人間としてはあんな完全な人はないと思ふ」と最上級のほめかたをして、その金田一にライバル意識をむき出しにする大野を「おかしい」というのである。大野とは手紙のやりとりもあり、京都の学会にすれば電話もよくかかってくる。大野が本を出すと送ってくる。誰とも鋭い論戦を繰り広げ、歯に絹着せぬ毒舌家として有名であった大野が、京都では章子と「あしながおじさん」を見ていたとは、ちょっと信じられない光景である。

6-3 ほかの専門の人々

清水好子 (1921-2004)

高島ヤで清水好子氏に出会ふ。みたらしだんごをともに買い、アイスクリームを食べ、別れた。あひかはらず勇ましい人(55/4/9)。

桑原武夫(1904-1988)

掃除、せんたくを終へて桑原氏との対談。徹底的なスタンダリアン (54/11/10)。桑原氏との対談、何だかもういやになって来た、ずるぶんおしゃべりなこと、何といっても限界のある人 (54/11/18)。午前中、桑原氏宅にての対談。そして今日の三回をもってうちきり、クビ。早くあぶれたものだと思ってこっけいな感じにおそはれた。(55/1/22)

このとき章子は助教授になったばかりの30歳、桑原はすでに数多くの著述、翻訳を世に出し、毎日出版文化賞も受賞して脂の乗り切った50歳の京大人文研究所教授。もっと何回も続く予定であった対談が結局3回で打ち切りになった。章子は、結局はくびになったようだが、スタンダリアンの桑原を「何といっても限界のある人」と言い切るあたり、おめず臆せず堂々と立ち向かう章子の面目躍如といったところ。この対談は結局ボツになったようで、桑原の当時の著作や対談などを検索してもそれらしいものは出てこないし、章子の側からみても、出来事に詳しい日記なのに、これに関しては一切出てこない。

井伏鱒二 (1898-1993)

井伏オジチャマのななかまどもらう。疑似閑談ある故なり。うれしく懐かしい気持(55/2/13)。井伏の白鳥のうた大そう面白かった。日常生活のしっかりした組み立て、といふやうなものの味はい(56/2/13)。

河野多麻 (1895-1985)

河野たまさんよりおたよりいたゞく。大そう実のこもったおたより、学問する女の人といふ線をひし／＼と感じた (54/2/17)。午後 河野与一・たまご夫妻及び浜田さん来られ、たのしい午後。与一先生まもなくかへられ、あと残りの人々で夕食を共にする。九時にたま夫人を送って三高会館へ(55/5/1)。河野さんにやっと長い手紙かく(57/9/16)。河野多麻は国文学者。1918年東京女子高等師範学校を卒業し教職に就くが、1928年、女子の入学を許していた大学の一つ東北帝国大学法文学部に入学。卒業後東北大時代に知り合った河野与一と結婚。章子にとっては、大学の大先輩である。章子は「多麻」を「たま」と表記していた。

女性が学問をすることの困難さを経験してきたたまの後輩への「実のこもった」手紙に同じ境遇を生きている章子はしみじみと感じ入っている。

たまは古典文学研究者として、特に「宇津保物語」の研究者として著名だったが、さらに高名な夫・与一との対等なカップルとして多くの知己や後輩に影響を与えた。河野夫妻の回想録⁵に章子は「よき生活者たま先生」と題するエッセイを寄せている。

もちろんお二方ともすぐれた学者でいらした。[……]私はそれ以上に、お二人の築かれた生活のみごとさに敬意を表するものである。(p. 293)

章子は戦前の東北大卒という自分と似た経歴のたまに親近感を抱き、たまの妥協を許さない真っ正直な生き方に共鳴し、生活者としてのたま妻夫に傾倒していた。先に日常生活を豊かにしそれを楽しむ章子の側面を詳しく述べてきたが、それはたま譲りであったのかもしれない。

⁵ 「河野先生の思い出」刊行会(1986)『回想 河野与一 多麻』

おわりに

偶然入手することができた章子の日記には、章子の学問への真摯な向き合いと生活を豊かにするさまざまな場面が繰り広げられていた。今回紹介できたのはそのごく一部に過ぎない。それにしても、対象に深く鋭く突き進み、四方八方を駆け巡り、貪欲に人と会い、映画を見尽くしたこのエネルギーとバイタリティはすさまじい。

国として人口減少の縮小段階を迎え、ともすれば閉塞感と諦観に陥りそうになる昨今、人々に元気を与えるビタミン剤、活を入れる覚醒剤としての章子の役割は一段と大きくなっている。

参考文献

- 寿岳章子(1952)「国語学入門講座 抄物とは」『国語学』国語学会第10輯
- 寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波書店
- 寿岳章子(1986)「よき生活者たま先生」『回想 河野与一 多麻』岩波ブックセンター 信山社
- 寿岳章子(1987)『向日庵抄物集全二巻』清文堂
- 寿岳章子(1999)「家事と母」『京都、大好き』ばる出版
- 遠藤織枝(2021)「『寿岳日記』の今日的意義—その文章的価値と女専時代の思惟を巡って—」『ことば』42号現代日本語研究会 251-268
- 遠藤織枝(2022)「『寿岳日記2』向学心探求心全開の東北大学時代」『ことば』43号現代日本語研究会 180-197
- 遠藤織枝(2023)「『寿岳日記3』食欲な研究生生活の院生兼専任講師時代」『ことば』44号同上 161-178
- 遠藤織枝(2024)「『壽岳日記4』多彩な交流関係と精力的な書評活動」『ことば』45号同上 pp.165-182
- 遠藤織枝(2024)『寿岳章子 女と ことばと 憲法と』かもがわ出版
- 「河野先生の思い出」刊行会(1986)『回想 河野与一 多麻』岩波ブックセンター 信山社
- 晩夏会(1998)『東北大学 女子学生の記録—昭和十八年十月に入学して—』非売品

付記 末筆になり、恐縮ですが、寿岳章子氏の日記を快くご提供くださった田中弘氏に心かの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

寿岳文章の工藝論 —ウィリアム・モリスと柳宗悦のはざまで—

島貫 悟（東北大学大学院国際文化研究科非常勤講師）

1. 寿岳文章の工藝論——再検討の必要性

英文学者、書誌学者、和紙研究家であり、民藝運動に加わったことでも知られる寿岳文章（1900-1992）は、晩年に自らの仕事を振り返り、次のように語っている。

私のやってきた仕事は、大きく分けて三つになると思う。一つは英文学を主軸とする外国文学の研究と翻訳。次の一つは、書物の美的ならびに社会学的機能の究明、残る一つは、愛着から来る和紙への学問的とりくみ、和紙学とでも名づくべきか。¹

寿岳は、これら三つの領域それぞれにおいて、代表的なものだけを挙げても、ウィリアム・ブレイク（William Blake, 1757-1827）の詩ならびにダンテ『神曲』の翻訳、私家版・向日庵における本の出版、『紙漉村旅日記』としてまとめられた全国の手漉き和紙調査といった優れた業績を遺した。このように、文学研究から書物作り、フィールドワークまで、理論と実践の多分野にわたる寿岳の全体像を捉える上で、「〔寿岳のなかでは〕大きな三者の核が つねに結びつき、統一を求めて、個人のなかでたえずひとつの連続性をかなでて、強靱な統合性をうみだしていった」²ことに注意する必要があることを中島俊郎は指摘している。

とりわけ、第二の領域における私家版製作ならびに出版文化史研究と、第三の領域における和紙研究とは、いずれも工藝あるいは民藝（民衆的工藝）への関心に根差した仕事であったという点で、密接に関連していたとすることができる。

実際、これまで民藝運動における寿岳の貢献は、主に「書物の工藝」と「和紙の研究」という二つの側面から捉えられてきた³。このうち、寿岳の書物論の特徴とその意義については、すでに佐藤光による精緻な分析があり⁴、後者の和紙研究についても、中島の論文によってその業績が詳細に跡付けてられている⁵。

¹ 寿岳文章「和紙と私」〔1976年〕『わが日わが歩み——文学を中軸として』荒竹出版、1977年、322頁。

² 中島俊郎「ある英文学者の肖像——壽岳文章」『甲南大學紀要 文学編』162号、2012年3月、31頁。以下、亀甲括弧〔 〕内の記述は筆者による。

³ 神田健次「寿岳文章の仕事の軌跡」『民藝』（特集：寿岳文章と民藝運動）835号、2022年7月号、11-14頁。

⁴ 佐藤光「寿岳文章の『書物の共和国』——対話のある共同体を目指して」『向日庵』4号、2021年3月、13-30頁。

⁵ 中島俊郎「寿岳文章の和紙研究」『甲南大學紀要 文学編』172号、2022年3月、63-76頁。

しかしながら、書物や和紙といった具体的な工芸ジャンルに対する寿岳の考えとは別に、工芸一般に対する寿岳の考えがどのようなものであったのかについては、これまで十分に論じられてこなかったように思われる。その背景には、寿岳が一般に、柳宗悦(1889年-1961年)の民藝論に賛同し、書物や和紙の研究を通じて民藝運動に貢献した「同人」の一人として認識されてきたことがあると考えられる。しかし、すでに指摘されているように、寿岳は時として民藝運動のあり方に対して批判を向け、工芸に関する問題について独自の見解を有していた⁶。そのため、寿岳の工芸理解は必ずしも柳と一体のものではなかったと言える。

そこで、本論文では、以上の先行研究を踏まえつつ、工芸一般に関する寿岳の思想を明らかにすることを目指す。というのも、工芸に対する寿岳の基本的な考え方を確認することは、寿岳が手がけた書物や和紙の研究を総合的に理解する上で不可欠であり、さらに、そうした考察は、民藝運動における寿岳の思想的貢献を適切に評価するためにも重要であると考えられるからである。

こうした検討を進めるにあたり、本論では寿岳がウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) について論じた文章と、民藝について論じた文章に焦点を当てる。なぜなら、東西を代表する工芸論者である柳とモリスの思想に寿岳がいかに向き合ったかを明らかにすることは、工芸に関する寿岳自身の思索を辿ることに他ならないからである⁷。

以下ではまず、寿岳が1934年に著した論考「ウィリアム・モリスと柳宗悦」の内容を分析し(第2節)、次に、モリスの工芸論に対する寿岳の理解の変遷を辿る(第3節)。その上で、戦後の民藝運動のあり方に対する寿岳の批判とその背景を検討し(第4節)、最後に、寿岳による工芸論のもつ意義について考察したい(第5節)。

2. 「ウィリアム・モリスと柳宗悦」(1934年)——寿岳による比較論とその意義

(1) 論文の背景と寿岳の意図

「ウィリアム・モリスと柳宗悦」(原題:「二つの工芸論——モリスと柳宗悦」)は、1934年に雑誌『英語青年』のモリス生誕100周年記念号に寄せて書かれた論文である。この論文は、寿岳による最初期のモリス論であると同時に、柳の民藝論を本格的に取り上げた初めての文章でもあった。寿岳は、この論文において対比研究の手法を用い、モリスと柳の工芸論を比較し、その共通点と相違点を分析することを試みている。そうしたアプローチを採用した理由について、寿岳は次のように述べている。なお、この部分は後の改訂版では削られたため、『英語青年』掲載の初版から引用する。

⁶ 中島俊郎「寿岳文章と柳宗悦」『民藝』(特集:寿岳文章と民藝運動)835号、2022年7月号、13頁。

⁷ 本論文は、拙著『柳宗悦とウィリアム・モリス——工芸論にみる宗教観と自然観』(東北大学出版会、2024年)における議論を、寿岳の思想を中心に発展させたものであることから、内容の一部が重複する。

思ふに、毒にも薬にもならぬやうな、誰にでも言へるモリス論をやつたり、作品の翻訳や注釈をちよこまかと小器用にやつたりすることだけが、モリスの生誕百年を記念する立派な道でもあるまい。(中略)モリスの精神が、彼の後に来たものの中にいかに強く生かされ、またいかに正しくされてゐるか、それを考えるのが、ことにモリスの如く「実行」を尚んだ藝術家を景慕する所以であらうと私は確信する。⁸

既存のモリス研究に対するいかにも寿岳らしい辛口の批判が滲み出た文章である。だが実際、寿岳の論文は日本におけるモリス受容史の中で、モリスと柳の思想を軸に、アーツ・アンド・クラフツ運動と民藝運動を客観的に比較した最初の論文であったという点で、大きな意義を持つ。

もっとも、アーツ・アンド・クラフツ運動の主たる起源となったモリスとジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の思想が、民藝の成立にどのような影響を与えたのかについては、柳自身がすでに『工藝の道』(ぐろりあそさえて、1928)の中で語っている。よく知られているように、柳はそこで「私は私の工藝美に関する思想に於て極めて孤独である。幸か不幸か私は先人に負ふ所が殆どない。〔中略〕私は私の思想を凡て私の直観と内省との上に築く事を余儀なくされた」⁹と述べ、民藝運動をラスキンやモリスの延長線上に位置付ける見解を退けた。

その上で柳は、「工藝美論の先駆者」としてのラスキンとモリスの思想ならびに実践について、自身の考えを示している。特にモリスについては、産業化が推進された近代において、工藝の価値を復興しようと試みた意志を高く評価した一方、モリスがデザインした作品については、工藝的というよりむしろ「美術的」¹⁰であると批判した。

なお、これまでの柳研究においては、以上の柳の言説を「独創性の神話」¹¹と見なし、その信憑性に疑義を呈する見解も示されてきた。しかし、佐藤が指摘するように、柳が民藝論の成立に関して、自身の独創性を主張したと捉えることは、必ずしも正確な理解ではない¹²。なぜなら、柳の論旨は、民藝を巡る思索の中で、ラスキンやモリスといった先駆者の思想は当然ながら参照したものの、それらをそのまま受け入れることはできず、批判的に乗り越える必要があった、というものであり、それ以上ではないからである。思想家・宗教哲学者で

⁸ 寿岳文章「二つの工藝論——モリスと柳宗悦(上)」『英語青年』72巻4号、1934年11月号、119頁。

⁹ 柳宗悦『工藝の道』[1928年]『柳宗悦全集』全22巻、筑摩書房、1980年-1992年、8巻、194頁。

¹⁰ 柳『工藝の道』『柳宗悦全集』8巻、204頁。

¹¹ Yuko Kikuchi, *Japanese Modernisation and Mingei Theory: Cultural Nationalism and Oriental Orientalism*, London and New York: Routledge Curzon, 2004. p. xv.

¹² 佐藤光『柳宗悦とウィリアム・ブレイク——環流する「肯定の思想」』東京大学出版会、2015年、469頁。

あった柳は、過去の思想がいかに偉大なものであっても、それを鵜呑みにせず、批判的に吟味する態度で向き合った。そうした姿勢は、ラスキンやモリスに対しても一貫していたのである。

寿岳の論考は、アーツ・アンド・クラフツ運動と民藝運動の関係について、柳自身の主張を踏まえつつ、モリスと柳の工藝論を改めて客観的に比較し、それぞれの特徴を明らかにしようとする試みであった。そして、この論文において寿岳が示した理解は、藤田治彦が指摘するように、柳自身によるモリス論とともに「その後、半世紀以上、20 世紀後半まで保たれることになる、日本における柳モリス比較論の基調を形成した」¹³のである。

(2) 「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」の内容

寿岳はまず、モリスと柳の共通点として、両者がいずれも造形藝術を二種類に分類し、それぞれ「大藝術 (The Greater Arts)」「小藝術 (The Lesser Arts)」、「^{じょうてもの}上手物」「^{げてももの}下手物」と呼んだことを指摘し、「それぞれ幾分か共通するものをもっているであろう」と述べている。この寿岳の指摘は、正鵠を射た見方であると言える。なぜなら、「上手物」と「大藝術」は、主に絵画や彫刻などの純粹藝術 (fine arts) を指す概念であるのに対し、「小藝術」と「下手物」は、いずれも家具や什器といった実用的な工藝品を指し、今日の美学では応用藝術 (applied arts) と呼ばれる藝術区分に相当する概念だからである¹⁴。

その上で寿岳は、モリスと柳がともに「一時代の工芸の正しい姿を、富豪や君侯の大邸宅をかざる豪華な美術品によりも、民家のつつましい手まわりの道具のなかにもとめた」¹⁵ことを指摘し、そうした両者の態度には「民衆と芸術、生活と芸術のつながり」¹⁶を重視する本質的な共通性が認められると述べている。すなわち、モリスと柳の工藝論は、大藝術より小藝術を、上手物より下手物の美を称揚することによって、民衆の日常生活から乖離した近代以降の藝術のあり方に対して、根本的な見直しを迫る試みだったのである。

さらに寿岳は、既存の美術史や美学の枠組みに異を唱えた両者に共通する特徴として、「自我意識にわずらわされておごり高ぶろうとするルネサンス以降の芸術よりも、伝統のままに生きてすべてがすなおであり謙遜であったゴシックの芸術をよろこんだ」¹⁷点を挙げ、いずれも中世に一つの理想を見出したことを指摘している。そうした立場は、今日では一般に「中世主義 (medievalism)」と呼ばれるものだが、寿岳は「工芸の美を考えるものは、

¹³ 藤田治彦「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌——ウィリヤム・モリスと柳宗悦をめぐって」『美学』54 巻 1 号、2003 年 6 月、21 頁。

¹⁴ 純粹藝術、応用藝術の区別については、竹内敏雄編『美学辞典 増補版』弘文堂、1992 年、215 頁を参照。

¹⁵ 寿岳文章「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」[1934 年]『寿岳文章書物論集成』沖積舎、1989 年、484 頁

¹⁶ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』485 頁。

¹⁷ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』484 頁。

どうしてもこの、造形芸術にみな一様の地位が与えられていた中世期を回顧し、そこにひとつの歴史的事実を把握することによって、目前に見る空間芸術の個人主義的分離を悲しまずにいられない。ラスキンもモリスも、柳も、その点ではみな同じなのである」¹⁸と語り、工藝論者が中世に理想を見出すことには必然性があるという理解を示している。なお、柳自身も「ラスキン・モリスは中世紀を好き過ぎると云つてよく非難された。今でも時々さう云ふ批評を聞く。併し私の考へでは浅はかな評だと思へない。物が見える人なら中世紀に驚く筈なのである。驚いても驚ききれないほどの美しさや深みがあるのである」¹⁹と語っており、中世主義についての寿岳の見解は、柳の考えと軌を一にしていたと言える。

一方で、寿岳は両者の相違点について、「もっとも肝要な『工芸のすくい』の問題にきて、モリスと柳との道は別れる。別れるというよりは、一本の道ではあるが、柳はモリスよりさらにかなたへ、さらに奥深く進んだ」²⁰と述べ、次のように語っている。

「芸術とは、はたらくとき人間が感ずるよろこびの表現である。」というモリスの定義を、世の多くのモリス崇拜者は金科玉条とこころえて、そこから、モリスの芸術観を発展させるのがつねである。だが、この定義は、無条件に承認されてよいか？労働によろこびを感じるときしかよい芸術は生まれないか？よろこびとか、悲しみとか、そうした個人的な感情を去って、つくられた物自体に、芸術としての価値が生まれることはありはしないか？²¹

寿岳はこのように、モリスの藝術論の中心的命題である「藝術とは労働における人間の喜びの表現である (ARTIS MAN'S EXPRESSION OF HIS JOY IN LABOUR)」²²という、モリスの思想の中でも最もよく知られた主張を批判する。そして、「もしモリスのように、芸術を労働における人間のよろこびの表現と解するなら、労働によろこびの見いだされない現代のような資本主義金権下に、芸術は存在しえなくなる」²³と述べ、モリスの立場を乗り越える思想として、柳による次の言葉を引用する。

時として其仕事は、好まないものでさへあつたであらう。止めたいと思ひ乍らも手を下したであらう。時に子供は泣く々々手伝つたこともあるであらう。(中略)だが其作には美しさがある。彼等は識らずとも、驚くべき美しさがある。凡ての作は救はれてゐる。作る者は此

¹⁸ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』480頁。

¹⁹ 柳宗悦「工藝雑語」[1934年]『柳宗悦全集』8巻、587頁。

²⁰ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』485頁。

²¹ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』485頁。

²² William Morris, "Art under Plutocracy", [1883], in *Lectures on Socialism*, in *The Collected Works of William Morris*, 24 vols., ed. by May Morris, London: Longman Green, 1910-1930, vol.23, p.173.

²³ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』486頁。

世の凡夫であらうとも、作る器に於ては既に彼岸の世に生きる。自らでは識らずとも、凡てが美の浄土に受けとられてゐる。凡夫の身にさへも、よき作が許されるとは何たる摂理であらう。そうしてそれが悉く浄土の作であるとは、何たる恩寵であらう。²⁴

ここで述べられた柳の主張は、「凡夫」「彼岸」「浄土」といった仏教用語が用いられていることから明らかなように、浄土教を中心とした仏教思想を背景としている。すなわち、柳は、浄土教において、たとえどのような凡夫であろうとも、阿弥陀仏の他力^{たりのき}に頼り、一心に念仏を称えることで、往生することが約束されるように、工藝の世界においては、無名の工人であろうとも、無心で製作する中で、人智を超えた力の働きを受け、作品には至高の美が宿ると主張したのである。そして柳は、工藝がもつそうした特徴を「他力美」²⁵と呼び、それこそが、特別な才能に恵まれた藝術家が自らの創意によって生み出す美術とは異なる、工藝独自の美の本質であると考えた。

寿岳は、柳によるこうした主張について、「ここには工芸を縁とし、他力の安心を根として、宗教の密意がかたられている」と述べ、「モリスの工芸論にこの深さはなく、この信仰はない。モリスの工芸論が、柳のそれにおよばないゆえんがここにある」²⁶と結論付けた。すなわち、柳とモリスの工藝論の最大の相違は、その宗教性の有無にあるという理解を寿岳は示したのである。

寿岳による以上の対比について、藤田は「何故に、工芸論の優劣を宗教的深さで判断すべきなのであろうか」²⁷と述べ、寿岳が宗教性の深さを工藝論の評価基準とした点を批判している。寿岳が、民藝論の中でもとりわけ「工芸のすくい」の問題に着目した背景には、寿岳自身が真言宗の寺に生まれた仏教徒であり、宗教に造詣が深かったことも関係していたと考えられる。しかし、寿岳の着眼は単なる宗教的偏向に基づくものではない。

というのも、無名の工人による製作を浄土教の他力思想と結びつけることで、工藝の本質を再定義した柳の主張は、民藝論の核心をなす思想であり、決して周辺的な要素ではなかったからである。寿岳は、仏教思想を背景とする柳の宗教的主張を正確に理解した上で、それを「藝術とは労働における人間の喜びの表現である」というモリスの工藝論の中心的命題と対比し、両者の思想の根本的な違いを見究めようとした。モリスと柳の主張の核心を的確に捉え、それらを対照することで両者の本質を浮かび上がらせようとしたことは、寿岳の慧眼であったと言えるであろう。

(3) 寿岳による比較論の影響とその功罪

寿岳による以上の比較論は、関西学院神学部出身の牧師で、倉敷民藝館の館長を務めた外

²⁴ 柳『工藝の道』『柳宗悦全集』8巻、82頁。

²⁵ 柳『工藝の道』『柳宗悦全集』8巻、62頁。

²⁶ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』487頁。

²⁷ 藤田「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌」『美学』54巻1号、20頁。

村吉之介（1898 年-1993 年）に引き継がれたことが確認できる。外村は、1973 年の日本民芸協会全国大会の記念講演において、寿岳による論考を敷衍するかたちで、モリスと柳の類似点および相違点を改めて考察している。

特に外村は、両者の相違点について、『工藝の道』から寿岳と同じの箇所を引用した上で、「この宗教的な深さは、モリスには全く見られなかったものでありますが、柳先生はそれの事実を見つめ、信じ、それに仏教の光をあてて、在来の論理的な美学のなしえなかった、美の解き明かしをなされ、東洋美学ともいふべき灯火を掲げられたのであります」²⁸と述べている。外村は、この講演で寿岳の論文に言及してはいないものの、外村の理解が寿岳の論文に依拠したものであったことは明らかである。

さらに、外村によれば、この講演を聞いたバーナード・リーチ (Bernard Leach, 1887-1979) は、「君の話、英国の雑誌にのせよう。モリスは崇められているが、彼以上の柳が知られていない」²⁹と語り、宗教性の深さという観点から柳の工藝論をモリスと対比する主張を国際的に発信することを提言したという。リーチによるこの提案が実現した形跡は、管見の限りでは確認できない。しかし、この逸話は、寿岳による比較論が戦後に至るまで、民藝運動のアイデンティティを国際的視点から考察する上で、大きな影響力を持ち続けたことを物語っている。

ただし、モリスと柳の相違点に関して、モリスの工藝論に宗教性がなかったとする理解は、必ずしも正確ではない。この点について詳述することは本論の趣旨から逸れるため、拙著『柳宗悦とウィリアム・モリス——工藝論にみる宗教観と自然観』（東北大学出版会、2024 年）の第 II 部をご参照いただきたいが、モリスの著作を幅広く読んでいくと、モリスの工藝論の背後にも、独特な宗教観や自然観が存在していたことが明らかになる。とりわけ、キリスト教的人類愛の思想や、古代北欧の自然観に基づく自然との一体性の重視は、「藝術とは労働における人間の喜びの表現である」という主張の思想的背景として看過できない要素である。したがって、モリスと柳の工藝論の相違は、単なる宗教性の有無という視点ではなく、それぞれの思想の背後にどのような宗教観・自然観が控えていたのかを軸に再考されるべきである。しかしながら、そうした比較研究の端緒を開いたのが寿岳であったことの意義は、改めて強調しておきたい。

3. 寿岳のモリス研究——その発展と深化

寿岳は、「ウィリアム・モリスと柳宗悦」を『寿岳文章書物論集成』（1989 年）に再録した際、「いまそれを読んでみても、論旨はあやまっていないと思う。日英文化の理解を深めるためにも、多少の役立ちとなろうと考え、ここに再録する」³⁰と述べている。このこと

²⁸ 外村吉之介「柳宗悦とウィリアム・モリス」[1973 年]『民芸遍歴 続』朝日新聞社、1973 年、23 頁。

²⁹ 外村「柳宗悦とウィリアム・モリス」『民芸遍歴 続』28 頁

³⁰ 寿岳「ウィリアム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』476 頁。

は、寿岳の中で、柳とモリスの比較論の当初の枠組みや、両者の共通点と相違点に関する認識が、その後も大きく変わることなく、一貫していたことを示唆している。

しかし、寿岳は「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」を執筆した後も、さまざまな角度から継続的にモリスについて論じており、それらは寿岳の死後に『モリス論集』（沖積舎、1993年）としてまとめられた。そこで、以下では、モリスに関する寿岳の論考を年代順に追い、その記述の展開を追ってみたい。

まず、「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」が『英語青年』に連載されたのと同じ1934年に、寿岳は『モリス記念論集』に「書物工芸家としてのモリス」を寄稿している。この論文では、ケルムスコット・プレスにおけるモリスの事業が詳細に紹介され、概ね肯定的な評価が示されている。

寿岳は、モリスの業績の中でも特にケルムスコット・プレスでの事業に着目する理由について、「書物工芸家としてのモリスを語ることは、数ある彼の工芸的活動の中から、最も重要な一つ、最もすぐれた一つを取りあげることであり、やがてまた工芸家としてのモリスの偉大を讃仰する因縁にもなろうか、と私は考えたのである」³¹と述べている。なお、柳も「彼〔モリス〕の遺作のうち、恐らく最も難の無いのはケルムスコット Kelmscott 版の刊本である」³²と語っており、モリスがデザイナー・工芸作家として製作した作品の中で、ケルムスコット・プレスで刊行された書物をその白眉と見なす考えを寿岳と共有していた。ただし、寿岳と柳はいずれも、ケルムスコット・プレスの本が装飾過多であり、必ずしも読みやすいものではなかった点を批判していた。

他方で、「書物工芸家としてのモリス」では宗教に関する議論は登場せず、管見の限り、寿岳がモリスを論じた他の文章においても、宗教との関連でモリスを論じた記述は確認できない。このことは、寿岳の中で、モリスの工芸論における宗教性に着目する観点が、柳との比較を通じて初めて、明確に浮かび上がったことを示唆している。

さらに、「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」の20年後、1954年に再び『英語青年』に掲載された小論「ウィリヤム・モリス」の中で、寿岳は20年前の記述を振り返り、「モリスに対しては少し厳に過ぎ、柳宗悦氏に対しては少し寛に過ぎた評価であったように今は考えられる」³³と述べている。

その上で寿岳は、モリス商会のタペストリーのためにモリスが作った詩「タペストリーの木々」（“Tapestry Trees”）の一節を引用し、次のように語っている。なお、この詩は、1891年にケルムスコット・プレスから刊行された詩集『道道の詩』（*Poems by the Way*）に収められている。

モリスの詩のあるもの、たとえば Marton Mabby で織られた tapestry のための短詩、

³¹ 寿岳文章「書物工芸家としてのモリス」〔1934年〕『寿岳文章書物論集成』438頁。

³² 柳『工藝の道』『柳宗悦全集』202頁。

³³ 寿岳文章「ウィリヤム・モリス」〔1954年5月〕『モリス論集』25頁。

I draw the blood from out the earth;

I store the sun for winter mirth.

私は大地から血汐を吸い上げる。

私は冬を楽しむために太陽をたくわえる。

とか

Amidst the greenness of my night,

My odorous lamps hang round and bright.

わが夜の緑のしたたる中にして

かおりよきランプかかれりきらきらと。

などには、一口に romantic decadence と言っても、D. G. Rossetti や Swinburne のそれとは異なるところの、もっと健康でたくましいものを具えていると見るのは、鼯鼠のひきだおしであろうか。³⁴

寿岳が引用した以上の二連には、原文ではそれぞれ「ブドウの木 (Vine)」「オレンジの木 (Orange-tree)」という題が付けられている。つまり、モリスはこの二行対句によって、異なる木の個性を象徴的に描いているのだが、寿岳はこれらの詩に、健康で力強い詩情が備わっていると主張する。しかし、寿岳が「タペストリーの木々」に詩人としてのモリスの真骨頂を見出した理由はそれだけにとどまらない。というのも、寿岳は、タペストリーに織り込むために作られたこれらの詩句の背後に、詩作と職人の手仕事とを同種の営みとして捉えるモリスの思想を読み取っているからである。

この点について寿岳は、7年後に刊行された『英米文学史講座』（研究社、1961年）の中で、同じ詩の一節を引用した上で、次のように述べている。

彼〔モリス〕は布を織り、革を染めるように、ステインド・グラスを焼きつけ、煉瓦をつみあげるようにして詩を作った。ラファエロ前派の他の詩人たちにあっては、きわめて自意識的なあとをとどめる詩の創造も、彼にあっては、楽しんでする工芸の一部門でしかなかった。工芸的な立場からモリスの詩を読みなおすと、感銘はまた別のものとなる。これは詩人モリスに近づく重要な参道の一つであろう。³⁵

³⁴ 寿岳「ウィリアム・モリス」『モリス論集』26-27頁。

³⁵ 寿岳文章「ケルムスコット・プレス」[1961年]『寿岳文章書物論集成』504頁。モリスの詩の出典は、William Morris, "Tapestry Trees", *Poems by the Way*, [1891], *The Collected Works of William Morris*, London: Longmans Green & Co., vol. 9, p. 194. なお、モリスのデザインと詩作の連続性に注目する寿岳の論旨は、川端康雄「タペストリーの詩人」『ウィリアム・モリスの遺したもの——デザイン・社会主義・手しごと・文学』（岩波書店、2013年）105-115頁において敷衍されている。

民衆による民衆のための藝術を理想とし、生活と遊離した、一部の人々のみが享受する藝術を批判したモリスは、「詩的靈感 (inspiration) などという話はまったくのナンセンスだ。はっきり言おう、そんなものは存在しない。詩作とはただの職人仕事 (craftsmanship) にすぎない」³⁶と語り、「もしある男がタペストリーを織りながら叙事詩の一つも作ることができないようなら、そいつは口を噤んだ方がいい。決して大成することはないだろうから」³⁷と喝破したという。これらの言葉は、モリスが詩の創作を、一部の天才にのみ許された特別な営みとは考えず、ある一定の訓練を積みさえすれば、普通の人々にも可能な活動であると捉えていたことを示している。それゆえ、モリスは、詩作と職人仕事を本質的に異なるものとみなす通念を厳しく批判した。寿岳は、「タペストリーの木々」の背後に、詩作と職人仕事の境界を取り払おうとするこうしたモリスの思想を読み取ったのである。

さらに、寿岳は明言していないものの、「タペストリーの木々」は、モリスの自然観が表現された詩でもある点に注目したい。自然を擬人化すること自体は英詩の伝統において珍しいことではないが、この詩では擬人化に加えて一人称の語りが用いられることで、木々が読者に直接語りかけてくるような印象が生み出されている。また、先行研究において、モリスが晩年に創作した散文ロマンスを分析したアマンダ・ホジソンは、モリスがそれらの作品を創作する過程で、古代北欧文学における樹木信仰を参照していたことを明らかにしている³⁸。さらに、川端康雄は、モリスの文学作品を理解する上では、「韻文、散文の相違を基本的に区別せずに、創作全般を『ロマンス』という大枠でくくって、その象徴世界を読みといてゆくのがひとつの有効な行き方」³⁹であることを指摘している。しがたって、以上の点を考慮すると、「タペストリーの木々」の背後にも古代北欧の自然観との繋がりを認めることが可能であると考えられる。寿岳がこの詩に注目したことは、モリスの独特な自然観に対しても、寿岳が関心を寄せていた可能性を示唆しており、興味深い。

寿岳はまた、モリスのフェローシップ (fellowship) の思想にも注目していた。寿岳は、1936 年の日本民藝館竣工に際して書いた文章の中で、「多くの結縁者の協働がいよいよ切に思念される。『友誼の絶滅は死である』と言ったモリスの言葉は、工芸の場合、特に一層然るを覚える」⁴⁰と語り、「友誼」に特別な価値を置くモリスの思想に言及している。寿岳が「友誼の絶滅は死である」と訳した言葉は、モリスの小説『ジョン・ボールの夢』(*A Dream of John Ball*, 1888) に登場するもので、原文では“lack of fellowship is death”⁴¹と記されてい

³⁶ J. W. Mackail, *The Life of William Morris*, 2 vols., London: Longmans, Green, 1901, vol. 1, p. 186.

³⁷ Mackail, *The Life of William Morris*, vol. 1, p. 186.

³⁸ Amanda Hodgson, *The Romances of William Morris*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, pp. 182-183.

³⁹ 川端「タペストリーの詩人」『ウィリアム・モリスの遺したもの』113 頁。

⁴⁰ 寿岳文章「民芸館と私」[1936 年]『柳宗悦と共に』121 頁。

⁴¹ William Morris, *A Dream of John Ball*, [1888], in *The Collected Works of William Morris*, vol.

る。社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』（*Commonweal*）に連載されたこの小説は、ワット・タイラーの乱を題材とし、モリスの社会思想が強く反映された作品である⁴²。

寿岳は、民藝館の発展には多くの人々の協働が必要になることを述べた上で、モリスが文学作品の中で表したフェローシップの思想を、工藝の本質を突く言葉として引用している。文脈上、自然な流れの中でさりげなく用いられた引用ではあるが、日本民藝館の開館という節目に書かれた 2000 字ほどの文章の中で、寿岳があえてモリスに言及している点は印象的である。寿岳が、民藝運動の新たな門出に際し、改めて近代工藝運動の先駆者であるモリスを敬慕していると読むのは、深読みだろうか。

また、寿岳はモリスの社会主義についても、「深い思想」として重視していた。以下は、寿岳が最晩年の 1991 年に、ケルムスコット・プレス創設 100 周年を記念して記した言葉である。

近代の資本主義を考える上で、好むと好まざるとにかかわらず、マルクスの『資本論』は、不滅の存在と私は考えるが、モリスもまた、人文学史上の古典としてのマルクスの『資本論』を熟読味読し、その結果をみずからの仕事にあらわしたのである。モリスの業績は、単なるデザイナーとしてのそれに非ず、深い思想からみちびかれたものであった。それは生ぬるく中途半端ではないはげしくつきつめたものであった。⁴³

寿岳はここで、モリスのデザイナーとしての仕事の背後に、マルクス『資本論』の熟読を通じて内面化した社会主義の思想があったことを強調している。なお、『資本論』に対するモリスの関心について、寿岳はすでに 1938 年の論考「モリスと資本論」で考察している。この論考の中で、寿岳は「モリスは、よしマルクスと対蹠の位置に立ちはしなくとも、両者のあいだに、かなりのへだたりがあることを、依然として、私は認めないわけにはゆかないのである」⁴⁴と述べ、モリスを「純粋なマルクシスト」とみなす見解には慎重な立場を取っている。しかし同時に、モリスがマルクスやエンゲルスの「科学的社會主義」とは異なる立場から、社会主義を工藝の問題と結びつけた点に注目していた⁴⁵。

以上のように、寿岳はモリスの思想について、生活と藝術の一致という理想、自然観、フェローシップの思想、そして社会主義にまで及ぶ多面的な側面に目を配りながら、理解を深めていった。モリス研究には、それぞれの専門分野の枠内で、モリスの業績の一面だけを捉えたものも少なくない中、寿岳が、詩人・デザイナー・工藝職人・社会主義者としてのモリ

16, p. 230.

⁴² 「フェローシップ」の思想についての詳細は、拙著『柳宗悦とウィリアム・モリス』97-104 頁を参照。

⁴³ 寿岳文章「あらためてモリスを憶う」[1991 年]『モリス論集』142 頁。

⁴⁴ 寿岳文章「モリスと資本論」[1938 年]『モリス論集』72 頁。

⁴⁵ 寿岳「モリスと資本論」『モリス論集』71 頁。

スの思想と実践を総合的に捉え、その全体像を把握することを常に心掛けていたことは、研究者としての寿岳の卓越した力量を裏付けている。

4. 戦後の民藝運動に対する寿岳の批判——三宅忠一との関係を軸に

以上、寿岳のモリス理解について見てきた。次に、寿岳と民藝運動の関わりについて検討したい。

寿岳は、1947年に京都民藝協会創立と共に初代会長に就任し、1953年まで務めるなど、民藝運動の中で中心的役割を担った⁴⁶。しかし、神田健次が指摘するように、「その中で特筆すべきは、日本工芸館理事長としての働きである」⁴⁷。

日本工芸館は、1950年に民藝運動の主要メンバーの一人であった三宅忠一（1900年-1980年）によって大阪に設立された。三宅は、『工藝の道』に感銘したことがきっかけで、1930年代から民藝運動に加わったが⁴⁸、柳らとの意見の対立により、日本民藝館と袂を分かち形で日本工芸館を創設した。寿岳は、財団法人日本工芸館の理事長に就任した理由について、「民芸運動に献身する氏〔三宅〕の熱意に動かされたからであった」⁴⁹と語っている。しかし、柳の民藝論を高く評価していた寿岳は、なぜあえて柳と対立した三宅を積極的に支持したのだろうか。この背景には、単なる個人的な関係を超えた、思想的な要因があったと考えられる。以下では、この問題を中心に据え、民藝運動と寿岳の関わりを考察する。

まず、寿岳が支持した三宅の主張がどのようなものであったのかを確認しておこう。三宅は戦後の講演で次のように語り、柳が主導する民藝運動のあり方を批判している。

われわれはあなた〔柳〕の提唱が正しいと思えばこそ、無条件であなたの運動に飛び込んできた。それは無名の工人のつくったものは伝統におおわれているだけにスケールが大きい。個人作家などはそのスケールについてはとても及びがつかない。日本にはそんなものがまだまだ残っている。だからそれらを育成し、大衆の生活の中で使わす運動によって日本の工芸文化の向上に寄与することになるのだ。これはなんともすばらしい仕事ではないか。これがあなたのいままでの主張であり、その主張にわれわれは賛成して大々的な運動を展開してきている。ところが、それが終戦後になるとあなたの周囲はほとんど個人作家で包囲されてしまい、肝心の民芸が二次的になってしまい、美術工芸が第一次運動になっているように受け取られる。⁵⁰

⁴⁶ 「年譜」『寿岳文章——領域なき探究：英文学、民芸、和紙研究』展図録、関西学院大学博物館、2023年、73頁。

⁴⁷ 神田健次「民藝運動と関西学院——雑誌「工藝を中心として」『時計台』（関西学院大学）81号、2011年、12頁。

⁴⁸ 富永静朗『民芸如花——三宅忠一』日本工芸館、1981年、11-19頁。

⁴⁹ 寿岳文章「日本工芸館の使命」〔1960年〕『柳宗悦と共に』176頁。

⁵⁰ 富永『民芸如花——三宅忠一』56-58頁。

講演の原稿をそのまま文字に起こしているためか、文がやや乱れている部分もあるが、ここで三宅は、本来無名の工人により作られる日用品を称揚したはずの民藝運動において、個人作家が中心的役割を担い始めていることに苦言を呈している。こうした批判の背景には、河井寛次郎（1890-1966）や濱田庄司（1894-1978）といった、民藝運動に加わった個人作家の知名度が増すにつれ、そうした個人作家による高価な作品のイメージが前面に出るようになっていったことがあったと考えられる⁵¹。

さらに、三宅はこの主張に続けて次のように述べている。

そしてあなた〔柳〕が高い段階で、静かに日本の工芸界の現状をみられ、工芸界には伝統工芸〔＝民藝〕と美術工芸の二つの流れのあることを見究められた。その一つの伝統工芸〔＝民藝〕は、いま育成しておかねばやがて美術工芸に押されて滅亡してしまう。その滅亡を防ぐのは、なんといっても工人の育成と、需要の拡大しかない。いかに工人だけが育成されても、肝心の需要がなければ、折角つくったものが消化できないではないか。だからこそ、いまのうちに民芸の生産と普及運動を展開しようじゃないか、ということだったのでしょ。（中略）ところが最近のあなたの周囲には作家ばかり。⁵²

このように、三宅は、民藝運動における個人作家の存在に矛盾を見出し、無名の工人が伝統的な手法で生み出す品物の生産と流通の促進こそが最優先されるべきであると主張した。それゆえ、日本工芸館では工人による品物のみを展示し、個人作家による作品を展示することはなかったという⁵³。

なお、柳自身は、戦後に著した「仏教美学」と呼ばれる一連の著作において、個人作家と工人による製作の関係を、仏教における自力^{じりき}と他力の関係に重ね合わせ、二つの道は究め尽くせば一つの境地に辿り着くという理解を示している。「自力」とは、自己の力で悟りに至る事を意味し、特に禅宗の立場を表す概念であり、「他力」とは、先に見たように阿弥陀仏に頼ることを意味し、浄土教の立場を表す概念である。

例えば、柳は1960年に著した「美とはなにか」の中で、次のように語っている。

独創的な作家たちを「自力道」を歩く人々と云ひ得るなら、識見の乏しい工人達は「他力道」を歩む作家と云へよう。（中略）自在心に活ければ、天才であると凡人であるとの差別や段位が消え何れも美しく作るに至るのである。只要は何れの場合でも、自然心に生きる事に於て同じだと云へる。只此の自在心を欠けば、何れも美との結縁から離れて了ふ。故に人間の

⁵¹ 濱田琢司「地域からの実践という批判軸——三宅忠一試論」、熊倉功夫・吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版、2005年、306頁。

⁵² 富永『民芸如花——三宅忠一』58-59頁。

⁵³ 濱田「地域からの実践という批判軸——三宅忠一試論」『柳宗悦と民藝運動』309頁。

如何ではなく、自在の有無に美が懸ると云つてよい。⁵⁴

柳は、仏教において自力と他力の道が究極において一致するように、個人作家と工人は、美の鍵となる「自在心」「自然心」に至る道が異なりはしても、究極において生まれる美に上下の差はないと考えたのである。

寿岳は、1982年に著した『柳宗悦全集』第18巻の「解説」の中で、「他力浄土門も自力聖道門も、究竟すれば一致すると説いたのは、柳の旧師鈴木大拙であり、その影響は、当然柳宗悦にも見られる」⁵⁵と語り、柳が仏教学者の鈴木大拙（1870-1966）から受けた影響に言及しながら、自力と他力の道が究極において一致とする柳の思想に理解を示している。

しかし、寿岳は1938年に書いた「民芸運動の将来」では、三宅の主張と共通する考えを次のように述べていた。

我々の民芸運動は、生産と分配との経済的な面に第一の関心が払われねばならぬでしょう。また作物そのものについて言えば、個人作家的ねらい所をもつものよりも、永い間実用に耐え、その実用がおのずと醸しだした美——柳さんの言われる用に即した美をもつ伝統主義的な作物が、本格なのではないでしょうか。⁵⁶

この記述から読み取れるのは、寿岳の中に、個人作家による作品よりも無名の工人による作物を民藝の本道と見なす考えや、工人による作品の「生産と分配」を重視する姿勢があり、それらは三宅の立場と重なるものであった、ということである。

そして、「民芸運動は、生産と分配との経済的な面に第一の関心が払われねばならぬ」と語るほど、寿岳が経済的側面を重視した背景には、経済学者・思想家の河上肇（1879年-1946年）からの影響が考えられる。なぜなら、寿岳は京都帝国大学文学部選科在学中に河上の長男政男の家庭教師を務めるなど⁵⁷、河上と親交があり、「この殉教者的経済学者〔河上〕の行歩をまのあたり見守ることにより、私は、ものの見方の根底に、社会科学の座標軸がいか

に肝要かを教えられた」⁵⁸と述べているからである。

さらに、寿岳の中で、河上から学んだ「社会科学の座標軸」は、柳の主張を絶対視せず、相対化するための視点として機能していたことを指摘したい。寿岳が柳と河上の考えを比較しながら思考を深めていたことは、例えば、対談の中で両者の妙好人論を比較した次の発言に見ることができる。

⁵⁴ 柳宗悦「美とはなにか」〔1960年〕『柳宗悦全集』18巻、554-555頁。

⁵⁵ 寿岳文章「解説 『美の法門』の樹立」〔1982年〕『柳宗悦全集』18巻、712頁。

⁵⁶ 寿岳文章「民芸運動の将来」〔1938年〕『柳宗悦と共に』60頁。

⁵⁷ 「年譜」『寿岳文章——領域なき探究：英文学、民芸、和紙研究』展図録、71頁。

⁵⁸ 寿岳文章「若き日に」『神戸新聞』1979年2月23日付。

宗教を座標軸として見たときに、柳さんの達した境地というものは、それはたいへんすばらしいと思いますけれども、それを一つの大きな枠の中へはめていったときには、河上先生の言う生産性はゆるがせにできない面でもあるという点、これが柳さんにもう少し社会科学の勉強もしておいてほしかったと思うゆえんなんですね。⁵⁹

柳と河上を比較し、柳の社会科学への関心の少なさを指摘する寿岳の批判には、やや無理があるようにも思われる。しかし、ここで注目すべきは、寿岳が河上と柳を比較することによって、柳の宗教観を相対化している点である。

寿岳は、「終生のよき知己として、河上肇、柳宗悦という存在が、書くことにも、頭の中にも、それがくっきりと大きな二つの出会いの二本柱のようになって今日に至っている」⁶⁰と述べ、河上と柳の二人を特別な先達として位置付けていた。それゆえ、寿岳が民藝品の生産と分配を最優先事項と考える三宅の主張を重く受け止めた背景には、河上と柳という異なる先達を意識した上での、民藝運動に対する反省があったと考えられる。

さらに、寿岳が経済的観点から民藝運動のあり方を批判した背景には、ウィリアム・モリスからの影響も重要であったと考えられる。というのも、寿岳は、民藝運動の方向性について、鳥取たくみ工芸店の創設者である吉田璋也（1898-1972）と紙面上で討論した際、モリスに言及しながら次のように述べているからである。

吉田さんは、美しい建築や正しい家具の製作に、（それが真に美しかったか、または正しかったかは別問題として）数十年の熱意をささげてきたモリスが、ついにそれを捨て、晩年を社会主義運動の実践にささげずにはいられなかった気持へ、はいってみられたことがあるだろうか。世の中のしくみがよくならなければ、一部の人たちがどんなに熱心に美しいものを作ろうとも、大衆の生活は決して美しくも幸福にもならない事実を痛感したところに、近代工芸運動におけるモリスの先覚的意義がある。⁶¹

また、寿岳は1960年に著した「民芸運動の秘密」において、「本来社会主義とは最も密接に結びつかねばならないはずの民芸運動は、結局社会主義の電圧を絶縁し、一種のディレッタント主義と言われてもしかたのない有閑者の遊びに傾斜して行った」⁶²とも述べている。民藝運動が社会主義と結びつくべきだとする寿岳の主張は、モリスの存在を念頭に置いたものであることは明らかである。

さらに、1954年に書かれた「工人のよろこび」では、「ウィリアム・モリスと柳宗悦」の中で批判した「藝術とは労働における人間の喜びの表現である」というモリスの主張に、

⁵⁹ 寿岳文章「柳宗悦を語る」[1976年]『柳宗悦と共に』244頁。

⁶⁰ 寿岳文章・寿岳章子『父と娘の歳月』人文書院、1988年、234頁。

⁶¹ 寿岳文章「私の民芸教室」[1961年]『柳宗悦と共に』72頁。

⁶² 寿岳文章「民芸運動の秘密」[1960年]『柳宗悦と共に』64頁。

寿岳が再び立ち返っている様子が確認できる。

しかし、工人に働くことの喜びとたのしみを取り戻そうとする正しい思念を、後退させたり消滅させたりしてはならぬ。ではどうしたらそういう状態が招来されるか。すべての鍵は、人間性の回復という公案の中に隠されていると私は思う。用意したその具体的な展開のためには、もちろん多くの紙幅を必要とするが、ここでは唯ひとこと、過去の工人は、その経済的境遇がどんなにみじめであっても、作られた品物の立派さのゆえに救われているというような、飛躍した観念的宗教論を持ちこむのは、決して現実の問題の解決にならぬことだけを申し述べておく。⁶³

ここで寿岳は、「働くことの喜びとたのしみ」を取り戻すことの重要性を強調した上で、宗教的アプローチだけでは問題は解決せず、工人たちの経済的境遇の改善が不可欠であると主張している。すなわち、ここでは、「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」において、「工藝のすくい」という観点からモリスの主張の限界を指摘した時とは、批判の向きが逆転しているのである。

こうした寿岳の言説には、アンビバレントな側面があることは否めない。しかし、仏教思想と深く結びついた柳の民藝論の宗教性を深く理解しつつ、同時にモリスの思想を参照しながら民藝運動の方向性を再考した寿岳の思考には、一つの事象を国際的視野のもとで多角的に考察する姿勢が一貫していたとも言えるであろう。

5. 結びに代えて——寿岳の工藝論がもつ今日的意義

寿岳は、モリスと柳の工藝論の比較を起点として、いずれか一方に偏るのではなく、両者を相互に参照しながら、それぞれの工藝論の意義と限界を検討した。具体的には、モリスの工藝論を批判する際には、仏教思想と結びついた柳の民藝論を、民藝運動の課題を論じる際には社会主義者としてのモリスの仕事を参照するという方法を取ったのである。

こうした比較を通じて、寿岳は民藝運動を国際的視点から位置づけることを試みたが、その貢献はこれまで十分に評価されてこなかった⁶⁴。しかし現在、モリス研究と柳研究の双方において、国際的な視野に立った比較研究が最重要課題の一つとなっており、そのような状況の中で、寿岳による比較論の先駆的意義は、今後適切に再評価されるべきである。

さらに、寿岳の関心は、柳とモリスの単なる客観的な比較分析にとどまらず、両者の工藝論を統合し、近代における理想的な工藝のあり方を探求することにあった。実際、寿岳は「このふたり〔柳とモリス〕の工芸論を結びつけてゆけば、東洋の心と西洋の心とを代表するものともすぐれた『美の弁護』を総合させ、また展開させることが可能であろう」⁶⁵と述べて

⁶³ 寿岳文章「工人のよろこび」〔1954年〕『柳宗悦と共に』173頁。

⁶⁴ 川端康雄「寿岳文章とウィリヤム・モリス」『向日庵』4号、2021年3月、56頁。

⁶⁵ 寿岳「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」『寿岳文章書物論集成』485頁。

いる。寿岳は、柳とモリスの間を絶えず往還し、両者の工藝論を架橋することを模索しながら、現代の工藝を巡る根本的な問いに向き合い続けた。柳らが「民藝」という概念を打ち立ててから 100 年を迎えようとする今、寿岳の研究とその思想は、改めて見直される必要があると考える所以である。

ウィリアム・モリス、柳宗悦、そして「社会科学」

川端 康雄（日本女子大学名誉教授）

寿岳文章の読書ノート『癡祭記』の1954（昭和29）年3月3日の記載（図1）を見ることから始めたい。取り上げている本は“Wm[William] Morris. By Philip Henderson”で、以下がそれについてのコメントである。

「英語青年」からモリス小論をたのまれて読了。
この本、小冊子なれど、よくまとめてある。今よ
みさしの Lloyd Eric Grey の書物と比べてしつかり
してあること格段の相違あり。（后者はアメリカ
人で、焦点が甘い。）

モリスが今日存在、生きてゐるのは、彼の眼が
社会の構成に向つて開かれてゐたからだ。その点
で少しも開眼しない柳宗悦は駄目だと思ふ。作つ
たものが中途半端でも、世界観がしつかりしてゐ
るとそれがやはり波紋を描いてゆく一つの姿[で]
ある。

1

この記載に若干の注記を加えておく。取り上げている
フィリップ・ヘンドースン（Philip Henderson, 1906–
77）の本は小冊子版のイギリスの作家小伝シリーズ（ブ
リティッシュ・カウンシルによる企画）の一冊である。
1それと比較対照されている「Lloyd Eric Grey の書物」
というのは1949年にロンドンで刊行された『ウィリ
アム・モリス——英国の新秩序の預言者』を指す。ロ

イド・エリック・グレイというのはこの刊本のためだけの筆名で、本名はロイド・ウェン
デル・エッシュルマン（Lloyd Wendell Eshleman, 1902–49）、アメリカ人研究者で、1940年に
その本名でニューヨークの出版社から『ヴィクトリア朝の反逆者——ウィリアム・モリス

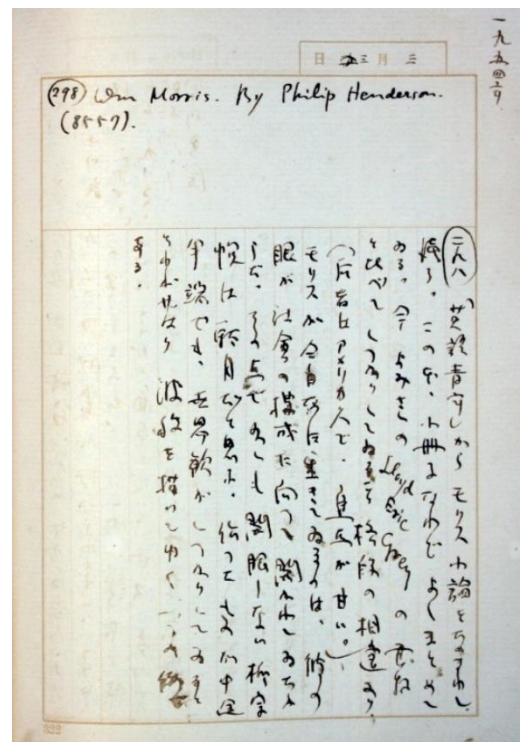


図1 寿岳文章『癡祭記』より
1954（昭和29）年3月3日の記載

¹ 寿岳文章の読書ノート『癡祭記』[2198]1954（昭和29）年3月3日付（向日庵資料）。『癡祭記』については井上琢智・中島俊郎・長野裕子「向日庵資料紹介 寿岳文章『癡祭記』」『向日庵』6、69頁以下を参照。この資料を提供してくださった中島俊郎先生に感謝申し上げる。

Philip Henderson, *William Morris. Writers and Their Works: No. 32*. London: Published for the British Council and the National Book League by Longmans, Green, 1952.

の生涯』を出していた。²この米国版と同内容で、9年後に著者名を変えて英国版が出されたのであり、寿岳はこのグレイ名義の英国版を読んでいたことになる。これは単行本で400ページあり、ヘンダースンの43ページの小冊子と規模が違うので比較しにくいはずだが、小冊子版を評価しているのは逆にGreyの本が不十分であることを際立たせていると言えるのかもしれない。ヘンダースンは1952年にウィリアム・モリス書簡集を編者として刊行しており、基礎的な調査がしっかりなされていて、それが短い評伝でも感知できる。その後1967年に本格的なモリス評伝を出している。³

日記の第二段落では、モリスの今日的意義が彼の社会意識にある（「彼の眼が社会の構成に向つて開かれてゐた」）と述べ、その点で柳宗悦は「開眼」しておらず「駄目」だと断じている。公の場で寿岳が表明したことの無い強い柳批判がこの日記に示されていると言えるだろう。

柳宗悦とモリスの比較対象という点では、おそらく一般にもっともよく知られている寿岳の論考として1934（昭和9）年に『英語青年』に発表した「ウィリアム・モリスと柳宗悦」があり、これは工芸家としてのモリスがイギリスのみならず日本にまで与えた影響を称えながらも柳の宗教的な深さを併せ持つ工藝論を称揚して後者に軍配をあげている点が特徴のエッセイである。その典型的な主張を引用するとこうだ。

〔…〕私たちはいま日本に、欧米のどの国においてよりもモリスにちかい、ひとりの熱心な工芸指導者と、その指導者に統率される工芸運動とをもっている。それは、柳宗悦そのひとと、その提唱による民芸運動とである。柳はいま現に、この日本に生き、私たちとはことにしたいあいだにあり、そのため、モリスに対しておこなうことのできるような歴史的批判の対象とはなりにくいのであるが、柳の抱懐する工芸論が、モリスの工芸論ともっともちかい血縁をしめしながら、しかも、モリスの誤謬を、かず多く指摘し是正し、モリスよりもさらに深い境地に達している事実において、また、モリスが関心をもったよりもひろい範囲にわたる工芸品のうつくしさに對する直観が、モリスよりもはるかにするどく、かつゆがみのない事実において、柳の工芸理論と、その實際運動とは、モリスのそれよりも高い地位におかれるのが当然だ、と私はおもふ。⁴

Lloyd Wendell Eshleman, *A Victorian Rebel: The Life of William Morris*, New York: Charles Scribner's Sons, 1940; Lloyd Eric Grey, *William Morris: Prophet of England's New Order*, London: Cassell, 1949.

³ Philip Henderson, *William Morris: His Life, Work, and Friends*, London: Thames and Hudson, 1967. 邦訳はフィリップ・ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄ほか訳、晶文社、1990年。

⁴ 寿岳文章「ウィリアム・モリスと柳宗悦」『英文学の風土』大修館書店、1956年、120頁。初出は『英語青年』第72巻第4号～6号（1934年11月～12月）に連載された。

この論考では、モリスの工芸論は宗教性が欠けているがゆえに柳の工芸論の深さに及ばないのだとされる。寿岳はこう続ける。

この深浅の原因を、どこにもとめたらよいであろうか？ いろいろの原因がかんがえられるが、そのもっとも大きなものとして、私は、モリスがラスキンとともに、自分の立場まで工芸と工芸家とをひきあげようとしたのにひきかえ、柳は、みずから工芸と工芸家との世界へおりていったこと、モリスは、結局、ロセッティやバーン・ジョウズなど、工芸の本質にあまり理解のない個人主義的芸術家の影響からぬけきれず、ニューマンをうごかし、アーノルドをさえもうごかした宗教の世界に、深くはいろいろとしなかった「美のロマン主義者」であり、「夢を夢見る人」であったのにひきかえ、柳は、早くから工芸の世界によい友だちをもち、わかくして宗教の奥義に心をひかれ、また工芸にうちこむようになった直接の機縁も、民衆とまじわり民衆のあいだに生きた木喰五行上人の遺跡巡回にはじまったこと、などをかぞえる。イエイツはかつて、モリスを「多幸な工芸家」とよんだ。モリスの生涯は、このよびかたの、かならずしも溢美でないことを私たちにしめしてくれる。だが、幸福にもいろいろの程度がある。工芸の世界に関するかぎり、モリスと柳とを比較すれば、私たちは、まだまだモリスを「不幸な芸術家」とよばねばならない。⁵

寿岳によるモリスの言及はかなり多くあるが、柳と対比させたこの論考がもっともモリスに辛い論評であると言えよう。「書物工芸家としてのモリス」や「近英の私版」など、モリスの書物芸術の理論と実践に言及した寿岳の論考の場合は、ある程度の批判を含んでいるにせよ、ここまで否定的な扱いはいしていない。柳の宗教的「奥義」への理解に寿岳が共感しているがために、「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」では両者への評価が必要以上に二分化されていたと見ることができるのかもしれない。⁶

じっさい、20年後の1954（昭和29）年にふたたびモリスについてエッセイ——冒頭に翻刻した『癡祭記』の記載でふれている『英語青年』から依頼された「小論」——を書いた際に、寿岳はそのことの反省から書き始めている。

William Morris の生誕百年を記念して、私が本誌に「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」の一文を寄せたのは、昭和九年の秋であった。今度創刊第百巻を記念する本誌特別号のために、再びモリスについて何か書くようにと求められたのをしおに、私は久しぶりで二

⁵ 同書、134頁。

⁶ モリスの工芸論に宗教性が不在であった（ゆえに柳の工芸論に劣る）とする「ウィリヤム・モリスと柳宗悦」での影響力の強い寿岳の見解を批判的に検証した論考として以下を参照。島貫悟「柳宗悦とウィリヤム・モリス——工芸論にみる宗教観と自然観」東北大学出版会、2024年、とくに第四章「モリスの工芸論に宿る宗教性」（109頁以下）。

十年以上も前の旧稿を読みかえしてみた。不勉強のうちにすごされた二十年ではあったが、それでも物を見る私の眼、物を考える私の心は幾分かの年輪の増加を示したと見え、旧稿における批判的精神のあまみや、perspective の乱れなどがやりきれなく気はづかしい。結論的に言えば、モリスに対しては少し厳に過ぎ、柳宗悦氏に対しては少し寛に過ぎた評価であったように今は考えられる。しかし、モリスが文化史上に占めるべき orientation についての私の測定そのものには、今日といえども修正すべき箇所さほど認められないのを、私はひそかな喜びとする。つまりモリスの場合、詩人として英文学史に残る確率よりも、生産と分配にのしかる近代資本主義社会の悲劇への警告者（この点では Carlyle や Ruskin と同列）として、また単に警告するだけにとどまらず、身を以て生産と分配の正しいあり方を示そうとした実践者（この点では Carlyle や Ruskin を乗り越えている）として、広い次元に立つ芸術史上に残る確率の方がはるかに大きいと言うのが、二十年前も今もかわらぬ私の主張なのである。このことは、モリスに関する最近の出版物が〔…〕主としてモリス夫人をめぐる delicate な交友問題、すなわちモリスの基本的な伝記を書いた J. W. Mackail がことさらにぼかした問題、——そしてそれはモリスの一生を考える上にそう大きな比重を持つ問題ではないと私は思っている、——の究明をこころざすものでないならば、Eric Lloyd Grey の *William Morris: Prophet of England's New Order* (1949) のように、主としてモリスの社会主義的開眼をとりあげている事実からも、ほぼ誤りなく傍証されるであろう。⁷

このエッセイはさらに、モリスの詩業に見るべきところがあるけれども、彼の生涯が「正しいものを正しい座に就かせる高貴な事業に最後まで貫かれた」⁸と述べる。「身を以て生産と分配の正しいあり方を示そうとした実践者」、つまり寿岳はモリス後半生の社会主義者としての活動、および『ユートピアだより』などの関連著作をモリスの仕事の重要な部分として評価している。

『英語青年』に寄せたこのモリス論では、柳宗悦については上記引用で「少し寛に過ぎた評価であった」と述べるにとどまり、それ以上の言及はない。『癩祭記』の当該の記載では、むしろモリスと柳への評価が逆転していて、「眼が社会の構成に向つて開かれてゐた」モリスに対して、「その点で少しも開眼しない柳宗悦は駄目だと思ふ」という寸評が書き留められている。少なくともこれほど強い口調で述べられたものは、寿岳の公の発言のなかには見られないのではないだろうか。非公開の私的な記録であったからこそ、柳に対して寿岳がかねがね抱いていた批判という不満がダイレクトに表白されたのであろう。

それを公のかたちで（もっとやんわりと）表明したものとしては、柳の没後 15 年を経た 1971（昭和 46）年に雑誌『展望』に掲載されたインタビュー「柳宗悦を語る」を挙げるこ

⁷ 寿岳文章「ウィリアム・モリス」『英語青年』第 100 巻第 5 号（1954 年 5 月）、214 頁。以下に採録。寿岳文章『モリス論集』沖積舎、1993 年、25-26 頁。

⁸ 『モリス論集』29 頁。

とができる。柳が「妙好人という独特な境地に没入」したことの意義を認めながらも、「妙好人の非社会性に目をつぶるのは、柳さんの思想の一つの欠落ではないだろうかと思うんですね」と寿岳は言う。そこで対比的に持ち出されているのが河上肇の『獄中贅語』における妙好人の「非生産性」への厳しい批判だった。

宗教を座標軸として見たときに、柳さんの達した境地というものは、それはたいへんすばらしいと思いますけれども、それを一つの大きな枠の中にはめていったときには、河上先生の言う生産性はゆるがせにできない面でもあるという点、これが柳さんにもう少し社会科学の勉強もしておいてほしかったと思うゆえんなんですね。⁹

柳の「思想の一つの欠落」、すなわち社会科学への関心の欠如に対する苦言・注文を寿岳は柳の没後になって初めておこなったわけではなく、早くから寿岳が抱いていた柳への評価の一面であったと言える。寿岳が伝えるエピソードに寿岳が翻訳仕事を多く手掛けているのをたしなめられたという話がある。1940（昭和15）年頃のことだ。具体的にそこで挙げている本はブチャー『ギリシア精神の様相』とヤンコ・ラヴリン著『トルストイ』¹⁰で、この頃寿岳がこれらをはじめ他にもいろいろと翻訳を手がけていたのは確かである。寿岳はこう回想している。

しかしこの二つの〔翻訳の〕仕事も、私の人間形成や知見の拡大にかなり役立っており、決して私自身の時間の浪費ではなかった。逆に、私から言わせると、当時の柳さんは、民芸品発掘のための旅行や展覧会開催に全力投球し、書斎での勉強をおろそかにしすぎていたような気がする。もともと勉強家の柳さんに、特に社会科学の方面であの頃読んでもらいたい本は多かった。そのことを、今は故人の良吏・水谷良一氏と、私はしばしば語り合ったものである。¹¹

それでは、寿岳がここで言う「社会科学」とはどういう内実を有しているか。冒頭の対比に戻って考えるなら、柳には欠落していてモリスに備わっていると寿岳が捉える「社会科学」ということになる。「モリスが今日存在、生きてゐるのは、彼の眼が社会の構成に向つて開かれてゐたからだ」。ここで寿岳はモリスがその後半生におこなった政治的コミットメント、

⁹ 寿岳文章「柳宗悦を語る」聴き手：幼方直吉。寿岳文章『柳宗悦と共に』集英社、1980年、243-44頁。このインタビューの初出誌は『展望』第211号、1976年7月、74-93頁。

¹⁰ ブチャー『ギリシア精神の様相』（田中秀央・和辻哲郎・寿岳文章訳、岩波文庫、1940年）、ヤンコ・ラヴリン著『トルストイ』（寿岳文章訳、三笠書房、1941年）

¹¹ 「翻訳の苦労ばなし」寿岳章子編『寿岳文章集』彌生書房、1983年、114頁。この論考の初出誌は『総合教育技術』（小学館）第31巻第14号、1977年3月1日、12-14頁。

とりわけ 1883 年以降の社会主義運動への関与を念頭に置いているのだろうと推測できる。上記引用の「モリスの社会主義的開眼」という表現はそれを裏付ける。

ここで関連してくる寿岳の著作として「モリスと資本論」という 1937 (昭和 12) 年に発表した短いエッセイがある。従来 (1937 年までということになるが) のモリス評伝者の多くがモリスを「空想的社会主義者」とみなして、彼が「資本論を読んでいたとしても、それから学ぶところはあまり多くなかったように論述した」と、研究史の主要な流れに言及したうえで、モリス生誕百年にあたる 1934 (昭和 9) 年にページ・アーノットが小冊子『ひとつの弁明』を刊行し、従来の反マルクス主義的所説を一種の「モリス神話」とみなして、彼を真正のマルクス主義者であると主張した。¹²だが寿岳は、モリスとベルフォート・バックスとの共著『社会主義——その生長および結果』や、モリス著作集のなかで「社会主義に転身した以後の諸種の述作をおさめた部分などを読んでう

かがいえたかぎりでは、どうしてもアーノットの論旨に同意することができない」と言う。

「モリスは、よしマルクスと対蹠の位置に立ちはしなくとも、両者のあいだに、かなりのへだたりがあることを、依然として、私は認めないわけにはゆかないのである」。¹³そう自説を明確に述べたうえで、いかにも寿岳らしく、このエッセイの後段では、モリスが 1880 年代前半に読んだ『資本論』仏語版分冊をコブデン＝サンダースンに依頼して合本にして装幀してもらったエピソードを紹介している。これはコブデン＝サンダースンの装幀家としての最初の書物だった。緑色のモロッコ革の美しい装幀 (図 2) は、二欄組の醜い活字がつまっている粗末な本体を包むのに不釣り合いであるとしてコブデン＝サンダースンの補助をした老装幀家が憤った話を引用し、寿岳はこう続ける。

モリスは、当時まだケルムスコット・プレスの事業を、おもい立っていない。しかし、工芸一般に関する理解からおして、うつくしい本とはなんであるか、の認識はよほどふかかったはずである。そのモリスが、こんな粗末な版本の仏訳資本論に、善美をつくした装幀をほどこしたのは、内容に対するよくよくの尊敬からであろう。〔…〕

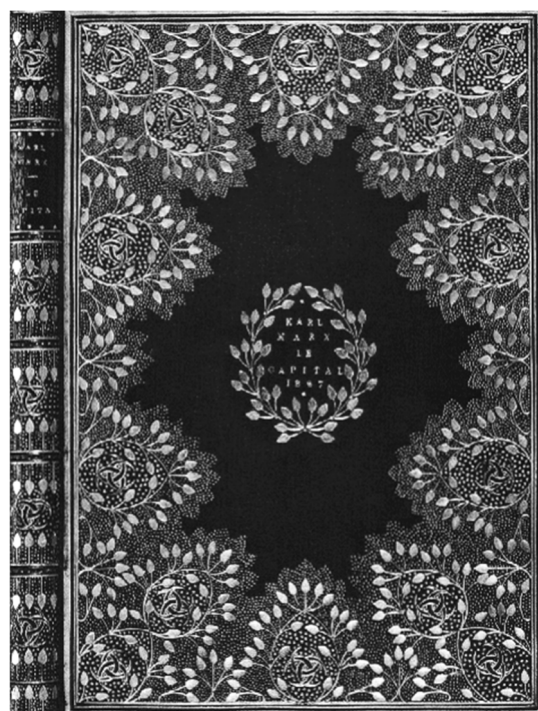


図 2 マルクス『資本論』 (仏語版、1872-75) モリスの依頼でコブデン＝サンダースンが 1884 年に装幀。© The Wormsley Library, UK

¹² R. Page Arnot, *William Morris: A Vindication*, London: Martin Lawrence, 1934.

¹³ 「モリスと資本論」『英文学の風景』 (前掲) 135-36 頁。この論考の初出誌は『文藝春秋』第 15 巻第 5 号、1937 年 5 月 1 日、24-26 頁。

ただし、うえにものべたとおり、モリスが資本論を尊敬していたという事実から、かれが、マルクシストであったという事実は、決して生まれてこない。かれは同時に、資本論とはおよそはだのあわない、ほかの多くの書物をも尊敬しているからである。実際、このサンダスンの日記を読んだだけでも、アーノットが「コモンウィール誌」その他から援用しているモリスとは、およそことなつたモリスがうかびあがってくる。あるひとに関して、正鵠妥当な評伝を書くことの困難さは、このひとつの事実からでもおしはかれるであろう。¹⁴

モリスをマルクス主義者とみなす見方について寿岳が否定的であることが伺える一文である。そうすると、モリスにあって柳にない寿岳が見た「社会科学」は、マルクス主義的立場に立つ社会研究の謂いでなく、別の系統の思想ということになるのだろうか。具体的に著者名や書名が挙げられていないが、モリスが「尊敬」していたという、「資本論とはおよそはだのあわない、ほかの多くの書物」として寿岳が念頭に置いていたのはなんだったろうか。まず考えられるのはラスキンの著作、とりわけモリスが大学時代に読んで決定的な影響を与えた『ヴェネツィアの石』の第二部第六章「ゴシックの本質」はこれだけ単独にケルムスコット・プレスで印刷した本ということで特筆されるし、同じくラスキンの『この最後の者にも』での同時代の経済学への根本的な批判の書もモリスに与えたインパクトは強かった。他にはカーライルの『過去と現在』ほかのヴィクトリア朝のレッセ・フェール批判、それより時代が遡るがウィリアム・コベットの（寿岳自身も愛読した）『田園騎馬紀行』¹⁵などがすぐに思い浮かぶ。

さらにもっと広くモリスの愛読書ということになれば、1886年にロンドンの夕刊紙『ペル・メル・ガゼット』から受けた「良書百選」のアンケートへの回答で、ホメロスほかギリシアの古典から、チョーサー、フロワサール、トマス・マロリーの『アーサー王の死』といった中世文学、そしてウォルター・スコットの小説群にジョン・キーツらイギリス・ロマン派詩人などを挙げている。¹⁶このうち、ロマン派詩人たちは、一見「社会科学」の問題とは無縁なように見えながらも、18世紀末から19世紀初頭にかけて、イギリスが工業化を進めてゆく激変期に生きて、支配的な功利主義的イデオロギーへの反抗を示した人たちとして、モリスの青年時のものの考え方に浸み込んでいたという点で重要である。

この最後の点、すなわち「ロマン派の反抗」精神を青年期に受け継いで、それを力として後半生に革命的社会主義者に転身するモリスの筋道を論じた研究書として、英国の歴史家E・P・トムスン（E. P. Thompson, 1924-93）による『ウィリアム・モリス——ロマン派

¹⁴ 同書、137-38頁。

¹⁵ 寿岳のコベット論については拙稿「寿岳文章のウィリアム・コベット小伝をめぐって」（『向日庵』第6号、10-16頁）を参照。

¹⁶ 「ウィリアム・モリスの愛読書」ウィリアム・モリス著、W・S・ピータースン編『理想の書物』川端康雄訳、ちくま学芸文庫、2006年、263-70頁。

から革命家へ』¹⁷がある。初版刊行は 1955 年。寿岳が「モリスと資本論」で「同意することができない」としたページ・アーノットの 1934 年の『ひとつの弁明』（マルクス主義者によるモリス擁護）と似た問題意識（「モリス神話」の打破）を出発点として書かれているが、こちらは 900 頁を超える文字どおり浩瀚な書であった。トムスンのこのモリス研究の内容を小野二郎（1929-82）は次のように紹介している。

総体についての評伝だが、特にその社会主義活動にくわしく、モリスの革命的社会主義者たることを実証した画期的な書物。しかし、単にマルクス主義者であることを論証したのではなく、労働者階級の主体的な階級意識の形成の問題への思想的実践的努力の先駆者として評価しているのである。Revolutionary と呼ぶ理由である。そのことからモリスの文学的生涯についても数多くの鋭い再解釈をふくむ。¹⁸

寿岳がトムスンのこの著作を読んでいたのかどうか、そもそも入手していたのかどうか私は確認できていないのだが、1954 年の論考で「モリスの社会主義的開眼」をモリス研究の重要なポイントとした寿岳がこれに関心を持たなかったとは考えにくい。じっさい、過去半世紀をふりかえってみても、モリスの多岐にわたる活動については、とくに工芸の各部門について新たな地平を拓く研究が続々と出されてきたのに対して、社会主義とモリスというテーマでは、トムスンのこの本を決定的に凌駕する本は見当たらず、この方面での研究としてまず一番に参照すべき基本文献の地位をいまでも維持している。

そして先ほど言及した小野二郎は、トムスンのモリス研究に深い影響を受けた人物であり、トムスンの「ロマン派から革命家へ」の道筋を、さらに装飾芸術上の展開と重ね合わせて、主著『装飾芸術』¹⁹などで重要な仕事を果たした。とりわけモリスの書物芸術を扱った「書物の「読み易さ」について」や「モリス・ライブラリ瞥見」といった小野の論考（いずれも『装飾芸術』所載）は、寿岳の「近英の私版」や「書物工芸家としてのモリス」をふまえて書かれていて、じっさい、参考文献にそれが明示されてもいる。寿岳は 1982 年に 52 歳の若さで早世した小野の追悼論集に一文を寄せ、そこで彼のモリス研究を高く評価している。²⁰1937 年発表の「モリスと資本論」で寿岳がモリスとマルクスの関連を否定的に扱った

¹⁷ E. P. Thompson, *William Morris: Romantic to Revolutionary* (London: Lawrence & Wishart, 1955; revised 2nd edition, London: Merlin Press, 1977). E・P・トムスン『ウィリアム・モリス——ロマン派から革命家へ』川端康雄監訳、月曜社、2025 年。

¹⁸ 小野二郎『ウィリアム・モリス——ラディカル・デザインの思想』中公新書、1973 年、199 頁。

¹⁹ 小野二郎『装飾芸術——ウィリアム・モリスとその周辺』青土社、1979 年。

²⁰ 小野のモリス論に接した喜びを寿岳は次のように回想している。「戦後、私のところへ送られてくるようになったいろいろの定期刊行物に目を通して見ると、書物の世界と関係の深い装飾芸術の中心人物、ウィリアム・モリスをとりあげた密度の高い論究があるので、思わず読み進ん

次第はすでに見たが、戦後に寿岳がモリスに言及する際に、その評価もいくらか変化したようにも見える。トムスンをふまえた小野のモリス研究の影響も多少あったのかもしれない。

冒頭の『癩祭記』の記載に「作つたものが中途半端でも、世界観がしつかりしてゐるとそれがやはり波紋を描いてゆく一つの姿〔で〕ある」という一文があった。「作つたものが中途半端」というのは、文脈からして工芸家モリスの実作品を指していると思われる。ケルムスコット・プレス本が「結局「読むための書物」ではなく、「眺めるための書物」の要素を多分に具えたもの」²¹となったというような批判があつての表現であろう。「中途半端」という評言がはたして妥当かどうかは――柳によるモリス批判と同様に――じつは検討の余地があると私は思うのだが、本稿ではこの点に立ち入る余裕はない。むしろここでモリスの「世界観」が確固としてものであつて、それが「波紋を描いてゆく」、言い換えるなら、英国内のみならず世界の工芸運動に影響を及ぼしていった点を言祝いでいることを心にとめておきたい。寿岳のモリス評の重要なポイントがここにあると思われるからだ。

『癩祭記』の1954年3月3日の記載について、短い傍注を入れようと思って書き始めたのが、思いがけず長くなってしまった。このあたりで筆を擱くこととする。

でゆくと、私の名が出てくる。また出てくる。またまた出てくる。私の書いたものを、こんなに深く注意して読んでくれる人が、現実にいるのを知って、私はとてもうれしかった」（寿岳文章「小野二郎君の思い出」『大きな顔――小野二郎の人と仕事』晶文社、1983年、186-87頁）。

²¹ 寿岳文章「近英の私版」『本と英文学』研究社、1957年、172頁。この論考の初出は『英語研究』第26巻第8号、1933年10月、962頁。

寿岳文章の蔵書記録

長野 裕子（NPO 向日庵会員）

2024 年秋、「旧寿岳家住宅向日庵」¹（以下、一部を除き「向日庵」と略記する）は、国の文化審議会により「登録有形文化財（建造物）」に登録するよう答申された。審議では建造物の特徴を「阪急西向日駅の南東にある英文学者寿岳文章の住宅主屋と敷地を囲う門及び土留。主屋は各室に地窓と欄間を対で配するなど換気に配慮し、学者らしく大規模な書庫を備える。表門は両脇に続く植木用土留とともに昭和戦前開発の郊外住宅地の景観をつくる。²」とし、「大規模な書庫」の存在が「向日庵」の特徴のひとつとして挙げられた。

書庫に架蔵された寿岳文章の主要な蔵書は、寿岳自身により複数の大学図書館に移されるなどしているが、向日庵資料として現存する『寿岳文章蔵書図書原簿』によって、蔵書全体の全貌を知ることができる。この図書原簿は寿岳自身が作成したもので、記録日は 1930 年 12 月から死去する前年の 1991 年 10 月まで、四冊の簿冊に 1 万 9,432 冊の蔵書記録がのこされている。

いま、住宅建造物としての「向日庵」は文化財として遺されることになった。『寿岳文章蔵書図書原簿』もまた、後世に継承すべき遺産である。本論では、『寿岳文章蔵書図書原簿』からみえてくる蔵書構築の足跡を、個人蔵書の文化史的側面を交えながら追体験することにより、寿岳の探究心に近づいてみたい。蔵書の記録は人生と読書が連動した自叙伝でもあるといえよう。かつての生きた「書庫」の姿を捉えたい、それが小稿のねらいである。

まずは端緒として、検討対象を 1930 年から 1940 年頃までの蔵書記録に範囲を絞ることにした。この期間には、柳宗悦との共同編集月刊誌『ブレイクとホキットマン』（1931-1932）の刊行、南禅寺北門外僊壺庵から「向日庵」への転居、向日庵私版の刊行、妻静子との全国紙漉村調査旅行が含まれる。寿岳の人生におけるターニング・ポイントが点在するこの十年間の足跡が、『寿岳文章蔵書図書原簿』には反映されているはずである。

はじめに、『寿岳文章蔵書図書原簿』の概要について、寿岳が自身の蔵書整理法を語った記述をもとに示すとともに、住宅設計における書庫と個人蔵書のありようについて、文化史的視点からとりあげる。つぎに、『寿岳文章蔵書図書原簿』の記入事項を具体的に拾いあげ、蔵書構築の足跡を追う。そこから、寿岳をとりまく人的交流と、日常的な読書生活の一端を浮き彫りにする。さいごに、個人蔵書における蔵書目録の意義について事例をあげるとともに、『寿岳文章蔵書図書原簿』の調査研究に期待される役割と可能性を示したい。

I. 寿岳文章蔵書図書原簿

¹ 所在地：京都府向日市上植野町浄徳

² 文化庁ホームページに「登録文化財（建造物）最近の登録」として掲載された「文化審議会の答申（令和 6 年 11 月 22 日）」の記述による。（2025 年 1 月確認）

「私の蔵書整理法」

寿岳が自身の蔵書記録について述べた「私の蔵書整理法」という一文がある。「私の蔵書整理法」は、雑誌『英語青年』（研究社）に 1957 年 1 月から 1958 年 2 月まで連載された囲み記事のタイトルで、第 1 回の齋藤勇から最終回の西脇順三郎まで、24 名の英語、英米文学研究者が各回に独自の蔵書整理法を披露している。第 2 回に掲載された寿岳による「私の蔵書整理法」は、現存する『寿岳文章蔵書図書原簿』（以下、一部を除き『図書原簿』と略記する）の姿を正確に伝えており、また寿岳の蔵書構築の過程を把握するうえで役立つので、全文を引用しておきたい。

「書誌学とは何か」という小著を公にした昭和五年の十二月以来、私は、買ったのでも、貰ったのでも、すべての蔵書を図書原簿に記入することにして、今日まで続けている。原簿は、受入年月日、登録番号、著者、書名、出版地及出版所、出版年及版数、大きさ、装釘、受入先、価格、分類及図書記号、冊数、備考の十三欄を具えているが、分類及図書記号の欄を除き、ほかは全部必ず書きこんでおく。そして書物の副題扉に茶の実を図案化した蔵書印を捺し、茶の実の周辺の EX LIBRIS CANOPI（壽星蔵書）とある欄の下の方空所に、原簿と同じ登録番号を書き入れる。蔵書票のほうが本式なのだが、面倒であり、棚を選ばないとかえって虫害を受けるので、私は朱肉による蔵書印主義者だ。

但し Kelmscott 版級の愛蔵書には芹澤銈介君作るところの蔵書票を注意深く貼用する。分類及図書記号は、図書カードのためのものであり、私のように英文学を中心とする個人の蔵書の場合記入しなくても実際の不便は感じない。書棚整理は Dewy の十進法によっているが、一万冊を規準にして作った書庫がいっぱいになってしまった今日では、どこに入れるかに苦心する。そんな時、原簿の備考欄に、入れた場所を記しておくとともにだんだん記憶が怪しくなってゆく私には、随分役に立つ。必要に迫られて、本当に書物を「整理」する場合にも、この欄は重宝であろう。³



寿岳文章蔵書図書原簿
（向日庵資料 筆者撮影）

³ 寿岳文章「私の蔵書整理法」『英語青年』第 103 巻第 2 号（研究社、1957 年 2 月 1 日）、p. 80. 本記事への寄稿者は掲載順に、齋藤勇、寿岳文章、本間久雄、土居光知、中村祐吉、山宮充、石田憲次、福原麟太郎、大和資雄、長澤英一郎、大塚高信、本多顕彰、大澤衛、佐々木達、小林淳男、斎藤静、尾島庄太郎、大原恭子、木方庸助、石橋幸太郎、魚返善雄、小川二郎、土井磯吉、西脇順三郎である。なお寿岳「私の蔵書整理法」について、中島俊郎「寿岳文章と読書」『甲南大学紀要文学編』第 173 号（甲南大学、2023 年 3 月）において言及されている。（p. 70）

内容をみていこう。この一文を寿岳が発表した 1957 年時点において、「昭和五年以来」図書原簿に記入した蔵書はすでに「一万冊を規準にして作った書庫がいっぱいになってしまった」のである。『寿岳文章蔵書図書原簿』は、「No.1～No.5000（1930 年 12 月 3 日～1944 年 9 月 8 日記入）」、「No.5001～No.10000（1944 年 9 月 18 日～1957 年 10 月 4 日記入）」、「No.10001～No.15000（1957 年 10 月 4 日～1971 年 10 月 1 日記入）」、「No.15001～No.19432（1971 年 10 月 30 日～1991 年 11 月 25 日記入）」の全四冊が存在する。確認すると、二冊目の簿冊の最終行に記された蔵書 1 万冊目の受入年月日が「1957 年 10 月 14 日」となっており、この時点でほぼ「書庫がいっぱいになってしまった」ことを裏づけている。とくに、『図書原簿』の最初に記帳された寿岳の著書『書誌学とは何か』（ぐろりあ そさえて、1930）（No. 1、1930 年 12 月 3 日記入、受入先：出版所）⁴は、本論の鍵となるのでここでおさえておきたい。

住宅設計における書庫

まず、寿岳がこうに語る「一万冊を規準にして作った書庫」について、住宅設計の観点からみていこう。

「向日庵」に転居した 1933 年 6 月において、『図書原簿』に記入された蔵書は 625 冊目である。当時寿岳が私版の読者にむけて刊行した『向日庵消息』「第一信」（1933 年 6 月 1 日記）には、「家族の都合でこの四月からはどうしても手狭になりますので」と向日町への転宅を伝えている。「晴れた日でさへ室内がほのぐらく感ぜられるほどの多くの樹立が周囲にあり、市中の物音は聞こえず、日光と風と雨とがしめやかに隅々を訪れると云ったやうな閑寂境」にある「十年近くも住み慣れた南禅寺の寓居」であったが、前年から龍谷大学に加えて関西学院にも出講していた文章と妻静子、育ちざかりの長女章子と幼い長男潤の一家にとって、600 冊を超える文章の蔵書を抱えながらの僊壺庵での生活には不自由も生じてきたのであろう。

向日町の土地を買い求めた 1932 年の秋ごろの寿岳が『図書原簿』に記した記録のなかに、日本建築協会『住宅図案集』（日本建築協会、1932）（No. 507、記入日：1932 年 11 月 6 日記入、受入先：大阪高島屋）、藤井厚二『日本の住宅（普及版）』（岩波書店、1932）（No. 508、記入日：1932 年 11 月 6 日、受入先：丸善）がある。

前者の『住宅図案集』は、36 名の設計者による「費用 2500 円以内・延坪 35 坪以内」を条件とした住宅設計案が掲載され、序文は、日本建築協会委員長で工学博士の藤井厚二による。日本の住宅改善をめざした藤井厚二（1888-1938）は本書について、協会の創立十五年の記念事業として大阪近郊での住宅博覧会のために募集した小住宅の設計案、神戸鈴蘭台住宅地のための設計案、メートル法普及のために募集した設計案を集めたものであると説明している。また、後者の藤井による『日本の住宅』（初版 1928）は、その土地の気候に則した住宅のありかたを追究するなど、日本住宅の科学的総合研究において、新分野をひらいた画

⁴ 書誌事項に続く（ ）内に『図書原簿』に記載されたNo、記入日、受入先を転記する。

期的なものとして評価されてきた⁵。

寿岳は向日町に土地を買い求めると同時に、これらの書籍を参考にしながら一家が暮らす新しい住宅像を描こうとしていたことがうかがえる。日本の木造住宅の規範をつくったとされる藤井は、自邸に住むことで、風土気候に適合した設計と新しい住宅設備の探求を重ねたことで知られるが、五度目の住宅建築となる 1922 年に京都府乙訓郡大山崎町に建てた藤井の自邸「聴竹居」は⁶、「寿岳家旧住宅向日庵」の範となった住宅建築であり、換気や通風の機能において共通する特徴をもっている⁷。

「向日庵」は、藤井厚二に師事した澤島英太郎が設計し、熊倉工務店によって施工された。寿岳が向日町の新宅に転居した 1933 年 6 月の『図書原簿』には、澤島から寄贈された『家の建つまで』（京都建築協会編、京都土木建築新聞社、1933）（No. 626. 1933 年 6 月 20 日記入）がみうけられる。本書の冒頭には、澤島による「家の建つまで」が 35 ページにわたって掲載されており、自宅を新築する際に必要な知識が実例写真とともに図解されている。家を建てようとする住人の心構えとして澤島は、建築様式をどれにしようか、閑寂な数寄屋風の壁やあじろ張りにかこまれて茶でも、と思いがちなところを「近代住宅はこうした情的な美的要素から一端脱げきって、飽くまでも居住の本質と住宅の本来の目的を考え、これに立脚して費用の許すだけの要求を盛上げて俗気なく、衒気なく、構えずに建てる必要がある。⁸」と助言している。人生で初めて家を建てるにあたり、一家の目的に相応しい住宅像を思いえがいた寿岳もまた、澤島のこのような助言を仰いだことであろう。

本書のはじめに澤島は「土地代や工費の準備、間取り建築家への依頼、書類、図面の完成施工者の選択から、積算契約、官庁への届出、さては地鎮祭をすませ、施工にとりかかって基礎を作り土台を据え、上棟式を挙げ、憂々の音に並々ならぬ苦心を経て、落成後の転宅に、爽々しい新装の家に心嬉しく起臥するに至る迄、その思出や苦心を綴れば、まこと一卷の書をなすであろう。」と記している。この一文を読むと、1933 年 6 月に新居での生活をはじめ寿岳に届けられた本書『家の建つまで』は、設計者澤島英太郎から一家へ贈られた祝の言葉でもあったようにみえてくる。

なお翌年に、『家の建つまで』のいわば続編として刊行された『家の建て方』（京都建築協会編、京都土木建築新聞社、1934）に掲載された「住宅の設計施工 熊倉工務店」の広告欄には、「最近御用命芳名録」として「龍大教授 壽岳文章様」と載り、ほかに「フランスパン 進々堂様」「実業家 続木齋様」の名がみられる。1913 年に進々堂を創業した続木齋が、1930 年に京都大学農学部横に「日本の将来を担う愛する学生たちに、本当のパンらしいパ

⁵ 京大建築学教室六十年史編集委員会編『京都大学工学部建築学教室六十年史』（京大建築学教室創立六十周年記念事業会、1980 年）、p. 115.

⁶ 松隈章『聴竹居 藤井厚二の木造モダニズム建築』（平凡社、2015 年）、p. 143.

⁷ 図録『寿岳文章 人と仕事展』（寿岳文章人と仕事展実行委員会、2021 年）、p. 43.

⁸ 澤島英太郎「家の建つまで」京都建築協会編『家の建つまで』（京都土木建築新聞社、1933 年）、pp. 4-5.

ンと、薫り高いコーヒーを提供したい」と、パリで見たカフェを再現した「ハイカラな店⁹⁾」は、同時代の寿岳にも馴染みがあったと思われるので挙げておく。

また、さきの『住宅図案集』と『家の建つまで』には、「書斎」についての記述はあるものの「書庫」についての記述はみあたらない。一方、顧客芳名録に寿岳の名が載った『家の建て方』には、「住宅諸室の名称」のうち「家族用室」として「書斎（ライブラリー）」、「貯蔵格納室」として「書庫」、とそれぞれ記載がある¹⁰⁾。両書を比較するかぎりにおいては、書庫を備えた住宅設計としては「向日庵」が数少ない好事例のひとつになったといえよう。

間宮商店製の図書原簿

次に、個人蔵書の文化史的側面に目を転じて、寿岳が蔵書記録に使用した用品としての図書原簿についてみていこう。

四冊の『寿岳文章蔵書図書原簿』のうち一冊目の簿冊の標題紙には「CATALOG NO.111／Made by／F. Mamiya & Co., Osaka／Library Supplies」と印字されており、寿岳は間宮商店製の図書原簿専用既製品を使用していたことがわかる。本体の記入欄は、見開き左ページに月日、登録番号、著者、書名、右ページに出版地及出版所、出版年及版数、大サ、装釘、受入先、価格、分類及図書記号、冊数、備考の十三項目名が印字配置されており、先にみた寿岳による「私の蔵書整理法」の内容に一致する。二冊目の簿冊には、制作者である間宮商店の名が印字された標題紙はないが、記入欄の体裁は一冊目とほとんど違いはない。三冊目、四冊目はこれらとは体裁が異なっており、製造元も記されていない。また、一冊目の背には「1930／図書原簿／NO.1／1-5000／壽岳文章／蔵書」と革装に横書き金箔押し、二冊目の背には、革装に上貼りした和紙に手書きで「図書原簿 その二 5001→5999→1000 壽岳蔵」と縦書き、茶の実紋が朱印されている。

このうち、寿岳が一冊目に使用した図書原簿は、間宮不二雄編『図書館研究 第七卷 一般用品ノ話』（間宮商店、1926）に写真とともに紹介されている。大阪で図書館用品を専門にあつかう間宮商店¹¹⁾は、日本の図書館史において重要な役割を担った間宮不二雄が創始した商店である。それまで国内の図書館では、一般に普及していた簿記帳を自館の図書原簿に流用していたが、間宮はその不便を改善しようと図書原簿専用の自社商品を開発した。

間宮は自社製図書原簿のセールスポイントを、「形状ヲ小形トナシ、罫モ一枚ニ 20 罫即チ 20 卷ノ図書ヲ登録シ得ル様式ノ方ガ、取扱上ニモ又登録図書ノ数量ヲ推算スル上ニモ便利デアリマス。」「小口 250 枚-250 頁デスカラ、1 冊ノ原簿デ 5000 卷ノ図書ヲ登録スル事が出来ルノデス。小図書館又ハ家庭文庫用ハ 1000 部登録ノモノガ便利デス。形式ハ全ク同一デス。」と図書原簿の使用を図書館に限らず、家庭における使用にも配慮を示して推奨している。また、「原簿ハ図書館ノ所蔵図書ニ対スル、唯一ノ評価原簿デアルト同時ニ、唯一ノ基

⁹⁾ 「進々堂の歴史」（進々堂公式ホームページ 2025 年 1 月確認）

¹⁰⁾ 京都建築協会編『家の建て方』（京都土木建築新聞社、1934 年）、p. 29.

¹¹⁾ 『図書館研究 第七卷 一般用品ノ話』間宮不二雄編（間宮商店、1926 年）の奥付に「発行所 図書館用品専門 合資会社間宮商店 大阪市北区木幡町二一」とある。

本帳簿デアリマスカラ永久保存ニ耐ヘ得ル用紙ト、装幀トヲ具備シナケレバナリマセヌ。原簿ノ背及簿名、館名並ニ年號及帳簿ノ番號等ハ御希望ニ依リ金箔デ押印致シマス。」と図書原簿の必要性を説き、顧客が喜ぶサービスも用意した。

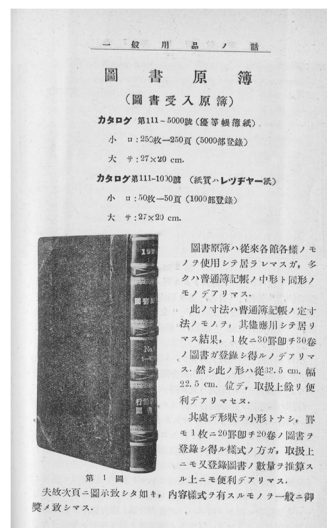
ここで注目したいのは、寿岳が使用した間宮商店製図書原簿は、間宮が「小図書館又ハ家庭文庫用」に推奨した「1000 部登録ノモノ」ではなく、中規模以上の図書館での使用を想定した「1 冊ノ原簿デ 5000 巻ノ図書ヲ登録スル事が出来ル」タイプの図書原簿であるという点である。また、「寿岳文章蔵書図書原簿」の背に施された「1930/図書原簿/NO.1/1-5000/壽岳文章/蔵書」の金文字は、寿岳が顧客として間宮商店に指定したものであることがわかる。のちに一万冊の蔵書を収納できる書庫がいっぱいになってしまったとき寿岳は、「原簿の備考欄に、入れた場所を記しておく」とだんだん記憶が怪しくなってきたゆく私には、随分役に立つ。必要に迫られて「本当に書物を「整理」する場合」、つまり蔵書を売却するさいに、寿岳は「図書原簿」の備考欄に売却額を記入して用いた。

間宮不二雄と図書分類法

寿岳が『図書原簿』に記した蔵書のなかに、『図書館辞典』（間宮不二雄編、文友堂、大正 14 年）（No. 68、1931 年 1 月 3 日記入、受入先：未記入）がある。正月の同じ日に寿岳が原簿に書き付けた他の二冊は、山宮允訳註、*Select Poems of William Blake*（研究社、1925）（No. 66）と、『英作文の訂正』（相良佐著、研究社、1921）（No. 67）であり、いずれも同様に入手先は未記入であるが、英文対訳による『図書館辞典』は、『英語青年』54 巻 4 号（研究社、1925 年 11 月）に書名が掲載されているので、これを目にしたのかもしれない。

ここで、間宮不二雄（1890-1970）の経歴にふれておく。13 歳で丸善書籍部の見習生となった間宮はやがて大阪支店に勤務し、その間、明治 40 年（1907）に丸善京都支店が京都市三条麩屋町に開設されるときには準備にあたった。新しい分野の開拓をせまられていた大阪支店での間宮は、それまで取引のなかった東京の出版所から委託取引をとりつけて、大阪市内での卸と小売りに力を入れた。文房具では、ウォーターマン、オノト、オリオン等の万年筆や A. W. FABER の鉛筆などを、横浜の商館や東京の丸善本店から取り寄せて販売した。間宮が編纂した文房具カタログや、取扱い範囲を拡げた和書の分野別目録は、本店にもない大阪支店独自のものであった。

大正 4 年（1915）に退社して米国に遊学、翌年の帰国後には、銀座でタイプライターや計算機などの事務機器を扱う「黒沢商店」に勤務した。その後、独立して図書館用品商を志ざし、「梅田駅から電車で一停留所東方」の「通りから一寸北へ入った二階建三棟続きの角家」



『図書館研究 第七巻』（間宮商店、1926）に掲載された間宮商店製図書原簿（筆者所蔵 筆者撮影）

に「M.フヤセ商会」の看板を掲げる。このとき、大阪府立図書館から閲覧目録の新調について相談を請け、用品提供をおこなった。間宮は、「私は紙商や印刷所等を訪ね廻った時、中ノ島の某印刷所が新聞社の注文で、皇太子渡欧記念帳を印刷した時用いた表紙の用紙の残紙が沢山あることを知り、色々試験をした結果、厚さも貼合せの必要なく、インキののりも良いことが判ったので、倉庫に詰っていたものを全部引き取り罫引きと穿孔して納入した。図書館でも満足、私も思わぬ商売ができた。¹²⁾」と当時を振り返る。

また間宮は、現在の日本の図書館が標準としている「日本十進分類法」の成立にもかかわった。もりきよし（森清）による「和洋図書共用十進分類法案」が『図書館研究』誌上に掲載され¹³⁾、翌年に、森清編『日本十進分類法 和漢洋書共用分類表及び索引』（間宮商店、1929）として発行された。森は、間宮には「図書館の刷新はまず整理の合理化、すなわち諸規準を確立することである」という考えがあったと振り返る¹⁴⁾。

「書棚整理は Dewey の十進法によっている」という寿岳にとって、図書分類法については関心の対象であったはずである。『図書原簿』に記載された『和漢洋図書分類表』（千葉県図書館協会編、宝文社、1933）（No. 595、1933 年 4 月 10 日記入、受入先：丸善）は、洋書にも対応した英語表記での項目と索引が付されており、寿岳の関心に応え得る資料であったと考えられる。日本国内の図書館が採用する分類法が各館ごと統一されずにあった当時の状況下において、図書館がおこなう図書整理にも、一般閲覧者がおこなう図書検索にも不便が生じていた。そこで千葉県図書館協会が、県下の各図書館が使用する分類表を統一することによって、相互の図書館と閲覧者の有機的なつながりを円滑にしようと作成したものが本書であった。

図書館だけではなく、書店や個人の蔵書整理における利用を視野にいたこの分類表は、デュエーイの十進法に基づいた森清による「日本十進分類法」をさらに書籍本位に適合させたもので、基本分類のもとに、言文別、刊行年別、判型別、装幀別に細分する。寿岳は本書を「丸善」から入手しており、本書が非売の内部資料ではなく書店にも流通していたことがわかる。「向日庵」への転居間近に本書を入手した寿岳であったが、のちに「私の蔵書整理法」において「分類及図書記号は、図書カードのためのものであり、私のように英文学を中心とする個人の蔵書の場合記入しなくても実際の不便は感じない。」といい、『図書原簿』への記入はしなかったものの、本分類表は寿岳の書棚整理の一助になったと考えられる。

II. 蔵書と読書

書籍の入手先

『寿岳文章蔵書図書原簿』において、1930 年から 1940 年頃までに記された書籍の入手の

¹²⁾ 間宮不二雄『図書館とわが生涯・前期』（間宮不二雄、1969 年）、p. 161.

¹³⁾ 仙田正雄『日本十進分類法指針』（綜文館、1949 年）、p. 18.

¹⁴⁾ もりきよし「間宮不二雄 外から図書館を愛した人」石井敦編『図書館を育てた人々 日本編 I』（日本図書館協会、1983 年）、p. 134.

多くが京都市内に店を構えた書店である。洋書の入手先としては¹⁵「丸善*」、「教文館*」、「ぐろりあ*」が多く、「島田奎文堂*」からは『国訳一切経』（大東出版社）、『明治大正昭和文学全集』（春陽堂）、『研究社英文学叢書』（研究社）、『鷗外全集』（鷗外全集刊行会）、『トルストイ全集』（岩波書店）などの、全集や叢書等の定期刊行される書籍を購入している。1932年11月以降の記録にみられる「三土社」からは、明治期から昭和初期にかけての古書を購入している。ほかに、赤尾*、荒木、井上文明堂、川瀬、キクオ書店*、キクヤ*、京阪書店*、鈴之屋書店、そろばんや*、大学堂*、津田書店、天牛、同文館、日の出書房、松田、元木屋*、山崎、ロゴス書店、などの屋号のほか、大阪高島屋、大丸古本展との記入もみられ、寿岳がその日に立ち寄った書店の先ざきで、関心に応じた書籍を購入している様子がみてとれる。

また国外の洋書入手先として、1855年から続くロンドンの‘Francis Edwards’や、イギリスを代表する書肆街チャリング・クロスに1906年に創業した‘Foyles’がある。購入書籍は、‘F. Edwards’からは、1893年にKegan Paulが刊行した、A. W. Pollard, *Early Illustrated Books*、F. Madan, *Books in Manuscript*、W. D. Hardy, *Book-Plates*、C. G. & M. A. Elton, *The Great Book-Collectors*、H. P. Horne, *The Binding of Books*、E. Gordon Duff, *Early Printed Books* (No. 23 ~ No. 28、1930年12月9日記入)や、Michael Sadleir, *The Evolution of Publisher's Binding Styles 1770-1990* (London: Constable, 1930) (No. 49、1930年12月17日記入)、A. C. Swinburne, *William Blake* (London: Hotten, 1928) (No. 235、1931年7月29日記入)、『Foyles』からは、Arthur Symons, *William Blake* (London: Constable, 1907) (No. 218、1931年7月23日記入)を購入している。このように、洋書をあつかう丸善などの国内書店を通さず、ロンドンの書店から直接購入した書籍が、寿岳の研究を支えた書物として蔵書のなかに少なからずみうけられる。

「ぐろりあ そさえて」

寿岳が多くの洋書を購入して記した「ぐろりあ」という屋号は、「ぐろりあ そさえて」の略記であろう。「ぐろりあ」から入手した書籍として、J. H. Wicksteed, *Blake's Innocence & Experience* (Dent, 1928) (No. 16 1930年12月4日記入)、William Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, (Dent, 1927) (No. 41 1930年12月13日記入)、A. Esdaile, *A Student's Manual of Bibliography* (G. Allen & Unwin, 1931) (No. 261、1931年8月21日記入)、Rev. James Hyde, *A Bibliography of the works of F. Swedenborg* (The Swedenborg Society, 1906) (No. 471、1932年10月19日記入)などが挙げられる。

寿岳の著書、『キルヤム・ブレイク書誌』（1929年）や『書誌学とは何か』（1930）を刊行した伊藤長蔵の「ぐろりあ そさえて」と屋号との関係性をここで確認しておきたい。書肆としての「ぐろりあ そさえて」について、『京都書肆変遷史 江戸時代～昭和二十年』（京都府書店商業組合、1994年）は次のように記している。「創業者／伊藤孝次」「創業年／1929年」

¹⁵ *を付した書店は、京都書肆変遷史編纂委員会編『京都書肆変遷史 江戸時代～昭和二十年』（京都府書店商業組合、1994年）に記載がある。ただし屋号のみから特定できないものは除く。

「創業地／下京区河原町通三条下ル（蓬莱ビル内）」「業種／小売業」「昭和四年五月書店組合に加入。図書販売専業と名簿に記録あり。特価本（見切本）の販売店。同十一年廃業脱退した。この場所は厚生閣（吉田文治）が同十二年より特価本と新本の販売に使い、その後、その建物は京都駿々堂書店が最近（平成五年）まで利用していたが、平成六年建替えのため取り壊しになった。」創業者の伊藤孝次は、伊藤長蔵の姉ときと、その入夫英一の長男であり、長蔵と同年 1887 年の生まれである。¹⁶

一方、寿岳の著書の版元としての「ぐろりあ そさえて」について、「株式会社ぐろりあそさえて」としての登記は 1931 年 7 月 20 日であり¹⁷、寿岳の著書をさかのぼると奥付は、『書誌学とは何か』（1930）では「合資会社　ぐろりあ　そさえて」、『キルヤム・ブレイク書誌』（1929）では「ぐろりあ　そさえて　代表者伊藤長蔵」となっている。

以上をふまえて、「ぐろりあ　そさえて」から刊行された、長蔵の兄長次郎の長男である伊藤熊三¹⁸の著書『感興処々』（1927）をひもといていこう¹⁹。本書は、熊三が「昨年の夏、ノルウェー旅行の帰途、コペンハーゲンから田舎の乾酪工場を見に行く汽車の中で、グロリアソサエテの主人即ち私の叔父より旅行記を出してはどうかとの勧めを受けた²⁰」ことから刊行したエッセイ集である。そのなかの「欧遊感興処々」において熊三は「ノルウェーへの旅（1925.7）」について「此の旅は最近叔父と M 君に依って計画されていた処へ私と家内が参加したのである。」と記しており、伊藤長蔵たちの旅の一端を知ることができる。熊三は、夜の十時頃にボートで到着したノルウェーのフィエールランドの印象を、「薄暗い神秘的な静寂の中に小さな家やら芝生が光っている。船川未乾氏の画の様な静さだ。」と白夜の国の

¹⁶ 『人事興信録 7 版』（人事興信所、1925 年）による。伊藤長次郎は 1873 年生まれ、1895 年に家督を相続し幼名熊蔵を改め襲名した。長次郎の弟長蔵は 1887 年生まれ。（p. 40）長次郎の姉ときは 1864 年生まれ。ときの入夫伊藤英一は 1864 年生まれ。（p. 48）

¹⁷ 『官報 第 1435 号 付録』（昭和 6 年 10 月 9 日）に、「商号　株式会社ぐろりあそさえて／本店　京都市中京区河原町通三條下ル山崎町二百五十番地／目的　書籍雑誌ノ輸入並ニ販売出版並ニ印刷製本其他之ニ関スル付帯業務／設立ノ年月日　昭和六年七月二十日」「取締役　伊藤長蔵／伊藤孝次／熊倉成一（各居住地記載引用略）」とある。

¹⁸ 『人事興信録 第 12 版上』（人事興信所、1939 年）による。伊藤熊三は 1897 年生まれ、1921 年に京都帝国大学経済学部を卒業した。（p. 66）

¹⁹ 「ぐろりあ　そさえて」から刊行された伊藤家の人物による著書としてほかに、伊藤長次郎『真俗二諦観集』（1927 年）、[伊藤長厚著]『晩黄余韻』（1927 年）がある。後者は巻頭に「教念院令専三十三回忌辰に当り此集を上梓し謹みて墓前に捧く　昭和二年九月　伊藤長蔵　伊藤孝次　伊藤熊三」とあることから、本書は先代の逝去により明治 28 年（1895）に家督を継いだ長次郎（幼名熊蔵）の父、つまり長蔵の父である先代の長次郎に捧げられたものであると考えられる。また国立国会図書館典拠データによると「晩黄」は伊藤長厚（伊藤長次郎 4 世）の号である。

²⁰ 伊藤熊三「序」『感興処々』（ぐろりあ　そさえて、1927 年）「欧遊感興処々／ジョージ　キャドベリを憶ふ／藝術愛好者として／宝林和尚を憶ふ／手記帳の中より／自己発展（人生ノ帰趣ニ就キテ）／労働及事業ノ人格性（経済ト人生トノ関係ニ就キテ）」からなる。

夏風情を伝えている。またあとがきに「装幀は船川未乾氏の好意により出来たものである。／昭和二年六月 京都南禅寺畔にて 伊藤熊三」と記しており、本書からは熊三と船川との交流をうかがい知ることができる。

船川未乾をめぐる人々

本書『感興処々』の標題紙の装画は、洋画家船川未乾（1886-1930）によるものであるが、寿岳の著書『書誌学とは何か』（ぐろりあ そさえて、1930）の標題紙の装画もまた、キュビズム的なその画風から、船川によるものと推察できる。船川が寿岳の『書誌学とは何か』の装画を1930年6月20日の刊行にあわせて制作したとすれば、この装画は遺作に近い作品であろうか。後年、寿岳は「伊藤長蔵は、エッチングに熱を入れていた故船川未乾画伯の後援者であった関係上、私も伊藤氏と一緒に、何度か未乾氏を京都鹿谷のアトリエに訪ねた²¹」と船川と伊藤の関係について証言している。

船川未乾は1922年に渡仏し、キュビズム風の作品で知られるアンドレ・ロート（1885-1962）に師事した。寿岳が訪ねた京都鹿ヶ谷法然院町の住まい²²は、熊三が住む岡崎法勝寺町²³や、寿岳が住む僊壺庵から徒歩三十分ほどの場所にあった。渡仏以前の1918年頃に南禅寺北ノ坊に住んでいた船川は、隣人の美学者にして詩人の園頼三との共著によって、自装の詩画集『自己陶醉』（表現社、1919）を刊行している。児童文学者の尾関岩二は、装幀家としての船川についてこうふり返る。「船川未乾君は或程度まで商業主義を認めながら、その一線を潜って低下させようとする出版者の要求を一蹴して居った。（中略）押しというより、人間的魅力といった方がいいだろう。そしてどんな算盤に合わない計算でも、彼によって主張される時には、肯かずにいられなくなるという、そういう様な不思議な力を持っていた。²⁴」寿岳が当時私淑していた新村出が、未完のまま早死した船川の作品について記している。

「このごろだいぶん書誌学が盛んになった。（中略）寿岳文章君などもこの方面の専門家として勉強しているので、同君の「ブレイク書誌」などは実に立派なものであった。私のイソップ研究もやはりイソップ書誌学の一つに違ひないので、日本に於るイソップの文献は目につき次第集めている。」とし、新村が開催したイソップ書誌の展覧会に出品された船川の作品についてこう続ける。「その京都の展覧会に船川未乾君のエッチングによる挿絵が出品されたが、これは外国にもまだ見ぬほど立派なもので、船川君は三十枚を完成して百部限定、定価七十円ということで「ぐろりや・そさえて」から出版する筈であったが、惜しいかな船川君は、その仕事をいくらしないうちに、なくなってしまったし、「ぐろりや・そさえて」

²¹ 寿岳文章「ビュイックと日本」『わが日わが歩み』（荒竹出版、1977年）、p. 175. 初出：「ピロティ」1972年 なお、寿岳『書誌学とは何か』の船川未乾による装画について、中島「寿岳文章と読書」（再掲書）において書影を付して言及されている。

²² 『美術年鑑』（朝日新聞社、1930年）の記載を確認した。

²³ 伊藤熊三『感興処々』奥付による。

²⁴ 尾関岩二「船川未乾君の装幀」『書物倶楽部』第一巻第一号（裳鳥会、1934年）、p. 46.

の方も失敗してこの立派な本が立ち消えになった。惜しい限りである。²⁵」

「ぐろりあ そさえて」の出版事業は、伊藤長蔵が兄との縁で、大谷探検隊に出資したことで知られる大谷尊由とともにした英国の旅が契機となり創始された。伊藤はウィリアム・モリスの流れをくむ私版家を訪ねるうちに、書物出版の意義や、美しい書物とはいかにあるべきかという考え方にすっかり感化されて帰国したのだった。出版事業を始めるにあたり伊藤が知恵を借りた人物のひとりが新村出であり、やがて新村を通じて伊藤長蔵、柳宗悦、寿岳文章たちの出会いへとつながってゆくことになる。²⁶

このように、寿岳にとって著書の版元であり、主要な洋書の入手先であった「ぐろりあ そさえて」をとりまく人物たちの相関図は、寿岳が住んだ南禅寺界隈を舞台に、伊藤長蔵とその縁戚の人々、船川未乾、新村出、柳宗悦たちによってくりひろげられていった。のちにつづく寿岳の足跡からふりかえると、「ぐろりあ そさえて」から刊行した自著『書誌学とは何か』を『図書原簿』の筆はじめとしたこの時期は、寿岳の学問と実践における磁場が形成された重要な時期であったようにみえる。

向日庵私版と印刷見本

『図書原簿』に記された書籍のうち、向日庵私版の刊行との関わりを示すものとして、『インサツ』（内外印刷株式会社、1930）（No. 378、1932年4月23日記入）がある。本書は、内外印刷株式会社の創立十周年を記念して発行された非売の見本帳で、寿岳はこれを「キクオ書店」から入手している。隅々まで凝った装幀は、寿岳の目をおおいに楽しませたのではないだろうか。



『インサツ』（内外印刷株式会社、1930）
表紙（筆者所蔵 筆者撮影）

和綴じの表紙絵には、「書籍雑誌新聞 内外印刷株式会社」と看板を掲げる社屋前に社章入りの自動車が控え、洋装の客が出入りする様子を描いた凸版印刷を用いている。見返しには商店で用いられる包装紙見本のような、自社の社章や社名ローマ字をあしらった二種のカラー刷りの洋紙が貼られている。本文は、「網目銅版淡調整版」による扉絵、「三色版」による本木昌造翁肖像、和文号数およびポイント式活字見本、欧文活字見本、角花・欄・罫見本、活版・組版見本、網目写真銅版印刷見本、手摺木版見本、コロタイプ、石版、オフセット印刷見本等から構成され、自社の印刷技術をあますことなく披露する内容となっている。染め

²⁵ 新村出『典籍雑考』（筑摩書房、1944年）、pp.268-269.『新村出全集 第七巻』（筑摩書房、1973年）所収、初出：「大阪時事新報」1933年11月1日

²⁶ 寿岳文章『柳宗悦と共に』（春秋社、1980年）、pp.218-223. なお寿岳は本書において、伊藤長蔵の兄を「長兵衛」としているが（p.219）、『人事興信録』には長蔵の縁戚者としてこの名の記載は見つからない。

色の異なる綴じ紐や角布にも、強固で美しい製本技術がみられる。函は厚紙を使用した書類挟みのような意表を突くデザインである。

寿岳が「向日庵私版発願記」として私版の開始を公表したのは、1932年4月に『インサツ』を入手した約半年後の、柳宗悦との共同編集誌『ブレイクとホキットマン』の第2巻第11号（1932年11月）においてであったが、このような見本帳を手にとり眺めながら、寿岳は自身の私版刊行に構想をふくらませはしなかったであろうか。向日庵私版のうち、『書物』（1936）、『永遠之福音』（1938）、『和紙景観』（1939）には、内外印刷株式会社の名が印刷者として奥付に明記されている。寿岳による最初の私版である『唯理神之書』（1932）や、続く『セルの書』（1933）、『無染の歌』（1933）、『無明の歌』（1935）には記されていない。内外印刷株式会社が印刷をおこなった向日庵私版の制作過程において、あるいは本書を机上に広げながら、寿岳と印刷者との対話は進められたのかもしれない。

『紙漉村旅日記』と写真術

寿岳と妻静子の共著『紙漉村旅日記』（向日庵、1943）は、夫妻が1937年10月から1940年3月までおこなった全国手漉紙業調査旅行の記録であり、本書には当地で漉かれた134種の紙見本と、文章が現地で撮影した199枚の写真が掲載されている。高松宮から有栖川宮奨学金を受け、教師としての仕事の空き時間をあてて、日本手漉紙業の歴史地理的研究に携わることになった寿岳は、『向日庵消息 第九信』（1938）にその意気込みを「学徒として身に余る光栄であると共に楽しい、しかし重大な責任をも感ずる次第であります。」と記してこう続ける。「本邦各地に現存している手漉紙業を实地踏査するのが第一の仕事となりますので、去年の夏生れて始めてカメラというものを買い、稽古もそこそこに秋に入ってからしづ子と共に紀州や大和の漉場を行脚いたしました。」

調査旅行に先だってカメラを購入した寿岳は、『アサヒカメラ臨時増刊 密着写真術』（朝日新聞社、1936）²⁷をはじめ、写真家鈴木八郎による『カメラを使いこなすコツ』（アルス〔以下同〕、1937）²⁸、『正しい露出の決め方』（1937）²⁹、『誰にも出来る現像の要領』（1937）³⁰、『焼付から引伸まで』（1937）³¹、『四季の写真術』（1938）³²、『私の写真術』（1938）³³をいずれも「川瀬」で入手している。

神戸市立葺合補習学校の夜学校の教師をしていた二十歳前後の寿岳が『アミエルの日記』を購入したのも³⁴、寿岳の編集による『モリス記念論集』（1934）を刊行したのも、この神戸

²⁷ No. 1932、1937年9月4日記入、受入先：判読不明

²⁸ No. 1728、1937年5月18日記入

²⁹ No. 1935、1937年9月15日記入

³⁰ No. 1936、1937年9月17日記入

³¹ No. 2006、1937年12月4日記入

³² No. 2046、1938年2月2日記入

³³ No. 2065、1938年2月28日記入

³⁴ 寿岳文章「若き日の読書」『本の話』（白鳳社、1964年）、p. 209.

元町の川瀬日進堂書店であったが、『図書原簿』にはただ「川瀬」とのみ記入するのが常であった。なじみの書店主とのあいだに、写真術や紙漉調査旅行の話題がはずんだであろうか、当時関西学院に出講していた寿岳ならばよく立ち寄ったはずである。

のちの寿岳の言葉である。「西国第一の札所にあやかっただけではないが、昭和 12 年以来三ケ年にわたって行われた私どもの和紙巡礼の札始は、実に那智のお山に程近い敷屋村であり、その熊野川べりの漉家に、生まれて初めて使う私のカメラが向けられた。しかし私の写真術は、それ以来一向に進歩せず、何やかやと友人にひやかされてばかりいる。³⁵⁾

Ⅲ. 蔵書目録研究の可能性

夏目漱石「カーライル博物館」

わたしたちはなぜ、他者の蔵書目録に関心をもつのだろうか。特別に関心のある人物や、その人物の学問について理解しようとするとき、その人物の読書体験を追体験することによって、その精神性や人間性に触れてみたいと考える。夏目漱石もそうであった。

夏目漱石(1867-1916)の作品「カーライル博物館」(1905)³⁶⁾は、漱石がロンドン滞在中に訪問したカーライルの旧居での体験に基づいたエッセイ風の作品である。イギリスの歴史家トマス・カーライル(1795-1881)による『英雄崇拜論』や『衣服哲学』をはじめとする著作は、明治期の日本においても翻訳され紹介された。影響を受けた人物として『代表的日本人』を著わした内村鑑三や、『武士道』を著わした新渡戸稲造が知られ、カーライルに共感する知識人たちのあいだに「偉人カーライル」のイメージが共有されてきたといえる。

日本でカーライルの思想が活発に紹介されはじめた明治二十年代当時、漱石は第一高等中学校の学生であった。その時期に漱石は、夢の中にカーライルがあらわれて友のように親しく話しかけてくれたことを‘My Friends in the school’³⁷⁾と題した英作文に書いた³⁷⁾。漱石にとってそれほど「偉人カーライル」は特別な存在であったが、同時にカーライルの人間性にも惹かれていた漱石の関心が、作品「カーライル博物館」にはあらわれている。

1900年に文部省からイギリス留学を命じられた漱石は、ロンドンに滞在し1901年8月3日の日記にこう書き付けている。「午後 Cheyne Road 24 ニ至リ Carlyle ノ故宅ヲ見ル頗ル粗末ナリ Cheyne Walk ニ至リ Eliot ノ家ト D.G. Rossetti ノ家ヲ見ル前ノ Garden ニ D.G. R. ガ噴井ノ上ニ彫ツケテアル」³⁸⁾と、日記にはカーライルの家を「頗る粗末ナリ」とのみ印象を記した漱石であったが、作品「カーライル博物館」の描写はどうだろうか。

³⁵⁾ 寿岳文章『和紙風土記』(河原書店、1941年)、pp. 267-269.

³⁶⁾ 『學鐙』第9巻1号(丸善、1905年1月)に、夏目金之助「カーライル博物館」を発表後、翌年に『漾虚集』(大倉書店、1906年)に収録刊行された。

³⁷⁾ 神田祥子「「カーライル博物館」論 明治期のカーライル受容を視座として」『夏目漱石における東と西』(松村昌家編、思文閣出版、2007年)、p. 162.

³⁸⁾ 『漱石全集 第二十四巻』(岩波書店、1957年[第四刷1979年])、p. 58.

いまでは博物館となっている「四角な家の石段の上に立って鬼の面のノッカーをコツコツと鼓く」と婆さんが出てきて記帳を求められる。「余は倫敦滞在中四たび此家に入り四たび此名簿に余が名を記録した覚えがある。此時は実に余の名の記入初であった。可成丁寧に書く積りであったが例に因って甚だ見苦しい字が出来上った。」そうして一階から四階までの部屋を順にめぐる。「後ろの部屋にカーライルの意匠に成ったという書棚がある。夫れに書物が沢山詰って居る。六づかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。読めさうもない本がある。」「夫から二階へ上る。こゝに又大きな本棚が有って本が例の如く一杯詰って居る。矢張り読めさうもない本、聞いた事のなささうな本、入りさうもない本が多い。勘定したら百三十五部あった。」³⁹

カーライルの蔵書にたいする「余」の関心の強さがうかがえる描写である。さらに漱石は、「カーライル博物館」を発表した翌月の『學鐙』（1905年2月15日）に「カーライルの旧居に今でも保存してあるカーライルの遺書の目録の中には面白く思ふ人もあるだらうと思って書写して次に出す⁴⁰」として、カーライルの蔵書目録⁴¹を発表した。そこには「一 初階にある[ママ]者」として148冊、「二 二階ニアル者」として135冊、「三 四階ニアル者」として36冊の蔵書を掲載している⁴²。

「漱石山房蔵書目録」

その夏目漱石自身の蔵書を示す「漱石山房蔵書目録」がある。全集としては最新のものである『定本漱石全集 第27巻 別冊下』（岩波書店、2020）に収録された「漱石山房蔵書目録」の凡例によると、この目録は没後まもなく刊行された

『漱石全集 別冊』（漱石全集刊行会、1919）にはじめて収録され、その後の全集においてほとんど改訂されることなく継承されてきた。漱石の蔵書そのものは、1934年に東北大学付



カーライルの家 人物はカーライル（1857年撮影） Reginald Blunt, *The Carlyle's Chelsea Home*, (George Bell and Sons, 1895)より（筆者所蔵 筆者撮影）

³⁹ 夏目漱石「カーライル博物館」『漾虚集』（大倉書店、1906年）、pp. 40-41.

⁴⁰ 「カーライル博物館所蔵 カーライル蔵書目録」『漱石全集 第二十三巻』（岩波書店、1957年、[第五刷 1980年]）、pp. 135-157.

⁴¹ 夏目金之助「カーライル遺書目次」『學鐙』第9巻2号（丸善、1905年2月）、pp. 8-26.

⁴² 「カーライル博物館所蔵 カーライル蔵書目録」（再掲書）による。なお、漱石による旧居の描写には、カーライルの遺族による Carlyle's House Memorial Trust が1900年に発行した、旧居の展示カタログ *Carlyle's House Catalogue* の内容を直訳するかたちで、作中に多くとりいれていること、漱石が「書写した」蔵書目録についても、カタログ巻末に掲載された目録を写したものでことが指摘されている。（「「カーライル博物館」論」再掲書、pp. 165-166.）

属図書館に移管されたが、「目録」が作成されてから同図書館に移されるまでにすでに失われた蔵書もあり、そこに掲載されているすべての書籍類が現存するわけではない、ということである。

寿岳は「漱石と英文学とのつながり」を論じた文章のなかで、「読書人にとって、その人の蔵書目録は、内部の世界をうかがう一つの指標となろう。」といい、漱石の蔵書目録についての所感をこう記した。「ところで漱石の場合、家蔵欧文書目録から得られる英文学者・漱石のイメージは、案外稀薄のように私には思われる。数量は少なく、通観的で、テキストの精選度も低い。それに比べると、漱石山房蔵の俳書や漢詩書や仏書には、なかなか特色があり、作家・漱石の風格とぴっしり密着する。⁴³」そして、「英文学と漱石とのつながりをうかがうには、まず蔵書目録を点検し、つぎに書き入れのある書物については、その余白書き込みと本文のかかわり合いを吟味するのが第一である。」とし、「それをやってみて、私が異様に感じたのは、漱石山房の蔵書に、カーライルやマコーレイ以外、英国史はもとより、歴史一般に関する本格的な書物が欠落していることと、西欧、特にイギリスにおけるキリスト教の、屈折の多い浸透を主題とした書物が、一冊も見当たらないことである。⁴⁴」と述べている。

ここに寿岳が「漱石山房目録」の点検と、漱石による蔵書の余白書き込みと本文とのかかわり合いの吟味を実践することによって得たことは、英文学との向き合い方において、「歴史的感覚のなかでキリスト教とイギリス文化に触れる」ことにより「英文学の地霊」に歩み寄ろうとした⁴⁵自身の方法と、漱石の英文学との向き合い方との隔たりを知ることだった。なお、寿岳が本論において参照した漱石の全集は、「決定版旧漱石全集の別冊には、雑誌や新聞の記者の問いに答えて、愛読の作家や書物を挙げた漱石の談話が、かなり数多く収められており⁴⁶」としていることから、1937年に刊行された『漱石全集 第十八巻』（漱石全集刊行会）であると考えられる⁴⁷。本書には「漱石山房蔵書目録」と「蔵書の余白に記入されたる短評並に雑感」が収められており、寿岳はこれによって漱石の蔵書と余白書き込みを吟味したのであろう。

ロンドン滞在中の漱石が記した「日記」から、書籍の入手についての記述を拾いあげ、「漱石山房目録」の記載と比較する作業は、「文豪夏目漱石」の肖像写真とは別の横顔がかいまみえ、楽しいものである。明治三十四年（1901）の日記からいくつか具体的にみてみよう。

⁴³ 寿岳文章「漱石と英文学のつながり」『漱石における東と西』（日本比較文学会編、主婦の友社、1977年）、p. 80.

⁴⁴ 前掲書、pp. 85-86. これについて、中島俊郎「関西学院と寿岳文章－宗教的真理の追求－」『関西学院史紀要』第29号（関西学院学院史編纂室、2023年）において言及されている。（p.150）

⁴⁵ 前掲書、p. 86.

⁴⁶ 前掲書、p. 85.

⁴⁷ 矢口進也『漱石全集物語』（青英舎、1985年）「二十回忌の決定版」を参照した。（pp. 50-51.）

「二月六日 …昨日買ヒタル書物到着ス宿ノ女房間テ日アナタハドコデコンナ古本ヲ御求メニナサイマスカト」「二月十二日 …Charing Cross ニテ古本ヲ購ハントス一週間前ニ出タル catalogue 中ノ欲シキ者大概ハ売レタリ何人が買フニや倫敦ハ廣キ処ナリ Mackenzie ノ三卷モノト Macpherson ノ Ossian ヲ得テ帰ル」「二月十三日 Camberwell Green デ絵入りノ草花ヲ説明シタ本ヲ二冊十志デ買タ」「二月十四日 …昨日古本を買タ Camberwell の爺ハストーブガナクテ寒イカラト云フテ「ガス」ヲツケテ寒ヲ凌イデイタ此爺トアノ青イ雇人ヲ見ル度ニ Scrooge ト Bob⁴⁸ノ事ヲ思ヒ出ス」「六月三日 Elephant & Castle ニ至リ Hazlitt ノ Handbook 其他古本 2guinea 許ヲ買フ」「七月九日 …Holborn ニテ Swinburne 及 Morris ヲ買フ」「七月二十日 午前 Miss Leale 方ニ引越ス大騒動ナリ四時頃書籍大革靴来ル箱大ニシテ門ニ入ラズ」⁴⁹

漱石がロンドンの書肆街で嬉々として入手した書籍であろう書名が、「漱石山房目録」にもみうけられる。このように「漱石山房目録」を眺めると、ロンドンのカーライル旧居において、「偉人」であり「友」でもあるカーライルに触れた漱石と同様に、書物をめぐって一喜一憂するわたしたちと同じ「本の友」のような漱石の表情をみようとすることもできるのである。

Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa

カーライルの金言のひとつに ‘The true University of these days in a Collection of Books’ (昨今、蔵書こそ真の大学である) という言葉がある。これは、カーライルによる『英雄と英雄崇拜』のなかで、「人が理論的知識を得るのは書物からであって、あらゆる教授たちが最善を尽してくれても、結局のところ知識というものはその人が読む書物次第である」という文脈のなかで述べられた言葉であるが⁵⁰、この金言を銘に掲げた、市河三喜の蔵書目録が寿岳の蔵書のなかにある。

Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa, privately printed, 1924, (No. 254, 1931 年 8 月 9 日記入、受入先：研究社) (以下 *Catalogue* と略記する) は、東京帝国大学において初めての英語学英文学教授となった市河三喜 (1886-1970) の蔵書目録であり、留学中のイギリスで購入した書籍と、帰国後にカタログでの海外注文によって収集した書籍を掲載している。目録の標題紙⁵¹に掲げた「昨今、蔵書こそ真の大学である」の金言が語るとおり、市河の蔵書は、日本の大学には外国語の研究に必要な蔵書が他国の大学に比べていかに貧弱であるかを痛感した市河の強い使命感によって構築された⁵²。

寿岳は『英語青年』誌が組んだ市河三喜追悼特集号 (1970) に「市河先生の蔵書」として、*Catalogue* の市河の英文による前書きを引いた一文を寄せている⁵³。「政府が大学のために出す図書購入費は全くの雀の涙程度で、何のたしにもならない。よし、それでは私費を全部投

⁴⁸ ディケンズの小説『クリスマス・キャロル』の登場人物

⁴⁹ 『漱石全集 第二十四巻』 (再掲書) による。

⁵⁰ 入江勇起男訳『カーライル選集 2 英雄と英雄崇拜』 (日本教文社、1963 年)、pp. 232-233.

⁵¹ 標題紙には *Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa, part I, English and Comparative Philology* と記されている。

⁵² 神山孝夫『市河三喜伝』 (研究社、2023 年) に市河の書籍収集、蔵書の寄贈、について詳述されている。

⁵³ 寿岳文章「市河先生の蔵書」『英語青年』116 巻 7 号 (研究社、1970 年 7 月)、p. 374.

入して、買って買って買いまくろう。弱冠 27 歳の気鋭の先生はこう決意された。」こうして市河が構築した蔵書のうち、特に貴重なものは自宅よりも安全な場所にと、大学の研究室に収めたその書籍が、1923 年の関東大震災によって焼失した。寿岳は「しかしその後、詩人 Ralph Hodgson が先生のために作った phoenix の bookplate が告げるように、先生は灰燼の中から新しい生命を得て立ちあがり、その生涯に、少なくとも質的には ‘one of the largest linguistic libraries in the world’ を作られた。」とし、市河の信念として集書の根底にあったカーライルの金言に触れて「おしみなく研究者に書物の借覧を許された先生の平素の態度ともつながるであろう。」と結んでいる⁵⁴。Catalogue は、震災当時すでに印刷がはじめられていた。記載のうち焼失した書籍には「*」が付され、翌 1924 年に Catalogue は市河の私版として刊行された。

市河の蔵書票に、灰のなかから翼をひろげて飛立つ不死鳥を描いたラルフ・ホジソン (1871-1962) は、寿岳にとっても特別な人物であった。1938 年の春、東北帝国大学の客員教授であったホジソンが帰国することになったとき、寿岳はホジソン持参の 18 世紀の手刷印刷機と活字を譲り受けることになった。あのウィリアム・モリスもコブデン＝サンダスンも使用したという、伝統ある英国製の古い手摺印刷機がほしいと寿岳がかねてから願っていた印刷機である。活字とインキも揃っている。東京でホジソンと面会した寿岳は心からの贈り物として、向日庵私版による芹沢銈介『絵本どんきほうて』(1936) を献じ、そのときの「食卓の詩人ホヂスンさん」が「型紙が描くこの日本化した騎士の冒険に、すっかり有頂天になり、飽かず眺め入って嘆賞する」こと、食事のことなど忘れてしまうほどであったと寿岳は懐かしむ。

夏に寿岳の自宅に届いたこの印刷機は、全国手漉紙業調査のさなかでもあったことから、ひとまず馴らしてもらおうと懇意の印刷所に預けることにした。いずれはこの英国製の印刷機と活字とインキで和紙に刷って贈り物にしたいと心に決めていた⁵⁵寿岳であったが、のちにこの印刷機は戦時の金属供出の標的となり⁵⁶、計らいは叶わなかった。

市河三喜は、東京大学を退職するにあたって蔵書の一部を英文学研究室に寄贈した。この

⁵⁴ 寿岳自身、市河三喜から学恩を受けた一人である。寿岳は『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』（弘文堂、1949 年）のあとがきに「市河三喜博士は、所蔵コベット英文典を筆者に贈られたのみならず、東京大学に寄贈された博士の旧蔵書中、コベットに関するものをわざわざ借り出して筆者の繙読に便せられた。いつもかわらぬ御厚誼に対し、記して深い学恩に感謝する。」と記している。（なおこのことについては、本論集『向日庵』第 8 号に掲載する、佐藤光「評伝作家としての寿岳文章——『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』の場合」における「資料 引用箇所出典一覧」により示唆をいただいた。）

⁵⁵ 寿岳文章「ホヂスンさんの置土産」『書物展望』9 卷 1 号（書物展望社、1939 年 1 月）

⁵⁶ 寿岳文章『図説本の歴史』（日本エディタースクール出版部、1982 年）、p.176. 本書によるとこの印刷機は「アルビオン」であった。また寿岳は「ホヂスンさんの置土産」（再掲書）において「パディングトン・プレスといって、大型や八折判までの大きさが一度に二頁ずつ刷れる」ものであったと記している。

とき市河は「本とわかれる」という一文に、自身と蔵書のかかわりを振りかえり綴っている。「そもそも自分の図書収集は学生時代に始まり、本郷神田の古本屋街を歩きまわっては専門の参考書を買ひ漁ったものだった。(中略) 貧しい財布と相談しながら一冊一冊段々に蔵書がふえるのを楽しみにしていた。」1912年に国からイギリス留学を命じられた市河は、ロンドンに入るとすぐにチャリング・クロス(G)の古本屋街に出かけ、「いままで名だけ知っていてお目にかかった事のなかったような本がズラリと並んでいるのでまず若き胸を躍らし」た。買いたくてたまらず、月百八十円の留学費のうち百円を書籍の購入に費やし、残りの八十円を下宿代などにあてた。「こうして二年後には相当集まったので、当時帝国海軍が英国に注文して出来上がった軍艦金剛に便乗させて留守宅へ届けた」のだった⁵⁷⁾。英語学、言語学に関するか



市河三喜蔵書票のデザイン
『日本英文学会五十年小史』
(日本英文学会、1978)
表紙より(画像提供: 中島俊郎)

ぎり「世界最大の蒐集の一つ」にしてみせようという野心を抱いた市河は、同じ目的で言語学書の蒐集をおこなったナポレオンの甥にあたる人物の蔵書目録に着目する。「大変興味を感じ、自分の買った本をいちいち較べてチェックして彼と競争しようと決心した。二十八才の貧乏留学生在がナポレオンの甥と競争しようというのだから大変なことである。」競争の結果、「全体の部数においては及ばないが、英語学においては自分の方が遙かに完全であり網羅的」なものになった。寿岳の「その生涯に、少なくとも質的には‘one of the largest linguistic libraries in the world’を作られた」という言葉は、このような事実に基づくものであろう。しかし、「大英博物館にもないような珍本もいくつか集まったがそれは震災で研究室の蔵書と運命を共に」することになってしまった。

蔵書目録と図書原簿

ナポレオンの甥と競争した市河の野心に鑑みれば、寿岳が *Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa* を入手した目的を想像することができる。市河三喜博士が‘The true University of these days in a Collection of Books’との使命感から構築した蔵書目録とあれば、分野を同じくする学生や研究者にとっては把握しておくべき書物を包括した、いわば「書誌」として格好の参考資料になるからである。寿岳は市河の *Catalogue* に目を通し、初見の書籍が挙がっていれば必要に応じて求めはしなかったであろうか。

市河の *Catalogue* は、豊かな蔵書内容を示すと同時に、蔵書というものは戦争や災害などによっていとも簡単に喪失されうる儚い存在である、という事実もまた伝えている。蔵書目録には、その書籍が存在したという事実の記録としての役割がある。蔵書が戦火に焼失したあとも蔵書目録が残ってさえすれば、すくなくとも失われた蔵書の全貌を知ることができるからである。

⁵⁷⁾ 市河三喜「本とわかれる」『小山林堂随筆』(研究社、1949年)、pp. 261-262.

さきにみた「私の蔵書整理法」の記事として土居光知は、「寿岳さんが最近『英語青年』に書かれているのを読んで、羨ましいなあ、と思っていた」ところに寄稿依頼があった、と前置きを添え、戦火で焼失した自身の蔵書について綴っている。手刷印刷機をめぐってホジソンと寿岳とを仲介したのも、この東北帝国大学に奉職していた土居である。「1945 年 7 月 10 日の火事に大学に置いてあった私の本は焼けてしまった。(中略) 本が焼けると、コンクリートの壁の中で猛火が風を起してうずまいたと見え、Arnold の本の灰も、Pater の本の灰も、Shelley の本の灰も相交わり、2 間×3 間の室のコンクリートの床一面に尺余の厚さの灰となっていた。」そして焼け残った日本文学の本を用いて比較文学の研究をせざるをえなくなったとして、「失った本を再び買い求める気には、中々なれないものである。私は丸善や紀伊国屋へ行くと、つい戦後に書かれた本ばかり買ってくる。(中略) 自分の思想をはやく整理し、日本文学を研究し整理する仕事にかからなければならないと思うが、いつになっても、それができない。」と結んでいる⁵⁸。

ここまでに見た、カーライル蔵書目録、漱石山房目録、*Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa*、はいずれも蔵書を分野ごとなど何らかの区分ごとに分けて掲載した「蔵書目録」である。ひるがえって、『寿岳文章蔵書図書原簿』は書籍購入、受入の「帳簿」であり蔵書を区分ごとに編集したものではない。寿岳の『図書原簿』は、「蔵書目録」にはない時系列の記録性をもつ点において、蔵書構築の過程を知るためには重要な情報源となる。時系列であればこそ、入手した書籍の前後関係、この本から次の本へ、そのまた次の本へとつながる読書の足跡が見えてくる。また、書籍の版元や入手先の書店ごとに並べてみることによって、出版文化における気付きもあろう。あるいは、寿岳の『図書原簿』を解体して分野別の「蔵書目録」として再編集したならば、寿岳の蔵書はどのような特徴を現わすだろうか。

生きた保存をめざして

『寿岳文章蔵書図書原簿』を住宅とともに生かして保存していくためには、調査研究にも工夫が必要であろう。『図書原簿』を単独の情報として扱うのではなく、現存する『寿岳文章日記』、読書日記『獺祭記』、国内外の縁者たちと交わされた書簡類、新聞・雑誌記事のスクラップ等との、有機的な調査がもとめられる。⁵⁹

たとえば、『獺祭記』は 1943 年から 1968 年にかけて寿岳が読んだ 401 冊の読書日記であるが⁶⁰、これを『寿岳文章蔵書図書原簿』と照合していくとする。寿岳が書き付けた読書日記の日付とその書籍の入手日付をくらべてみると、「川瀬」からまとめて購入することが常であった、かつての新刊の岩波文庫もみうけられる。歳月をかけて集め続けた蔵書を、読書の

⁵⁸ 土居光知「私の蔵書整理法」『英語青年』103 巻 4 号（研究社、1957 年 4 月）、p. 179.

⁵⁹ 高木博志「1940 年代の寿岳文章 日本主義と民主主義」『近代京都と文化 —「伝統」の再構築』（高木博志編、思文閣、2023 年）において、『獺祭記』と『寿岳文章日記』、書簡との分析考証がおこなわれている。また、中島俊郎「寿岳文章と読書」（再掲書）において、『獺祭記』、寿岳文章蔵書の大部分を収める甲南女子大学図書館「寿岳文章文庫」について論じられている。

⁶⁰ 「寿岳文章の読書記録『獺祭記』」『向日庵 6』（NPO 向日庵、2023 年）p. 69.

ための「ライブラリー」としていまある日常のなかに置きなおす、読書人としての寿岳のすがたが見えてくる。これに関連して寿岳は、『獺祭記』を記し始める前年に刊行したエッセイ集、『紙障子』（1942）のなかで「すべてが非常事態の下に置かれている現在では、読書もなまやさしい覚悟では勇猛に遂行されない。非常時を常時に反転して、寸刻をも読書に充てる工夫がなくては、満足に本も読めないだろう」と吐露している。そして、ある出版書肆に招かれて同席した会合の席上で、「現代人の書斎は車内に移動した」という意味の発言に触発された寿岳は、「最近、せめて自分の蔵書だけでも通読したいとの念願を起こし」、「眼に悪いとは十分に知っていながら、電車の中で猛烈に本を読む」のだった⁶¹。つまり、寿岳は自身が構築した蔵書を、通読するための読書対象としてあらためて捉えなおし、その読書体験を読書日記『獺祭記』において言語化していったといえる。

「読書人にとって、その人の蔵書目録は、内部の世界をうかがう一つの指標となろう」という寿岳の言葉は、『寿岳文章蔵書図書原簿』にもあてはまる。蔵書の記録を、情報の集積として捉えるのではなく、人の根底に息づく読書の記録としてとらえたとき、記録のなかにあらたな実像を見ることができるのである。

[引用にあたっては読みやすさを考慮して、現代仮名遣い、常用漢字に表記を改めた箇所がある]



旧寿岳家住宅向日庵書庫（2019年11月撮影）
図録『寿岳文章人と仕事展』
（同展実行委員会、2021）より

⁶¹ 寿岳文章「読書弁道」『紙障子』（靖文社、1942年）、pp. 158-159.

評伝作家としての寿岳文章 ——『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』の場合¹

佐藤 光（東京大学大学院総合文化研究科教授）

『寿岳文章・しづ著作集3 よき人を語る』（春秋社、1970）には『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』（弘文堂、1949）が再録された。この著作については、弘文堂のアテネ文庫シリーズの意義も含めて、『向日庵』第6号の川端康雄「壽岳文章のウィリアム・コベット小伝」で詳細に論じられている²。寿岳は、英国に「変わり者」と位置づけられる人物の系譜があることから説き起こし、コベットの生涯に共感を寄せながら、その私生活の細部を叙述する。コベット夫妻に関する記述には、寿岳夫妻のあり方と重なることが多い。コベットとウィリアム・モリスは「田園への愛着、産業化と近代都市への嫌悪」を共有しており、その観点からおそらく寿岳は二人に関心を寄せた。戦後まもなくの時期に、アテネ文庫という小冊子の形で同書を刊行することで、「壽岳は今後社会が進むべき道、指針を示し、またそこに含まれる希望を共有しようと図った」³。

本論では、以上を踏まえた上で、日本におけるコベット紹介史の中に、寿岳の小伝を位置付ける。その手掛かりとして、『この英国人』における引用箇所の出典を調査した。すべての出典を突き止めたわけではないが、判明した分を資料として末尾に置く。

1 苦学生コベットから社会思想家コベットへ

日本で最初のコベットの紹介事例を確定することは難しいが、少なくともサミュエル・スマイルズ（Samuel Smiles, 1812-1904）の『西国立志編 原名自助論 第九冊』中村正直訳（1870）までさかのぼることができる。同書「第十一編 自ラ修ノ事ヲ論ズ并ニ難易ヲ論ズ」に「三十六 維廉格白的ノ事」と題する節があり、「維廉」には「ウイルレム」、「格白的」には「コベット」とルビが振られている。コベットは、海軍の兵士として勤務しながら、インクや紙を買うために食費を切り詰めて、英文法を勉強した苦学生として描かれる。ハンモックを書斎とし、衣糧袋を本棚とし、膝の上に板を置いて机とし、兵士仲間の喧騒の中で本を読んだ。その様子は「貧苦ノ中ニ学問ヲ勉ムル書生ノ為メニ極好ノ勤勉ト為スニ足レリ」⁴。「自助論原序」には次のような言葉がある。

¹ 本研究は日本学術振興会科学研究費 23K00353 の助成を受けた。

² 川端康雄「壽岳文章のウィリアム・コベット小伝」、『向日庵』第6号（2023）、10-16頁。

³ 川端「壽岳文章のウィリアム・コベット小伝」、15-16頁。

⁴ 斯邁爾斯[スマイルズ]『西国立志編 原名自助論 第九冊』中村正直訳（須原屋茂兵衛、1870）、頁数記載なし。Samuel Smiles, *Self-Help: With Illustrations of Conduct and Perseverance* (1859; repr. London: John Murray, 1905), p. 408.

コノ書ヲ作ル主意ハ、約シテコレヲ言ヘハ、昔ヨリ言伝フル善教ヲ、少年ノ人ニ申戒セント企タルモノナリ、曰ク、少年ノ時、労苦セバ、暮年ハ安楽ヲ享ベシ、曰ク、天下ノ事、勤勉学習セスシテ能ク成就スルモノハ、決シテコレナシ、曰ク、学者為シ難キノ事ニ逢フト雖モ、ソノ志ヲ折ベカラズ、忍耐恒久ノ心ヲ以テコレニ勝ベシ、就中最要ノ教ニ曰ク、人タルモノハ、ソノ品行ヲ高尚ニスベシ、然ザレバ才能アリト雖モ、觀ルニ足ラズ、世間ノ利運ヲ得ルトモ貴ブニ足ルコトナシ⁵

苦学生コベットの逸話は、勤勉と自立と克己を教えるための教訓譚として『自助論』に組み込まれた。「『セルフ・ヘルプ』は、ひとこと言えば、立身出世賛美の書」⁶であり、少年の間に勉学に励まなければ、大望を達成することはできない、という「善教」は、明治の立身出世主義思想と合致した。

この後、コベットという名前は、少年向けの出版物に出現することになる。永松乙一『小学少年教育美談』（1891）は「「コベット」の貧窮中に文法を学びし事」を紹介した⁷。少年教育雑誌として山口県で創刊された『智識の園』第1号（1891年2月）にも「ウイルレムコベットの勉学」という記事がある⁸。中村徳助『東西名士の修養』（1910）は、伊藤博文、高杉晋作、坂本竜馬など明治の元勲や志士たちの言行録を前半で、シェイクスピア、ディズレーリ、カーライルなどの欧米の偉人伝を後半で紹介し、「ウイルレム、コベット」と題した箇所に『自助論』のコベット譚と同じ内容の逸話を収録している⁹。

渋谷春畦『偉人の青年時代』（1921）では趣きが異なる。それまで苦学生の逸話のみがコベットの人生から切り出されていたのに対し、同書はコベットを政治家と位置付け、10頁という短い紙数ではあるが、誕生から、軍隊勤務、結婚、将校の不正の告発、アメリカへの移住、帰国、議員就任、死去までの略伝を記した¹⁰。コベットを「勤王党であり保守党の人物」として描いており、正確さに欠けるところがあるが、「コベットの生涯は才智と正義と奮闘の絵巻物であった」、「コベットの伎倆に比して、余りにも成功が遅かった」、「彼の自愛を傷けた人物を赦さなかつた事は、コベットの人格中の一大欠点であつた」¹¹などの表現が見られ、評伝の性質を帯びている。目次にはジョン・ウェズリー、シェイクスピア、モリエール、モーツァルト、ミケランジェロ、ベンジャミン・フランクリンなどが並んでおり、欧米の宗教家、芸術家、政治家、科学者などの偉人列伝を目指したようだ。

⁵ 斯邁爾斯『西国立志編 原名自助論 第九冊』、頁数記載なし。Smiles, *Self-Help*, p. vii-viii.

⁶ 松村昌家「一章 セルフ・ヘルプの系譜」、松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次編『英国文化の世紀4 民衆の文化誌』（研究社、1996）、15頁。

⁷ 永松乙一『小学少年教育美談』（図書出版社、1891）、98-99頁。

⁸ 『智識の園』第1号（1891年2月）、6頁。

⁹ 中村徳助『東西名士の修養』（菊地屋書店、1910）、386-389頁。

¹⁰ 渋谷春畦『偉人の青年時代』（聚英閣、1921）、118-128頁。

¹¹ 渋谷『偉人の青年時代』、126、118、119、128頁。

根岸卯太郎『拾果』（1926）もコベットの略伝を収録する¹²。根岸卯太郎は日本聖公会の牧師であり¹³、「自序」によると同書は「各所の会合に臨みて為せる講演の要旨を骨幹として更にそれを補綴増修したもの」¹⁴である。根岸はコベットを「勇敢なる貧民の友」、「正義の精神著しく高く、加ふるに盤石の如き意志を持つた人」と位置付け、少年時代のコベットがジョナサン・スウィフトの『桶物語』に夢中になったことを紹介する。結婚後アメリカへ渡るものの「祖国を愛する一念から頗る率直な議論をやつた」ために帰国を余儀なくされ、帰国後は「苦しんで居る細民農夫の生活を見て」社会運動を展開したところ、「預言者は古郷に貴まれず」再びアメリカへ渡り、アメリカから「母国の人々に自由平等正義を伝道した」。その後、人身保護法の復活とともに帰国し、社会改良に尽力して、下院議員となった。根岸はコベットについて「英国社会思想史に興味をもつ人にとつては、彼の存在は常に暁の明星の如く輝かしい」¹⁵とまとめた。

英文学者大和資雄の随筆集『かたばみと環境』（1936）にもコベットの小伝が含まれる。「気骨稜々の政論家ウキリアム・コベット」という見出しは、「論争家コベット」（Cobbett, the Contentious Man）というヘンリー・ブルワーのコベット伝の表題に近い¹⁶。大和はスウィフトからの影響と苦学生の逸話に触れ、フランスの政治家タレイランがコベットを懐柔しようとしてはねつけられたこと、同じように英国の首相ピットがコベットを味方に抱き込もうとして拒絶されたことを紹介した。「私は魚でないから釣らうたつて駄目だ！」とコベットがタレイランを追い返した話と、「飼犬になるよりは、すき腹をかれへてやせても、狼の自由を選びたい」とコベットがピットに答えたという話は、G. D. H. コールのコベット伝を踏まえているのかもしれない¹⁷。また、結び近くに「この村では宿屋にすらパンも肉もなかった」で始まり「土地は食物に蔽はれてゐるのに働手は食べるものがない。凡ゆる物資は悉く多くの税金食ひどもに奪はれてゐるのだ」で終わるコベットからの引用が置かれているが、これは『田園騎乗』（*Rural Rides*, 1822）からの抄訳と思われる¹⁸。この引用に

¹² 根岸卯太郎「ウキリアム、コベットに就て」、『拾果』（亀戸聖公会伝導部、1926）、233-249頁。

¹³ 日本基督教会同盟編『教会便覧』（日本基督教会同盟、1914）、197頁。

¹⁴ 根岸『拾果』、頁数記載なし。

¹⁵ 根岸『拾果』、233、240、246、247、248、249頁。

¹⁶ 大和資雄「気骨稜々の政論家ウキリアム・コベット」、『かたばみと環境 随筆』（啓文社、1936）、311頁。Henry Lytton Bulwer, 'Cobbett, the Contentious Man', in *Historical Characters: Talleyrand, Mackintosh, Cobbett, Canning* (1868; repr. London: Richard Henry, 1870), p. 307.

¹⁷ 大和『かたばみと環境』、315頁。G. D. H. Cole, *The Life of William Cobbett*, new edn (London: W. Collins, 1927): 'I gave him to understand that I was no trout, and consequently was not to be caught by tickling' (p. 63); 'My answer to Mr. Hammond was conveyed in reminding him of the fable of the *wolf* and the *mastiff*' (p. 72).

¹⁸ 大和『かたばみと環境』、321-322頁。William Cobbett, *Rural Rides*, 2 vols (1912; repr. London: J. M. Dent, 1966-67), II, pp. 256-258 ('At a house called an inn, a little further on, the landlord had no meat except a little bit of chine of bacon; [...] How long will these people

続けて、大和は「この文章はマルクスの資本論の出る四十年も前に書かれてゐるのであります」と述べ、「独立独歩して終生休みなしに正しきことの為に闘つたコベット」を「犀よりも、もつと強いです」と賞賛した¹⁹。コベットを犀になぞらえるのは、トマス・カーライルの評言に基づく²⁰。末尾には「昭和九年八月二十七日、AK 第二放送講演」とあり、NHK ラジオ番組でコベットを社会改革の闘士として紹介したらしい。ちなみに大和資雄はこの8年後に、時世の流れに乗じるかのように、『英文学の話』（健文社、1942）の「序」に「屠れ米英われ等の敵だ！／分捕れ沙翁もわがものだ！」と書く²¹。

2 評伝作家としての寿岳文章

これらのコベット紹介史の中で、寿岳の『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』は、その質量ともに際立っている。総頁数 62 の小冊子であるにもかかわらず、本論末尾の引用箇所出典一覧に明らかなように、寿岳はコベットの様々な著作に加えて、評伝、英文学史、英国国会議事録、歴史書、英国文化論など幅広く資料を活用した。冒頭に『ハムレット』から墓掘りの場面を引用して「イギリスには変人が多い」という話題で始めながら、クリストファー・ドーソン、フリードリヒ・エンゲルス、D.H. ロレンスの言葉をもとに、平和で楽しい英国の田園生活という概念を出し、ジョン・ニューマンとウィリアム・ハズリットによる紳士の定義を示す。寿岳によると、コベットは「生来の紳士」である。ここで寿岳がコベットのために、変人紳士とでも言うべき枠を用意したことに注意したい。苦学生の逸話の後、アンとの結婚、「将校数名に対する官金費消の告訴」とアメリカへの逃亡、タレイランとのやりとり、帰国して「イギリス兵の上官反抗事件を筆誅した」²²ことから投獄され、出獄後に政府の人身保護法停止を受けてアメリカへ再逃亡する様子が続く。再帰国に際して騒動が起きた。寿岳は顛末を以下のように記述する。

ところがコベットは、人骨を納めた棺を携行してゐるため、上陸早々、リヴァプールの税関吏との間に大捫著「ママ」をひきおこした。

starve in the midst of plenty? [...] the tax-eaters want it all; [...]).

¹⁹ 大和『かたばみと環境』、322 頁。

²⁰ ‘Cobbett also, as the pattern John Bull of his century, strong as the rhinoceros’ (Thomas Carlyle, ‘Sir Walter Scott’, in *The Works of Thomas Carlyle*, 30 vols, New York: Charles Scribner’s Sons, 1901, XXIX, p. 39).

²¹ 宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』（研究社出版、1999）、39 頁。『英文学研究』22 巻 1 号（1942 年 8 月）に掲載された書評で、織田正信は「「序」と「凡例」の訂正を切望したい。殊に「分捕れ沙翁もわがものだ！」の一句は是非削除していただきたい。シェイクスピアの真価は、真に英国的であると共に世界的である点にある位のことは、文化概念の第一課であらう」と述べた。「この書評には、時の勢いという強風にあおられながらもそれに抗してすっと立っているような趣がある。同じ英文学研究の後進の私としては、このような書評を過去の歴史にもっていることは幸せである」（宮崎 88 頁）。

²² 寿岳『この英国人』、3、10、23-24、38 頁。『著作集 3』、32、38、49、61 頁。

その棺は、「理性の時代」や「人権論」を書いた理神論者トマス・ペインの骨を納めてゐた。[中略] しかしながら、その思想や人々が崇つて教会での埋葬が拒まれ、ロング・アイランドの一隅の、わが住む農園から程遠くない無縁墓に十年も捨てられたままであると知つては、一片耿々の心、転た同情を禁じ得ない。さればこそ故国に手あつく改葬しようと墓を発き、骨を掘り出してきたのであるが、アメリカでさへ厚遇されぬペインが、ましてやイギリスに暖く迎へられようはずはない。果せるかな、イギリス人はコベットの計画を真面目にとりあげようとはせず、結局ペインの遺骨は、コベットの存生中、その家に置かれたまま、彼の死と共に行方知れずになつてしまつた。²³

ペインの遺骨をめぐる逸話は、英語圏のコベット伝では早くからとり上げられたが²⁴、大和、根岸、渋谷のコベット略伝には含まれない。一連の少年向け教訓譚でも触れられない。「伝記において忌諱されそうな事実のなかには、主人公の性格や気質といったようなものが、もっとも強く反映されているのが普通である」²⁵とするならば、「墓を発き、骨を掘り出してきた」逸話に、寿岳はコベットの人柄が凝縮されている、と見たのだろう。寿岳は「狂気の沙汰とも思はれるこのやうな行動」を「誠実さのためである」と説明した²⁶。変人紳士コベットの面目躍如である。冒頭の『ハムレット』第五幕第一場の墓掘りの場面は、コベットによるペインの遺骨発掘へ通じる伏線の役割を果たしている。

寿岳はコベットの「イギリス風でまた愛国的なデモクラシイの匂ひをたたへた重農共和主義」に共感を示し、「裏も表もないありのままの人、素地まる出しの人」としてコベットを描いた²⁷。コベット伝を『著作集3』に再録するにあたり、寿岳は「気持が純粹で、清潔で、正直で、一途で、世俗的な体制や権威には強く抵抗し、自分の信念をあくまでも貫き通した人たち」²⁸に心を惹かれる、と「あとがき」に記した。鶴見俊輔によると、伝記を書くという営みは「受動的自己表現」であり、「自分の似たところを相手の中に見て、それをより強烈にして描く」²⁹。寿岳のコベット伝は、寿岳の自己表現でもあった。

²³ 寿岳『この英国人』、44-45頁。『著作集3』、66-67頁。

²⁴ Robert Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett, Esq. M. P. for Oldham*, 2 vols (London: John Saunders, 1836), II, pp. 265-281. Edward Smith, *William Cobbett: A Biography*, 2 vols (London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, 1878), II, pp. 212-218. E. I. Carlyle, *William Cobbett: A Study of His Life as Shown in His Writings* (London: Archibald Constable, 1904), pp. 209-212. G. K. Chesterton, *William Cobbett* (London: Hodder and Stoughton, 1925), pp. 105-139. Cole, *The Life of William Cobbett*, pp. 235-236.

²⁵ 矢作勝美『伝記と自伝の方法』（出版ニュース、1971）、84頁。

²⁶ 寿岳『この英国人』、45頁。『著作集3』、67頁。

²⁷ 寿岳『この英国人』、34、59頁。『著作集3』、57、78頁。

²⁸ 寿岳『著作集3』、402頁。

²⁹ 鶴見俊輔『期待と回想』全2巻（晶文社、1997）下巻、7頁。

大江健三郎は「評伝はその描き出す人物の生涯をとらえながら、かれの生きた現実の日々での流儀、端的にはかれの発した言葉」を伝える、と述べ、「評伝的な人の見方」に意味を見い出した³⁰。言葉と行動とが、一人の人の中で、どのように統合されているか、という大江の関心の持ち方には、「思想はまず、信念と態度との複合として理解される」³¹という鶴見の定義に似たところがある。ウィリアム・ブレイクへの傾倒、日常生活と評伝の重視、例外を愛する精神は、柳宗悦、寿岳文章、鶴見俊輔、大江健三郎に一貫して流れる伏流水である。

本研究は、評伝をめぐる大江の言葉を出発点として、ブレイク愛好家の中で評伝愛とブレイク愛とがどのように共存しているのか、という問いから始まった。『この英国人』引用箇所出典一覧は予想外の副産物であり、寿岳の領域を超えた読書の深さと広さがうかがえる。

資料

寿岳文章『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』（弘文堂、1949）引用箇所出典一覧

「あとがき」には「一九二五年に出た G. K. Chesterton」、「一九二八年に出た G. D. H. Cole」、「John Moore の *Country Men* (1935)」に言及があり、「市河三喜博士は、所蔵コベット英文典を筆者に贈られたのみならず、東京大学に寄贈された博士の旧蔵書中、コベットに関するものをわざわざ借り出して筆者の繙読に便せられた」（61 頁）とある。なお、ここに掲載するのは出典であり、寿岳が参照した現物ではない。出典が複数存在する場合は Cole を優先した。

○ハムレット なるほど。だがなぜイギリスへやられたのだ？ [中略] 何しろあそこでは皆が同じくらゐ気狂ひと来てゐる。（『この英国人』2 頁、『著作集 3』32 頁）→ *Ham. Ay, marry, why was he sent into England? [...] there the men are as mad as he.* (William Shakespeare, *Hamlet; Prince of Denmark*, With Introduction and Notes by Sanki Ichikawa, Tokyo: Kenkyusha, 1922, Act V, Scene i, p. 132)

○クリストファ・ドースンの言葉に従へば、「古い田舎のイギリス」である。[中略] ドースンの所謂「新しい金融的・産業的国家」（『この英国人』5-6 頁、『著作集 3』34-35 頁）→ [...] the old rural England passed into the background, and a new financial industrial state took its place. (Christopher Dawson, *Enquiries into Religion and Culture*, New York: Sheed & Ward, 1933), p. 39

○フリードリッヒ・エンゲルスが自著「イギリス労働階級事情」の緒論で、[中略] その「楽しいイギリス」（Merry England）が（『この英国人』5 頁、『著作集 3』35 頁）→ [...] the name Merry Old England conveys no meaning [...] (Frederick Engels, *The Condition of the*

³⁰ 大江健三郎「新しく批評を書き始める人に」、『朝日新聞』朝刊 2008 年 12 月 16 日、『定義集』（朝日新聞出版、2016）、144 頁。

³¹ 鶴見俊輔「転向研究」、『鶴見俊輔集』（筑摩書房、1991-92）4 巻、11 頁。

Working Class in England in 1844, trans. by Florence Kelly Wischniewetzky, New York: John W. Lovell, 1887, p. 16)

○「悪魔的なくぐろい工場」の立ちならぶイギリスを、再び「こちよき緑の国土」とし、そこにイエルサレムを建ててしまふまでは、「心の戦ひ」をやめないと宣言したウィリヤム・ブレイク

(『この英国人』7-8 頁、『著作集 3』36 頁) → ‘these dark Satanic Mills’, ‘England’s pleasant pastures’, ‘I will not cease from mental fight’ (William Blake, *Milton*, in *The Poetical Works of William Blake*, ed. by John Sampson, London: Oxford University Press, 1913, p. 370)

○『古いものの持つかくも多くの美しさやかなしさは過ぎ去り、新しいものはまだ少しも現れない。この家——これこそ——イギリスだ！[中略] そこではあらゆるまぼろしが失はれ、あらゆる記憶が亡びてしまふ。』(『この英国人』8 頁、『著作集 3』36-37 頁) → So much beauty and pathos of old things passing away and no new things coming; this house—it is England [...] where all vision is lost and all memory dies out. (D. H. Lawrence, ‘To Lady Cynthia Asquith (1915)’, in *The Letters of D. H. Lawrence*, ed. by Aldous Huxley, New York: The Viking Press, 1932, p. 275)

○ニューマンの、『まことの紳士は、自分の周囲にゐる人人の心に激しい衝撃を与へるおそれのあるものをば、周到に避ける。』との定義(『この英国人』9 頁、『著作集 3』37 頁) → The true gentleman in like manner carefully avoids whatever may cause a jar or a jolt in the minds of those with whom he is cast; [...] (John Henry Newman, *The Idea of a University Defined and Illustrated*, London: Longmans Green, 1898, p. 209)

○しかしウィリヤム・ハズリットが、生来の紳士であつたフォックスをほめたたへる場合に用ゐてゐる言葉、『彼はどんな種類の嫉妬にも、うたぐりにも、[中略] 真理を、正義を、剛直を、また寛大もしくは鷹揚なすべてのものを愛する心を、彼は生れながらに具へてゐた。』(『この英国人』9 頁、『著作集 3』38 頁) → He was superior to every kind of jealousy, of suspicion, [...] He had an innate love of truth, of justice, of probity, of whatever was generous or liberal. (William Hazlitt, ‘Character of Mr. Fox’, in *Political Essays, with Sketches of Public Characters*, London: William Hone, 1819, p. 387)

○サセックス州のウェアス・ロッヂのブレイジア夫人の徳をたたへたコベットの一文に言ふ。『この婦人は読みも書きもできなかつたが、パンの作り方、[中略] 蝋燭の代りに使ふ燈心の製法等に至つては、もののみごとに心得てゐた。』(『この英国人』11-12 頁、『著作集 3』39 頁) → It was written at Worth Lodge, a farmhouse in Sussex, [...] his obligations to Mrs. Brazier, [...] though she could *neither write nor read*, understood well the making of bread, [...] the making of rushes to serve instead of candles; [...] (E. I. Carlyle, *William Cobbett: A Study of His Life as Shown in His Writings*, London: Archibald Constable, 1904, p. 237) (*The Autobiography of William Cobbett*, ed. by William Reitzel, 1933; repr. London: Faber and Faber, 1947, pp. 187-188) (注) *Autobiography* には North Lodge という誤植がある。

○現にウィリヤムも、次の想ひ出を記してゐる。『ウェイ・ヒルで開かれるホップの大市へ、父は毎年私たち子供の誰か一人をつれてゆく習ひであつた。[中略] 私がワシントンの名を耳にしたのは、どうやらこれが初めてであつたやうな気がする。』（『この英国人』12 頁、『著作集 3』40 頁）→ “My father used to take one of us with him every year, to the great hop-fair at Wey-Hill. [...] Here Washington’s health, and success to the Americans, were repeatedly toasted, and this was the first time, as far as I can recollect, that I ever heard the General mentioned. (G. D. H. Cole, *The Life of William Cobbett*, new edn, London: W. Collins, 1927, p. 19) (Robert Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett, Esq. M. P. for Oldham*, 2 vols, London: John Saunders, 1836, I, p. 8) (Edward Smith, *William Cobbett: A Biography*, 2 vols, London: Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, 1878, I, p. 16) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 9)

○『舷門にぶらさげられたり、「縄絢嬢号」との結婚を考へたりするよりは、首に縄をかけてもらつて、教会へ引かれて行く方がずっとよかろう。』（『この英国人』15 頁、『著作集 3』42 頁）→ [...] it was better to be led to the church in a halter than to be tied to the gangway, or as the sailors call it, married to *Miss Roper*. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 21) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 10) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 11) (*Autobiography*, p. 20) (注) Huish と *Autobiography* では halter と than の間に to be tied to a girl that I did not like がある。

○後年彼自身で述懐してゐる通り、「百姓となりきるには悪ずれして」あるので（『この英国人』15 頁、『著作集 3』42 頁）→ “I returned once more to the plough,” Cobbett comments on this adventure, “but I was spoiled for a farmer. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 21) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 11) (Smith, *William Cobbett*, I, p. 24) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 11) (*Autobiography*, p. 21)

○自叙伝では、『私の生涯のどの部分を取つてみても、全く楽しみの欠けてゐる場合を見ないが、ただグレイ法学堂内の九ヶ月だけは例外だ。』と述べてゐる。（『この英国人』16 頁、『著作集 3』43 頁）→ “No part of my life has been totally unattended with pleasure, except the eight or nine months I passed in Gray’s Inn. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 23) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 17) (Smith, *William Cobbett*, I, p. 26) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 14) (*Autobiography*, pp. 23-24)

○『私の釣床の端、または哨兵ベッドの端が私の書斎であり、背囊が私の本棚であり、膝にのせた一枚の板ぎれが物書く机であつた。』とは、彼自身の述懐であるが（『この英国人』17 頁、『著作集 3』44 頁）→ The edge of my berth, or that of the guard-bed was my seat to study in; my knapsack was my bookcase; a bit of board lying on my lap was my writing table; [...] (Cole, *The Life of William Cobbett*, pp. 29-30) (William Cobbett, *Advice to Young Men and to Young Women in the Middle and Higher Ranks of Life*, London: Anne Cobbett, 1842, p. 34) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 34) (Henry Lytton Bulwer, *Historical Characters: Talleyrand, Mackintosh, Cobbett, Canning*, new edn, London: Richard

Henry, 1870, p. 310) (Smith, *William Cobbett*, I, p. 39) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 18) (*Autobiography*, p. 26)

○『一本のペン、または一枚の紙を買ふために、なかば飢餓の状態であつたにも拘らず、私は食べたいものを思ひきらねばならなかつた。[中略] 私はなさけない敷布と毛布に顔をうづめ、頑是ない子供のやうに泣き叫んだ。』(『この英国人』17-18 頁、『著作集 3』44-45 頁) → To buy a pen or a sheet of paper I was compelled to forego some portion of food, though in a state of half starvation! [...] I buried my head under the miserable sheet and rug, and cried like a child.” (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 30) (Cobbett, *Advice to Young Men and to Young Women*, pp. 34-35) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 35) (Smith, *William Cobbett*, I, p. 39-40) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 18) (*Autobiography*, pp. 26-27)

○『それゆゑこの事件は、あたかも運命の書の中に書きこまれたかのやうに、確定的に即決した。』

(『この英国人』19 頁、『著作集 3』45-46 頁) → So that this matter was, at once settled as firmly as if written in the book of fate. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 38) (Cobbett, *Advice to Young Men and to Young Women*, p. 84) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 80) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 36) (*Autobiography*, p. 37)

○『凡そ物事の順序たるや、殆ど百般の場合に於いて、思考の順序に他ならぬであらう。[中略] はるかに容易に、且つ一層多くの効果を以て、他の思想へと熟してゆきやすいからである。』(『この英国人』19-20 頁、『著作集 3』46 頁) → The order of the matter will be, in almost all cases, that of your thoughts. [...] for, that which [that] has come of itself into your mind is likely to pass into that of another more readily and with more effect than anything which [that] you can, by reflection, invent. (William Cobbett, *The English Grammar of William Cobbett*, rev. by Alfred Ayres, New York: D. Appleton, 1884, p. 197) (注) 初版は William Cobbett, *Grammar of the English Language, in a Series of Letters* (New York: William Cobbett, 1818)であるが、後述の『この英国人』43 頁、『著作集 3』65 頁での引用との関連から Alfred Ayres 編集の版を示す。

○『そのときの私の思ひがどんなであつたかを、読者に告げる必要があらうか？ [中略] 彼女の行為への讃嘆、私の判断が正しかつたことを示すこの疑ひのない証拠を見ての独り悦び、それは彼女の美しい人がらを愛せずにはをれぬ私の気持を、愈々切実なものとした。』

(『この英国人』21 頁、『著作集 3』47 頁) → “Need I tell the reader what my feelings were? [...] Admiration of her conduct, and self-congratulation on this indubitable proof of the soundness of my own judgment, were now added to my love of her beautiful person. (Cobbett, *Advice to Young Men and to Young Women*, p. 85) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, p. 81)

○英文学史家オリヴァ・エルトンの言葉に従へば、「恐らくは頂点に立つコベットの英語を示すもの」である。／愛がやつて来て、私をこの恐ろしい奴隷状態から救つた。[中略] そ

の謝恩の念は、私に対して寄せられるのと全く同量に、アンに対してもまた寄せられねばならない、と。（『この英国人』21-22 頁、『著作集 3』47-48 頁）→ [...] may be quoted for its own sake, and also as showing, perhaps, Cobbett's English at its acme: / Love came and rescued me from this horrible slavery; [...] that gratitude is due to her full as much as to me. (Oliver Elton, *A Survey of English Literature 1780-1830*, 2 vols, London: Edward Arnold, 1912, I, pp. 294-295) → (*Autobiography*, p. 230)

○ミットファドはいたく賞讃してかう述べてゐる。『何もかもすばらしかつた、[中略] 彼女は素朴さと、そのやさしさと、また夫や子供たちに対するその愛情の深さに於いて、[中略] まことにうるはしい母性型の婦人であつた。』（『この英国人』23 頁、『著作集 3』49 頁）→ Everything was excellent, [...] She was a sweet, motherly woman, [...] in her simplicity, her kindness, and her devotion to her husband and her children. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 98) (Smith, *William Cobbett*, II, p. 22) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 120)

○『もしひよんなことから私が百姓をやめるやうにならなかつたら、多くの悪者どもが昼は枕を高くして安眠し、夜はわが者顔にふんぞり反つて歩き廻つたことであらう。』（『この英国人』24 頁、『著作集 3』49 頁）→ If accident had not taken me from the plough, many a villain would have slept at peace by day and swaggered about at night. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 338)

○あらゆる種類の瀬戸物がぎつしり置き並べてゐる陶器店に、不平家で、形の醜い壺が、不幸にも権勢を擅にしてみた。[中略] やがて何もかも元の姿を改めたが、石ものとはならず、がらくたに變つてみた。（『この英国人』26-28 頁、『著作集 3』51-53 頁）→ “In a pot-shop, well stocked with wares of all sorts, a discontented, ill-formed pitcher unluckily bore the sway. [...] that the whole was soon chanted not into china—but into rubbish.” (Bulwer, *Historical Characters*, pp. 314-315) (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, I, pp. 117-119)

○コベットの自叙伝の中から、その箇所を抄訳してみよう。／タレイランがフィラデルフィアに到着して数ヶ月経つた頃、彼は友人の一人を介し、その友人の宅で私に会ひたいと申し入れてきた。[中略] 別れる前に、私と云ふ人間は到底金で買収できぬことを、私は彼にはつきり悟らせてやつた。（『この英国人』30-31 頁、『著作集 3』54-55 頁）→ Some months after his arrival, he left a message with a friend of his, requesting me to meet him at that friend's house. [...] and before I left him I gave him clearly to understand that I was not to be purchased. (*Autobiography*, pp. 71-73) (Smith, *William Cobbett*, I, p. 158-159) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 60) (注) Smith と Carlyle には「私と云ふ人間は到底金で買収できぬ」に相当する原文が欠落している。

○チェスタトンの言葉を借りて言へば、彼はイギリス風でまた愛国的なデモクラシイの匂ひをたたへた重農共和主義、とでも名づくべきものを（『この英国人』34 頁、『著作集 3』57 頁）→ [...] the spirit of Cobbett, of rural republicanism, of English and patriotic democracy,

[...] (G. K. Chesterton, *The Victorian Age in Literature*, London: Williams and Norgate, 1913, p. 18)

○『コベットが息ふきかへらせようと試みたのは、[中略]実際は中世のイギリスであつた。』と言ふチェスタトンの見方は全く正しい。(『この英国人』34-35 頁、『著作集 3』58 頁) → What Cobbett attempted to revive was [...] it was really medieval England. (G. K. Chesterton, 'Introduction', in William Cobbett, *Cottage Economy*, London: Peter Davies, 1926, p. viii)

○イギリスの一百姓として、いなむしろイギリス全農民の権化として首尾一貫した彼は、[中略]清教徒が熊いぢめに反対したのは、それが熊に苦痛を与へるからではなく、見物人に快楽を与へるからだ、と言つたのはマコーリィだが、蓋し至言である。(『この英国人』35-37 頁、『著作集 3』59-60 頁) → [...] he remained throughout an English peasant, one might almost say a personification of the whole English peasantry, [...] Macaulay said a very true thing when he said that the Puritans objected to bear-baiting, not because it gave pain to the bear, but because it gave pleasure to the spectators. (John Moore, *Country Men*, 1935; repr. New York: Book for Libraries Press, 1969, pp. 128-129)

○同じことをまたチェスタトンが、別の言葉で表現した。／人間を平等な掟のもとに置き、醜汚な都市の市民たらしめない、と言ふ理想に於いては、コベットは後代の自由党员と意見を同じうした。しかしリヴァプールやリーズが醜汚な都市であると強く主張することに於いては、彼は後代の自由党员と意見を異にした。(『この英国人』37 頁、『著作集 3』60 頁) → Cobbett was one with after Liberals in the ideal of Man under an equal law, a citizen of no mean city. He differed from after Liberals in strongly affirming that Liverpool and Leeds are mean cities. (Chesterton, *The Victorian Age in Literature*, p. 17)

○『何を見ても、昔の大まかなイギリス郷土の、この上もなく大まかな考へにしつくり調子が合つてゐた。』とミットファド女史は叙べてゐる。(『この英国人』37 頁、『著作集 3』60 頁) → [...] and everything was in accordance with the largest idea of a great English yeoman of the old time. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 98) (Smith, *William Cobbett*, II, p. 22) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 120) (*Autobiography*, p. 101)

○『馬鹿らしさにも程のあるやうなことをぬけぬけと言ふので、説教最中、馬の鞭で叩きのめしてやりたく、むずむずした。』と称する牧師ベイカァ (『この英国人』38 頁、『著作集 3』61 頁) → This brought him into contact with the Rev. Mr. Baker [...] until he "longed to horsewhip him in the pulpit for talking such nonsense. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 99)

○『法廷も余の精神に対しては、何の禁錮刑も下し得なかつた。』と嘯いて (『この英国人』38 頁、『著作集 3』61 頁) → 未確認

○『全教区の住民をあげて、こんなにも正直で、こんなにも正義を愛し、またこんなにも親切な国の民が、どうして立派でなしにあり得よう。[中略] 貧しい隣人たちの誰かのために、

強権を笠に著る連中の圧制に敢然と立ち向ふかぎり、その謝恩の感情の証拠を与へつづけるであらう。』

（『この英国人』40-41頁、『著作集3』63頁）→ That nation cannot be otherwise than good, where the inhabitants of a whole parish are so honest, so just, and so kind. [...] I shall, I hope, never fail to give proof, when it is in my power to defend any of my poorer neighbours against the oppressions of the more powerful. (Huish, *Memoirs of the Late William Cobbett*, II, pp. 160-161)

○『亡命の異郷にイギリス人として死ぬか、自由なイギリスにイギリス人として死ぬか、二つに一つだ。』とコベットはその著「イギリス的自由の軌近百年史」の中で言つてゐる。（『この英国人』42頁、『著作集3』64頁）→ I will die an Englishman in exile, or an Englishman in England free. (William Cobbett, *A History of the Last Hundred Days of English Freedom*, London: George Allen & Unwin, 1921, p. 14)（注）「百年史」は寿岳の誤記と思われる。

○英語文典など、発行された最初の一ヶ月で一萬部を売り尽し、ハズリットからは「小説のやうに面白い」との、またサア・ヘンリィ・ブルウァからは「世界唯一の面白い文法書」との絶讃を勝ち得てゐるが（『この英国人』43頁、『著作集3』65頁）→ The only amusing grammar in the world—Henry Lytton Bulwer / Interesting as a story-book—Hazlitt (Cobbett, *The English Grammar of William Cobbett*, title page) → [...] he wrote his grammar, the only amusing grammar in the world, [...] (Bulwer, *Historical Characters*, p. 337); His Grammar too is as entertaining as a story-book. (William Hazlitt, *Table-Talk; or, Original Essays*, London: John Warren, 1821, p. 122)

○『ボトリィ教区で生産される小麦や、牛乳や、鶏卵や、仔羊や、豚や、犢の十分の一を徒食するベイカア、ならびにその女房や子供拔きに、なにゆゑ諸君は神を敬ひ得ないのか！』

（『この英国人』44頁、『著作集3』65-66頁）→ Why cannot you reverence God, without Baker and his wife and children eating up a tenth part of the corn and milk and eggs and lambs and pigs and calves that are produced in Botley parish! (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 227)

○『今度こそ間違ひなく私を沈没させたと世間では思つてゐる。私ほど何度も沈没した人間はあるまい！ しかしこれは沈没ではないのだ！ 船乗りの言葉で言へば、ただ「浪をかぶった」だけのことなのだ。』（『この英国人』46頁、『著作集3』68頁）→ “They have now, they say, *sunk* me in good earnest! Never was a man so often sunk! This is no sinking! This is what the sailors call merely ‘*shipping a sea*,’ that is to say, taking a wave on board, [...] (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 244) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 223)

○『ラスキンは教会にどれだけの彫刻が施されてゐるかを考へたのにひきかへ、コベットはいつも、どれだけの数の人間がその座席につくことができるかを考へた。ぶつきら棒な批評家ならば、ラスキンは、教会の建てられた目的こそ知らなかつたが、教会の建物については知らぬところが無かつた、と言ふかも知れない』（『この英国人』48頁、『著作集3』69頁）→ While Ruskin considered how many carvings might be found in a church, Cobbett

always considered how many people could be seated in it. An unamiable critic might say that Ruskin knew everything about the building of a church except what it was built for. (Chesterton, 'Introduction', in *Cottage Economy*, p. ix)

○「ケイムブリッジ英文学史」の筆者が「農人のオデュッセイア」と呼んでゐる「田園騎乗」(『この英国人』48頁、『著作集3』69頁)→ What mars his farmer's Odyssey, *Rural Rides*, is, perhaps, the excess of this very disregard for fine writing. (*The Cambridge History of English Literature*, ed. by A. W. Ward and A. R. Waller, 15 vols, 1908-1927; repr. Cambridge: Cambridge University Press, 1961, XI, p. 51)

○『私はただ、この辺の人は、その道を下りる習ひかどうかと尋ねた。下りるとの答へを得たので、私は緑の小径や馬道を、屈託なしに進んで行つた。…』(『この英国人』50頁、『著作集3』70-71頁)→ I inquired simply, whether people were in the habit of going down it; and the answer being in the affirmative, on I went through green lanes and bridle-ways [...] (William Cobbett, *Rural Rides*, 2 vols, 1912; repr. London: J. M. Dent, 1966-67, I, pp. 137-138)

○「イギリスの姿」の編者ハーバート・リードも、風景の語り手として [中略] コベットを選んで(『この英国人』50頁、『著作集3』71頁)→ 2. The Valley of the Avon [from William Cobbett, *Rural Rides*] (*The English Vision: An Anthology*, ed. by Herbert Read, London: Eyre & Spottiswoode, 1933, pp. 26-30)

○『彼等の間に行きわたつてゐる大きな特徴は、愚の一語に尽きる。頭の空虚、才能の欠無。さうしてここで所謂教育を受けてゐる連中の一半は、八百屋や呉服屋の手代さへ満足にとまらぬ。』(『この英国人』50-51頁、『著作集3』71頁)→ However, malignant as some are, the great and prevalent characteristic is folly : emptiness of head; want of talent; and one half of the fellows who are what they call educated here, are unfit to be clerks in a grocer's or mercer's shop. (Cobbett, *Rural Rides*, I, pp. 34-35) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 239)

○「東インドの富をふんだくつてきた亡者ども、西インドで奴隷を鞭打つてしこたま金を儲けた連中、[中略] 数々の罪惡や不義の祟つてきた軀の病気を治さうと、蔭で笑ふ藪医者 of 指図に従ひ赴くところ」と定義した湯治場チェルトナム(『この英国人』51頁、『著作集3』71-72頁)→ Cheltenham, which is what they call a "watering place"; that is to say, a place to which East India plunderers, West India floggers, [...] at the suggestion of silently laughing quacks, in the hope of getting rid of the bodily consequences of their manifold sins and iniquities. (Cobbett, *Rural Rides*, II, p. 126)

○このやうな場所へはひる時には、私はいつでも指で鼻をつまみあげてみたい衝動を覚える。[中略] 彼がかう言つたのは、オクスファドを代表して議員となつてゐた時であつた！(『この英国人』51-52頁、『著作集3』72頁)→ When I enter a place like this, I always feel disposed to squeeze up my nose with my fingers. [...] Memorandum: he was a member for Oxford when he said this! (Cobbett, *Rural Rides*, II, pp. 126-127)

○私は尋ねたい、一体この博物館は何の役に立つか、誰の、どんな階級の人々の役に立つか？ [中略] この博物館問題の如きは、政府の顔に泥を塗った最も恥づべき討議の一つである。以上私としては言ひ得る凡てを言ひつくした。更に言葉を重ねる必要を認めない。（『この英国人』54-55 頁、『著作集 3』74-57 頁）→ He would ask of what use, in the wide world, was this British Museum, and to whom, to what class of person, it was useful? [...] He concluded, by declaring that this British Museum job was one of the most scandalous that disgraced the Government, and when he said that, he thought that he could not make it more disgraceful. (*Hansard's Parliamentary Debates*, 3rd ser., 17, 1833, col. 1003)

○『私は神学の博士ではない。[中略] 私はカトリック教徒として書いたのではなく、イギリス人として書いた。しかし真摯なカトリック教徒ならば、私に対して多少の恩を感じずに違ひない。』（『この英国人』58 頁、『著作集 3』77 頁）→ And the fact is, I am no doctor of divinity, [...] I have not written as a Catholic, but as an Englishman; yet a sincere Catholic must feel some little gratitude towards me; [...] (Cobbett, *Rural Rides*, II, p. 114)

○エルトンの表現を借りれば、「褐色の地より出でて土に属し」（『この英国人』59 頁、『著作集 3』78 頁）→ He is of the brown earth earthy (Elton, *A Survey of English Literature 1780-1830*, I, p. 295)

○『彼は、色白ではあるが日焼けした、背の高い、がつしりした体格で、[中略] 彼は、私が今までに会った人の中で、いちばん逞しい運動家型の人のやうな気がする。』これは、ボトリィ時代のコベットを描いたミットファド女子の筆であるが（『この英国人』60 頁、『著作集 3』79 頁）→ He was a tall, stout man, fair, and sunburnt, [...] He was, I think, the most athletic and vigorous person that I have ever known. (Cole, *The Life of William Cobbett*, p. 98) (Smith, *William Cobbett*, II, p. 22) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 120)

○『目立たぬ灰褐色の上衣を著、くすんだ茶色のズボンにゲートルをうがち、しやんとして高い恰幅、鋭い眼と、円い赤らんだ面ざしと、やや小造りな目鼻立ちと、一種独特の皮肉な口とを持つた、年配の、品格のある、赤ら顔の紳士。』としるしたサア・ヘンリィ・ブルウァの描写（『この英国人』60 頁、『著作集 3』79 頁）→ [...] the elderly, respectable-looking, red-faced gentleman, in a dust-coloured coat and drab breeches with gaiters, was a strange and almost historical curiosity. Tall and strongly built, but stooping, with sharp eyes, a round and ruddy countenance, smallish features, and a peculiarly cynical mouth, [...] (Bulwer, *Historical Characters*, p. 347) (Carlyle, *William Cobbett*, p. 281)

寿岳文章訳『セルボーン博物誌』

中島俊郎（甲南大学名誉教授）

寿岳文章が翻訳したギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』（岩波文庫）はまぎれもない名著である。英語圏では聖書、シェイクスピア、バニヤンの『天路歷程』につぐ古典的な位置を誇っている。1788 年末に初版が発行され、その後 200 版を超える版を重ね、博物誌、自然史に関する本としては世界中でもっとも愛され、広く知られている本となった。2 世紀以上にわたって支持され、今日でも環境論の観点からより重要性が増している。そこで、やはり再読して読者に現れてくるのは、ホワイトの文体そのものである。文章は無理なく持続していき、叙述が簡潔で、この上なく適切な措辞は揺るぎなく、味読すると緊張感をいっさい読者に強くない。作者はどんなに情熱的にかられようとも、決して前面に立ちまはだからず、独断的でない抑制のきいた文章が続いていき、そして意味を表現する完璧さへと限りなく近づいていく。博物学の熟達と科学の規律、つまり本書は偉大な博物学者にして文学者の統制が表現を制御した結果なのである。ホワイトの博物誌は普遍的なラテン語を駆使し科学的な分類法を用い、たえず実験と観察と演繹法によって研究が進められている。比類なき観察力が鋭敏な推理力を生み出し、博物誌にリズムが生まれ躍動感を与えた。味読後、読者は名状しがたい喜びにつつまれる。ホワイトが博物誌全体に充満させた、そこはかとなき華やぐ雰囲気は、18 世紀イングランドの田園の大地に根ざした安らぎであり、まごうことなき調和をかもしていた。セルボーン村はホワイトを引き寄せ成熟させ、他ではできない仕事を完成させるために博物学者ホワイトを方向づけたのである。

本稿では寿岳文章が『セルボーン博物誌』の翻訳において、博物誌を文学作品とみなし、訳者として工夫したこと、その特徴と意義を多面的に検討し検証してみたい。

I 翻訳の動機と方針

トルストイの翻訳を世に問い学者としての生涯を開始した寿岳には翻訳について思索、論究した随筆、論考が数編ほどある。それらの諸見解を通読、検討すれば、どちらかと言えば、寿岳は翻訳に対してかなり懐疑的であった。そこには翻訳にかかわってきた実践者としての苦悩があった。「私自身、今までに幾つかの文学作品の翻訳を試みてきたし、これからも試みるだろう。しかし年とともに、文学者の、文学作品の、翻訳者の、孤独感が深まってゆく。この孤独感は波状的にひろがる」と翻訳者として翻訳作業に対する疑念は消えない。いかに熟達した翻訳者であろうとも、原作と読者を直結させることはできないという、いわば諦観がある。寿岳によれば、翻訳者という存在はどのような意味でも仲介者にすぎない。

「原作を読んでいる者は、原作を通して本質的には自分自身を読んでいるのであり、翻訳の読者は翻訳を通して自分自身を投影させている。純粹を求められない」というように、翻訳者を介在する存在としてしか認められないのである。翻訳が原作を直接にありのままの姿、忠実な意味を映すものではない以上、「結局、翻訳は、…原作に忠順を誓いながら、自国語の慣用に乗かかった妥協の産物にほかなら」ないとまで極言し、「名訳とは妥協の言い換え

なのである¹⁾」と反語めいた表現で翻訳をとらえようとしている。

翻訳の準備と経過

『セルボーン博物誌』翻訳の発端と経過を寿岳自身が十全に語っている。「岩波文庫の企画者から、私が本書翻訳の依頼を受けたのは、もう一昔も前のことであつた。私としてできるだけ満足のいく仕事をしたく、資力のゆるす限り多くの版本を集め、下訳を作るつもりで、雑誌『動物文学』へ少しずつ連載しているうちに、戦雲ただならず、岩波書店の方でも、ついに計画を一時中止せねばならなくなった。しかし敗戦後再び最初の企画がよみがえり、なるべく早く出したいとの申し入れが岩波書店からあったので、私は今年の夏休みの全部を本書の譯業にささげ、なお残った部分を学校の仕事の暇々につづけ、十一月下旬、ともかく一応の完成を見た。一气呵成の、しかも博物学方面には全くの素人の私の仕事ゆえ、思わぬあやまちも多からうかと恐れる。とくに、英語ではよく特徴の出た面白い名がありながら、わが国に見出せぬ動植物名の和訳語には、識者の苦笑をかうものも少なくあるまい。好意ある是正を恵まれるならば、訳者の本懐、これに過ぐるはない。昭和二十二年十二月 壽岳文章」と翻訳の準備と経過が克明に語られ訳者の態度が明瞭に表明されている。また訳出する学名については、「学名を記す場合、ホワイトは現今行はれている約束、すなわち属名を大文字で、種名を小文字で書き始める方法に、必ずしも従っていない。譯者は忠實に原本の体裁を守った」(上、p. 8)として、日本にある注釈書からは市河三喜の校訂本に依拠している。「18世紀の英語に特有な文体や語法の多い本書を訳出するにあたって、訳者は、研究社英文叢書に収められた市河三喜博士の校註本(昭和十五年刊)から、多くの厚恩を受けた」(上、p. 9)として、そして最後に「またラテン語句の二三の疑義につき、田中秀央博士の教示を仰いだ。記して厚い感謝の意を表明する。昭和二十二年十二月²⁾」と謝意を表している。

自然への畏敬

では翻訳へとことさらに寿岳をかりたてた動機はどのようなものであったか。この翻訳が戦後間もなく行われた事実に注目したい。寿岳は日本が敗戦をきった翌日、京都、向日町の自宅から交通の便がわるいなか、苦心して郷里である播磨の生家へと向った。その道中、夏草や樹木が繁茂した林のなかを彷徨した。突如、まったく予期していなかった感情が、草や木の蔓にまみれ、からまれた寿岳をつつみこんだ。自然が戦争で茫然自失していた人間を再生させたのである。寿岳は自然のただなかにあり、「これで生きていける」と涙がこみあげてきた。自然という環境のなかで、あるべき自分を取りもどした瞬間でもあった。

幼き日から自然は文章少年を慰撫する友人めいた存在であった。「私は播磨の山村に生まれて、そこに少年の日を送った。小さい時から植物が好きで、山野を歩きまわっては風変りな草木を採ってきて、庭に植えたりさし木したり、瓶に活けたりした。雁皮の皮を剥いだときの、あのきつい匂いは今でも目の前で嗅ぐ思いがする。サルオガセの群落を見つけたとき

¹⁾ 寿岳文章「翻訳の限界」『英語文学世界』1巻8号(1966年)、p. 24.

²⁾ ギルバート・ホワイト著、寿岳文章訳『セルボーン博物誌』(岩波書店、1949)、上巻、p. 9. 以下、岩波文庫からの引用は、巻数とページ数を()内に入れて本文中に記入する。

の感激、石持草が食虫植物だと知ったときの興奮、それらが不思議に記憶からうすれて行かないのは、印象がよほど強かったからであろう³」と豊かな自然のなかにある少年の日々が追想されているが、ここで注意しなくてはならないのは、視覚、聴覚、臭覚を問わず全身でもって自然に没入する文章少年の姿であろう。幼き日の寿岳はひとりで自然のなかに身をおき、自分の周囲にいる動植物と対峙するような少年であった。まるで自然と対話しようと孤独に身をおこうとする哲学者ルソーの趣すらある。「六、七才の私も、早春のころ、谷川の源流を求めて山ふところにわけ入り、葉の出るのに先だってすべっこい花穂をつけているネコヤナギにもたれ、まだ冷たい水に手製の釣竿を垂れながらあたりを飛びかうメジロの鳴き声に聞きほれて、長い長いあいだ、じっと一人でいるのがすきでした」とあるように、自然は少年にとって友であり、慰め抱いてくれる存在であった⁴。

だがこれは自然の静寂のなかに身をおき、孤独のなかで自らを慰謝するような受動的な態度ではなかった。引用文に続いて、「ふと足もとに食虫植物のイシモチソウを見つけた喜びと驚きは、70才をすぎた今も忘れません」とあるように、ネコヤナギもメジロも少年にとっては春を告げる予兆以上に何かを具体的に強く語りかけてくる存在であったのだ。

73歳になった寿岳は、6歳の頃のこのような自然体験を客観的に見ることができるようになっていた。ネコヤナギやイシモチソウへのあくなき凝視、メジロの鳴き声に対する集中こそ寿岳の文学にたいする開眼であった。寿岳は淡々と語っている―「思うに文学も科学もまずものをじっと静かに観察することから出発するのではないのでしょうか⁵」と問いかけている。ただ観察だけでは受動者の目にとどまるだけで感性の奥へ侵入してきて感情と結びつくことはない。観察して克明にえた体験を感情の域内に移植するには刺激、驚きといった起爆作用が必要とされるのである。

寿岳において、観察から感情への移行はどのようなかたちで行われていたのであろうか。昭和8年に寿岳が移り住んだ向日町は竹やぶが散在するところで、竹の美しさに開眼するところとなった。自然の女竹などで作られた農家の生垣が棕櫚縄で結われ、「その間から山吹、椿、山茶花など季節季節の花が思いがけずのぞいている」姿は、「ため息の出るほどの美しさである⁶」と寿岳は感嘆を惜しまない。

一見、この感嘆は美しいものを見たという単なる観察から発しているように思える。しか

³ 寿岳文章「福寿草」『寿岳文章集』（弥生書房、昭和58年）、p. 16.

⁴ 寿岳文章『自然・文学・人間―W. H. ハドソンの出発』（新日本出版社、1973）、p. 88.

六、七歳の自筆年譜には、「この頃の家は暗く、父母は貧しさから罵りあることが多かった」とあり、「ある日、母は尼になると書き置いて居場所をくらましたが、それから十数日は、規矩にとり何週間、何ヶ月にも思われる苦痛の日々であった。もともとほがらかな末っ子であった規矩が、暗い影に悩まされるようになったのはその事件からである」と特記するほど少年には悲惨な事件であった。自然が父母に代わる存在になっても不可解ではない。

⁵ Ibid.

⁶ 寿岳文章「竹の美しさ」『西陣グラフ』（1963年11月15日号）

し寿岳には竹の生垣に咲く花の美しさに観応するもうひとつの意識があらかじめ備わっていたのである。芭蕉を愛好する寿岳には、「よく見れば薺花咲く垣根かな」という芭蕉の句が自然と浮かんでいた。寿岳は芭蕉の句「よく見れば薺花咲く垣根かな」を用いて、芭蕉の「たゆまぬ観察」（「よく見れば」）から「驚き」（「なずな花咲く」）を発し、「詩」に凝固する瞬間、つまり文学の誕生を説いている。このような感性を文学的素養というのであろう。『セルボーン博物誌』の観察にはその背後に古典が骨太く横たわっていることによくよく注意しなければならない注意を寿岳は十分に心得ていた。

寿岳が『セルボーン博物誌』を文学として考えようとするとき、驚きによる触媒作用をテクストのなかに感知していたのである。「観察が驚異の念をひき起こし、感動とつながるときに、文学も科学も生命を得るのです⁷」とは、まさに『セルボーン博物誌』の文学性をゆくりなく説明した言葉になろう。

寿岳によれば、W. H. ハドソンにはいつも自然のなかへ自己を没入させ、自然と一体化する、「神秘的、アニミズム的ともいえるはげしい情熱」がある一方、G. ホワイトにはハドソンのような情熱はなく、「同じ自然の忠実な観察者 [W. H. ハドソン] であっても、ホワイトには、対象物とのあいだに、いつも一定の間隔をおいており、自然と一つになろうとしないつめたさがあります⁸」と寿岳は自然への情熱の有無で自然との距離感を測定しようとする。だが、ホワイトの自然への「つめたさ」は、科学者としてあえて意識した距離感、つまり客観的な姿勢、観察眼を維持しようとする博物学者の態度ではなかったか。

昭和 15 年くらいから訳業を進めてた寿岳が、昭和 22 年の夏期休暇、一気苛成に筆を走らせることになった動機のひとつは、先述したように自然文学の古典『セルボーン博物誌』を通じて自然と対峙したい、つまり自然に向き合いたい自らの感情から発していたのかもしれない。

寿岳版の特徴

以上のような素質・素養をもつ訳者は、『セルボーン博物誌』の翻訳に対してどのような準備をこらしたのであろうか。訳者である寿岳は、岩波文庫上巻の巻頭に「凡例」をかかげて翻訳の方針・特色を箇条書きに特記している。以下、寿岳が翻訳に用いた底本、翻訳の指針を検討し、さらに底本に用いた初版にはない、あえて追加した序文、地図、挿絵、索引などの意義について考えていきたい。

底本

翻訳で問題になるのは、どの版を用いて翻訳をするのか、という点にある。「本書は Gilbert White (1720–93) の *The Natural History of Selborne* の 1789 年に出た初版からの全訳である。但し初版に見られる少数の誤植は後の正しい校訂に従う。原著者の人となり、ならびに本書の特質については、巻末に附した訳者のあとがきを参看されたい。なほ、そのあとがきには、初版表紙の複製を出しておいた」(上、p. 7) とあるように、翻訳は初版(1789)

⁷ Ibid, p. 89.

⁸ Ibid, p. 92.

を用いてなされ、初版にあくまでも忠実にありたいとして表紙を複製し、付随する索引をも省略せずと踏襲している。これは、あまたある注釈版によらず、かたくなに初版にこだわり、なんとかその香気をも伝えようとする訳者の努力である。

寿岳は翻訳の底本を決定した次に訳出する方針をかかげる。「本書は 18 世紀英文學の一つの名花であるとともに、博物学上の貴重な遺珠でもあって、Edward A. Martin の *A Bibliography of Gilbert White* (1934) が示すように、その後のすぐれた博物學者の手で、多くの校訂本が出版されて、それら後進者の註が、ホワイトの先駆者的偉業をあざやかにてらし出す。それゆえ訳者は、本文をあくまでも英文学の佳汁として訳出する態度を失わぬとともに、注釈はつとめて博物学的であることを心がけ、Thomas Bell (1792-1880), Edward Turner Bennett (1797-1836), William Warde Fowler (1847-1921), Sir William Jardine (1800-74) そのほか、いずれも高名な専門諸學者の所説を随時引用した」(上、p. 7) という寿岳の言葉にみられるように、この翻訳がかなりの難度をもって挑まなくてはならないものである事実が明瞭になってくる。大雑把に言えば、科学の客観的な領域と文学という主観的な領域が折衷され、相克している著作である、ということに尽きよう。科学と文学の共存こそが博物学の身上であった。そこで寿岳がたてた原則は、「博物学上の貴重な遺珠」である本書を、「注釈はつとめて博物的であることを心がけ」つつ、「本文をあくまでも英文学の佳汁として訳出する態度を失わぬ」という矛盾をかかえながら、翻訳を遂行していかなければならないというものであった。

最後に訳出にもっとも重要な態度である訳者の翻訳基準が明示される。「訳者は、本文をあくまでも英文学の佳汁として訳出する態度を失わぬとともに、注釈はつとめて博物学的であることを心がけ」とあるように、本書を文学作品としてとらえ、あくまでもイギリス文学の翻訳として提示したい旨を表明している。だが、同時に博物誌という自然科学の科学性を失わないように多くの注釈書を参照して、訳者自らの主観と客観の均衡をとろうとしているのである。

書誌学的検討

こうした方針を実行するにあたり注目すべきは書誌を用いて、これから航海しようとする翻訳の海原を計測する海図を詳細に検討している。書誌学者である寿岳は翻訳の準備として何よりも先にセルボーン書誌を参照したのである。寿岳の読書備忘録である『獺祭記』(向日庵資料)の「昭和 22 年 7 月 4 日」の記述には、「今夏いよいよセルボオン完訳」をめざす意気込みが語られ、「註釈その他の方針をこの書に求めて読了」とあり、凡例にも言及されているマーティンの『ギルバート・ホワイト書誌』(1934)を熟読している。つまり翻訳の前段階としてホワイトの書誌を参照し、底本、注釈書、参考文献、外国語訳などを検討しているのである。多くの校訂本が出版されて、ベル、ベネット、ファウラー、ジャーディンら後進者の注釈を取捨選択して訳文を決めていくのであろう。外国語訳については、「博物志[誌]の外国語訳についてはドイツ語訳のことだけしか書いていないのは杜撰」と嘆きながらも、『日本その日その日』の E. S. Morse 先生がセルボオンの教科書用テキストを Green から出しているのを知ってなつかしい。この本いつか入手したし」と、大森貝塚の発掘で有

名な考古学者モースが、この博物誌の注釈版を刊行しているのを知り感激している。浩瀚な『ブレイク書誌』をかつて編纂した寿岳には、「久しぶりで書誌を読み、昔、この道に苦労したことども思い出される。しかし、これはたしかに誰かがしなければならぬ仕事である」といった並々ならぬ使命感とともに感慨がこみ上げてきたのである。よって誰よりも書誌の重要性を知悉していたのであった。ただし寿岳が使用した『ホワイト書誌』は、マーティンの『ホワイト書誌』初版の増補版である⁹。

II 博物誌の文学性

今日、ギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』が高く評価されるのは、博物誌としてよりも文学作品として、ではなかろうか。一見、本書は自然を観察した、田園のくつろいだ感じがあふれた作品のようにみえる。そうしたのどかな情感すら構成と推敲に何年もかけた入念な文学作品から生まれてくる感情なのである。ホワイトは二人の博物学者ペナントとバリントンに送った手紙を編集し推敲して、それらを拡大、縮小しつつ、それらに合わせて他の手紙も書き博物誌を構築した。

ホワイト以前の博物学者が資料や研究論文を提示した形式とは著しく異なる方法でもって、ホワイトは自らの博物誌を構築したと考えられている。科学という学問分野への文献方法とは相反する、主観的な「書簡」を論稿の枠組みにすえた。科学的方向を目指す論考と文学的方向をとる形式という矛盾する形式が採用されたのである。ただここで注意しなければならないのは、科学的報告が書簡体で報告されていた慣用がある一方、同時にそれは同時代でもっとも隆盛を誇った文学形式であった点である。研究の中枢である王立協会の『哲学論文集』は、科学者が研究成果を報告し、また情報を交換する主要な手段として、手紙という形をとった文書で行われていた。ホワイトはもっとも信頼を寄せていた博物学者ジョン・レイの書簡集(1718)を愛読しており、『セルボーン博物誌』のなかでも再三にわたり言及、引用されている。ホワイトも書簡形式を維持することで、科学的伝統に組したのである。

だが他方、「書簡体」は同時代の小説の代表的な形式でもあった。小説家サミュエル・リチャードソンの書簡体小説は、英文学史から見ればイギリス小説の誕生を示すものであり、これ以上ない感情の繊細さを表現できたのである。『ロビンソン・クルーソー』の作者ダニエル・デフォーは、捏造した書簡と本物の書簡を混合して小説世界を構築した。よって『セルボーン博物誌』は科学的調査に求められる厳密な客観的基準を満たすものでもなく、逆に想像的自由を豊かに謳歌したものでもなく、判断によってはその境界はたえず揺らぐ著述で

⁹ Edward A. Martin, *A Bibliography of Gilbert White, the Naturalist & Antiquarian of Selborne: with a Biography and a Descriptive Account of the Village of Selborne* (London: Halton, 1934). 初版は、Edward A. Martin, *A Bibliography of Gilbert White, the Natural Historian and Antiquarian of Selborne* (England: Roxburghe Press, 1897) である。なお、マーティン (E. A. Martin, 1864-1943) には、博物学にかんする著作 *Dew-ponds: History, Observation, and Experiment* (T. W. Laurie, 1914) などがある。

あった、またあることは注意しておいてもよい。

そして、『セルボーン博物誌』のなかには忘れがたい観察が満ちている。その観察談自体が文学小品とでもいえる逸品に仕上がっているのである。活力をみながらせ生きていく豚の話などは一読しただけで忘れがたい。第 33 信は以下のように始まる。「豚の常命はほとんど知られていませんが、その理由は明白です。つまり、ああいう手に負えぬ動物を、天寿を完うするまで飼ってみたところで、何の利益にも便宜にもならぬからです。しかるに、私の隣人で、そうこまかく利益ばかりを算盤勘定に入れる必要のない資産家が、雑種小形の牝豚を飼育していましたが、その豚は、よく肥つてもおれば、身長も十分にあり、17 歳となるまでは、腹で地上を擦っていました。17 歳となって初めて、歯の脱落と妊孕（にんよう）力の減退とにより、多少老衰の徴候を見せました」（下、p. 152）と珍しくもない家畜である豚がこれまでにはない観察力で観察されていく。

以下のように、この不思議な豚の物語が展開していく。「およそ 10 年の間、この多産な母親は、年に二度、一腹 10 匹ぐらいずつ仔を産みました。かつてひと腹が 20 匹を越したこともあります。しかし、仔豚の数が、乳首の倍近くでしたので、多く死にました。この世での永い経験から、この牝豚は、非常に賢くなり、なかなか隅に置けませんでした。たとえば、牝豚と交尾する必要を生じた場合、隔ての門を片っ端からことごとく自分であけて、牝豚が一匹飼われている遠い農場まで、みずから出むいてゆく。そして、目的をはたすと、同じようにして帰ってくるのが常でした。15 歳となったとき、一腹仔が 4 匹ないし 5 匹に減じました。屠（ほふ）るまえ、肥らせるために入れられた檻の中で、彼女はこうした一腹仔を見せしていました。肥らせて屠ってみると、柔かで汁氣の多い、とてもよいペイコンになり、その皮の部分は、めずらしく薄いでした。控へ目に勘定しても、この牝豚は、300 頭の豚を生んだ多産の親であったことが認められました。こんなに大きな四足獣として、実に莫大な生産力の一例ではありませんか！彼女の殺されたのは、1775 年の春でした」（下、pp. 152-53、下線は筆者による）とまるで起承転結があるかのようにみごとな物語が成立している。

『セルボーン博物誌』と同時代、輪舞するベンガル産子ザル、小太鼓を打つ野ウサギ、トラランプに興じる中国の鳥、曲芸するミツバチなど、つまりホワイトの時代は世にも不思議な動物たちに不足することはなかった。そうした驚異の動物のなかで、あらゆる言語に通じ算術にたけ作曲もこなす「学者ブタ」は、ローランドソンの絵画（『驚異の豚』、1785）に描かれ、当代の知性を代表するジョンソン博士もが話題にあげている¹⁰。ところが『セルボーン博物誌』に登場する豚はこうした見世物とは一線を画していた。緻密な凝視から観察された結果であり、創作ではない。それでいて博物誌の文学性といえる要素が充満しているのだ。

興味深い観察の一例をさらにあげてみよう。博物誌の叙述は以下のように展開する。私の友人は生まれたばかりの仔ウサギにミルクを与えて養育していた。同時期、飼いネコが子を産んだが、生まれた仔ネコはすべて殺害して庭に埋葬した。その直後、仔ウサギも姿を消してしまった。それから二週間ほど経った頃、主人の足もとに不行不明だった親ネコが現れ、

¹⁰ Richard Altick, *The Shows of London* (Harvard University Press, 1978), p. 40, 42.

驚いたことにあの仔ウサギが後からついてきていたという。家ネコが自らの乳で仔ウサギを育てていたことが判明したのである。「草食の動物が、生物を捕食する肉食動物にはぐくまれたのです！」（下、p.155）という事実は、自然界の大原則を大きく揺らすものであった。自分の食餌動物であるウサギに対して、ネズミにとってはライオンにも比すべき獰猛なネコが、何ゆえ凶暴さをみせるどころか親の慈愛、母性愛を示すことになったのか、ありえないという疑問がもたげてくるのであった。

親ネコが何ゆえにかくなる「奇異なる愛情」を示したのか。精神と肉体の両面から理由があげられる。その理由として、まず、失ったわが仔に対する感情から引き起こされる親ネコの母性愛を挙げることができる。そうした精神的な感情に対して、授乳できなかったため感じざるをえない身体的不在を補填する行為でみたされるという身体的理由がある。「乳ではちきれそうになっている乳首を吸ってもらうことからくる」、やすらかな充足感にひたっていたと言うのである。

飼いネコがウサギの子供に愛情を注ぎ養育するという話は、何も例外的な話ではなく、軍神マルネの子供たち、ロムルスとレムスの双生児がオオカミに養われたというローマ建国の故事へと還元されていく。

家の片隅でおきた親ネコが仔ウサギを養育したという逸話は、ローマ帝国建国のそれと連動し、珍しい奇談という位置から建国の物語へと飛躍していく。この物語に迫真性を与えるのが、冒頭部と結末部の両端で引用されているウェルギリウスの詩句である。「乳を与えしは虎なり」（『アエネイス』第4巻367行）、「母乳の狼、マルス神/緑の洞に身をのぼし、双子の男の子、うれしげに/乳首に縋り、あどけなくも母の乳吸えば、狼は/細きうなじを折りかえし、舌もてねぶり、あいだいる二児をかたみにいつくしむ」（『アエネイス』第8巻630-34行）と、寿岳はウェルギリウスの詩句を逐語訳している（下、p.154、p.156）。

古典語

翻訳で寿岳が悩んだ障壁のひとつに博物誌のなかで頻出する古典語があった。だが、ギリシア、ラテンの古典に通曉していない一般読者でも、すぐれた翻訳に接することができた。すでに17世紀末からラテン詩人たちの詩作品の翻訳がはじまっていた。劇作家で詩人であるジョン・ドライデン（1631-1700）は活発に翻訳をこなし、ウェルギリウス、オーヴィッド、ホラティウス、ジュヴェナール、ルクレティウスなどの作品を手がけ、とくにウェルギリウスの翻訳は同時代、後世に深い影響力をもった。ホワイもドライデン訳を好んで引用している。詩人アレグザンダー・ポープも翻訳にすぐれ、ホーマーの叙事詩『イリアード』、『オデュッセイア』（1715 - 25）の韻律ある訳文は、詩人コールリッジから「比類なき才能と巧妙さがあふれている」と賞賛された¹¹。

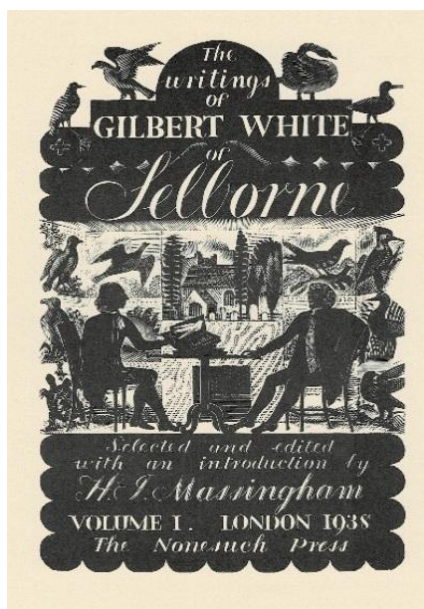
¹¹ ホワイは古典の素養が深くギリシア、ラテンの古典を自由に引用する。そしてホワイは古典詩の翻訳において誰よりもジョン・ドライデン（1631-1700）を評価し敬愛していた。劇作家で詩人であるドライデンは、まず1684年にウェルギリウスの翻訳を、さらに1697年にウェルギリウスの全訳を発表した。彼のウェルギリウスの英訳はもっとも優れたもので、数少ない創

ホワイトが活動していた 18 世紀後半、ギリシア、ラテンの翻訳の影響は現存するほとんどの詩人、劇作家に見られるようになり、表面的な模倣だけに終始するような駄作も多かった。詩人ポープやサミュエル・ジョンソンはこのような現代語に翻訳された模倣作品をとりあげ、詩文で徹底的な諷刺で報い痛撃をくらわした。「文盲とはギリシア・ラテン語に無知である者をさす」（チェスターフィールド卿）という古典主義を信奉する者に対して、実作家たちは真逆の態度でもって報いた。政治家であり小説家でもあったホレス・ウォルポール（1717-97）は公然とギリシア、ラテン語などは知らないと言い放ち、偉大な小説家であるサミュエル・リチャードソン、ダニエル・デフォーもウォルポールと同意見であった。

『セルボーン博物誌』における古典語引用の必然性を理解するためには同時代の代表的な刊行物を見ておかななくてはならない。たとえば 1711 年 3 月 1 日から 1712 年 12 月 6 日まで 555 号を刊行した、ジャーナリスト、スティールとアディソンの編集による日刊紙『スペクテーター』の紙面にみられる古典語の引用例をみれば一目瞭然である。また 1750 年に創刊し、52 年に 208 号で終刊となる、ジョンソン博士が編纂した定期刊行集『ランブラー』は知識、宗教心を涵養する方針に加え、英語の浄化をも発刊の目的にしていた。だが、それにもかかわらずギリシア、ラテン語が誌面には横溢している。

III 挿絵

博物誌の本文にはない図版を訳者はあえて挿入した。ブランデンと協議の上、当時、日本ではほとんど紹介されていなかったトマス・ビューイックの木版画が使用された。あえて寿岳は初版にはない挿絵を本文理解のために数葉を翻訳テキストに挿入した。「初版にはほ



とんど挿絵を見ないが、後の校訂者や出版者は、最も新しい Nonesuch 版の Erie Ravilious の挿絵に至るまで、木版、銅版、グラヴィア版、写真版等により、あるいは人物風景、あるいは鳥獣魚介など、いろいろ趣向をこらした絵をこころみている。本文の性質上、当然のことである。」（上、p. 8）というように、諸版において特色ある図版、挿絵が使用されていることを寿岳は熟知していた。引用文で言及しているナンサッチ版は挿絵研究史においても重要である。高価な限定版で入手が難しいナンサッチ版を早くも参照していたのは、寿岳の周到な準備を裏づけるものである。

寿岳が言及しているナンサッチ版（*The Writings of Gilbert White of Selborne*）は、H. J. マッシングが

造的な翻訳であった。ドライデンはウェルギリウス翻訳において、極限まで凝縮された簡潔さ、感覚の冷静さを模倣することは、とうてい不可能な作業であると痛感していた。そこで逆にラテン語を削らず明晰さを強調し、そこから合理的に推測できる感覚を追加した。

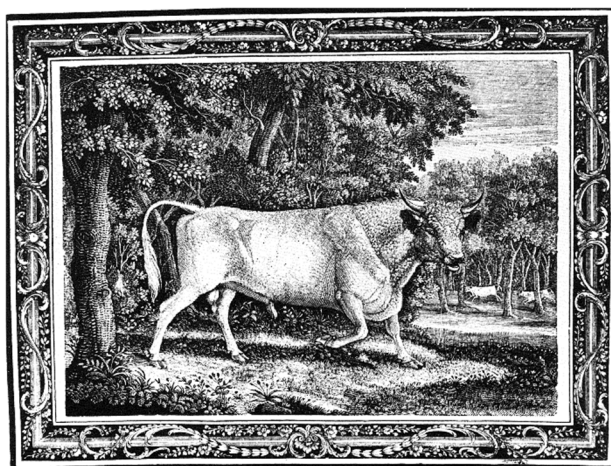
編纂し、1938 年、2 巻本で 850 部の限定版で出版された。マッシングムはカントリーサイド（田園地帯）に関する記事を雑誌『フィールド』、『スペクテーター』などに寄稿し、作家 W.H. ハドソン、東北大学で教鞭をとっていた詩人ラルフ・ホジソンの友人であった。伊藤長蔵が主宰していた出版社「ぐろりあ・そさえて」は、洋書の輸入販売も兼ねていてナンサッチ・プレスの日本代理店にもなっていたので、おそらく伊藤から入手したものであろう。

内容はセルボーン博物誌、古物誌そしてホワイトの日記（6 年間）、手紙からなる。挿絵はエリック・ラヴィリアス（1903-42）の木版画であり、ナンサッチ・プレスに加えてゴールデン・コックレノル・プレスなどプライヴェート・プレス（限定版出版社）に作品を提供した。ロバート・ハーリングの評論『エリック・ラヴィリアスの木版画』（1946）によれば、このナンサッチ版の挿絵の文字に関しては問題があると指摘されている。なお、本書は小説家ディヴィッド・ガーネット、博物学者 H・E・ベイツから受評している¹²。

さらに続けて寿岳は、「本訳書は、James Edmund Harting 版（1876）の故智にならい、木版画家トマス・ビューイック（Thomas Bewick, 1753-1828）の作品から適当なのを選んで挿絵とした。訳者の考えでは、「ビューイックこそホワイトの交体や気分にも最もふさわしい挿絵画家である」（上、p.8）と結論づけた。ビューイックこそ寿岳がもっとも愛する版画家であった。兵庫県立近代美術館の審美委員をしていた寿岳は、「ビューイックと日本¹³」という題目のもと、ビューイック論を展開している。冒頭、「現代も入れて、イギリスの版画家で誰が一番すきかと問われるなら、私はトマス・ビューイックだと答える」とその敬愛ぶりを隠そうとはしない。ビューイックの技術的な貢献は、木目に沿って切断されたツゲ材を金属の代わりに使用したことである。彼以前にもツゲ材は使われていたが、それはごく限られた用途であった。もうひとつのさらなる貢献は、黒から白への掘り込み、さらに黒い線に網状の陰影をつけない彫刻など、階調効果を洗練させ深めたことであろう。

寿岳のビューイック評価

寿岳のビューイック論を検討してみよう。まずビューイックの技法として、「それまでの木版画は、木目に沿って彫ったのだが、ビューイックは木口を版材とする方が強くもあり、面白い効果を出すことに気づき、専らその方法に依った」とその技法の斬新さに注目している。だが寿岳の注目をひいたのは文学、それも専攻するロマン派文学との類縁性にあった。「ビューイックは胎動を始めていたロマ



¹² John Dreyfus, *A History of The Nonesuch Press: A Descriptive Catalogue* (Nonesuch Press, 1981), p. 86, pp. 246-47.

¹³ 寿岳文章「ビューイックと日本」『兵庫県立美術館ニュース』第7号、1973年1月15日

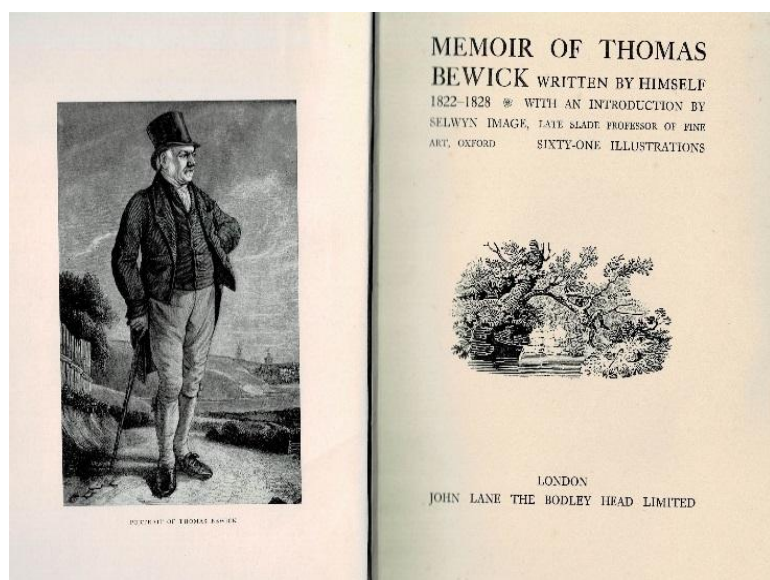
ン主義文学の主張に呼応するかのようになり、好んで画材を自然の世界に求めた。その探求は1790年の『四足獣誌』や1797-1804年の『イギリス鳥類誌』などにみごとな結実を見せる」と博物学の図版として傑出した作品であると指摘しているのである。「彼の傑作と言われる1789年の一枚刷り大型木版画『チリングアの牡牛』」を例に取れば、それまで牛だけを誰もこんなに大きく、堂々と版画に表現したものは無かった。観察は実に正確で、動物学的な要諦はことごとく満たしている」というように、何よりも寿岳のビューイック評価の一端は博物学的な正確さにあった。だが、寿岳は迫真性以上の精神性をビューイックの版画に認めていたのである。それこそビューイック版画の特徴・特質であった。「しかしそれだけならば、普通の説明画にとどまるだろう。ビューイックは正確さの背後に、あるいはむしろ内部に、牛への深い愛情をそそぎこんだ。動物や植物を表現したビューイックのどの版画も、不思議な魅力をもって見る者に迫るのは、ロマン主義思潮の基調となっている有情非情への没入であろう」と評価している。寿岳のブレイク理解が仏教的な基調でもってなされたのと同様に、ここでも仏教、とりわけ浄土宗の視座から評価しようとしている。「有情非情」が人間や動植物という有情に加えて、石や水、山川草木などの非情に存在するありとあらゆるものを示唆するとするならば、寿岳の言う「有情非情への没入」とは、自然世界へ全身全霊を参入させることであろう。つまりビューイックの木版画は、自然に対する愛情に満ちた観察と深い知識に基づいた作品であると指摘しているのである。だから結果的に見る者にとって、繊細で神秘的な美しさをもつ自然を示唆する直接的な媒体となっていくのだ。見ていると自然の存在そのものがわれわれの感覚に入り込み、浸透する直接的な媒体となっていくのに気がつくというのである。自然との親和が生まれる瞬間である。

挿絵の底本

寿岳は挿絵目次を用意していて、「上巻 若き日のホワイト / 懸崖林からの遠望 アカシカ / 水を飲む牛 / ヤツガシラ / 欧州ワキアカツグミ / ヌマガラ、下巻 雨 / 賢い牝豚 / ミヤマガラス / 村景 / 「セルボー博物誌」初版表紙」(下、p. 287)と記載されている。ここに列挙した挿絵の底本はあるであろうか。注目すべきことに寿岳は挿絵選択において、ビューイックの主要著作、作品から任意に挿絵を無作為に選んだのではない。

セルウィン・イミッジが編纂した『ビューイック自伝』(1924)から挿絵の大部分(上巻では、「アカシカ」、「水を飲む牛」、「ヤツガシラ」、「欧州ワキアカツグミ」、「ヌマガラ」の5葉が、そして下巻では、「雨」、「賢い牝豚」、「ミヤマガラス」、「村景」の4葉)を選択していることは注目に値する。セルウィン・イミッジ(Selwyn Image, 1849 - 1930)は、アーツ・アンド・クラフツ運動の有力な作家であり、工匠であった。ステンドグラス、家具、刺繍などの製作から書籍の装丁までこなした。とりわけイミッジは、著名な建築家でデザイナーのA.H. マックマードとハーバート・パーシー・ホーンが設立したロンドンの「センチュリー・ギルド・オブ・アーティスツ」と関係があった。マックマードとともに、家具、壁紙、主に家具などの家庭用デザイン、ステンドグラス、金属細工、装飾画を製作するギルドのワークショップを設立した。イミッジは1886年から1892年までギルドの雑誌『ザ・ホビー・ホース』の共同編集者であり、ロンドンのアートワーカー・ギルドの積極的なメン

バーであり、1900年にギルドの責任者になった。やがてイミッジはオックスフォード大学第7代スレイド美術教授(1919-16)であり、美術界に影響力をふるった。同時にイミッジはデザインに関する影響力のある著述家であり、数多くのエッセイを出版し、学術出版物に序文や章を寄稿している。寿岳は民藝の関係からこうしたイミッジのことを熟知していた¹⁴。



寿岳の選択において特記すべきは、ビューイックの主要著作の挿絵よりも余白飾絵を多く選択しているところである。ビューイックの余白飾絵は本文にともなわない、すなわち内容に付随しない図案、挿絵であり、直前にある本文内容、説明とは無関係であり独立した存在である。余白飾絵それ自体が田舎、田園、自然を背景、舞台にして人間の営み、日常生活が点描され、文学的随想、小品の

味わいを醸成している。田舎の日常に生起する断片をみごとにとらえ、自然に生きるすべてのものを描き出している。それらは四季の自然、農耕、農業、家畜、野生動物、狩猟、川釣り、失業、死、子供の世界などをテーマにして、田舎に住む人々が目にし、耳に聞こえてくる関心事をことごとく網羅している。ありのままの現実を活写したものだが、そこはかたない可笑しみ(ヒューマー)があふれ、同時に無愛想で突き放すような描写は現実の厳しさを露呈させている。こうしたビューイックの写実的な余白飾絵は、詩人ワーズワス以前のイギリス農村風景を如実に描き出しているといえよう。そしてビューイックが深く彫り込んだ農村の土俗性こそ寿岳の興味をとらえて離さないものであった。

つまりホワイトの自然観はビューイックの自然を見る眼ときわめて近かったと断定してよい。ここに両者の類縁性がある。両者とも自己の周囲にある小さな世界を繊細に観察した。ホワイトは、広範囲に目配りするよりも限定された地域を仔細に観察する方が自ら知り得る以上の知識をもたらしてくれ、自然知識を進歩させる可能性が高いと考えていた。よって地域ごとにそれぞれ固有の自然史を用意すべきだとした。

以上のような観点からセルボーン村は、ホワイトには理想的な場所であった。さまざまな土壌や生息地があり、丘陵地でありながら多くの森林が広がり、種類にとむ鳥類が生息していた。1751年以降、ホワイトは園芸活動の記録をほぼ毎日つけ、1768年には「博物学者の日記」を書き始めた。天候の変化、渡り鳥の到着と出発、野草の開花などの出来事を詳細に

¹⁴ Selwyn Image ed., *Memoir of Thomas Bewick Written by Himself 1822-1828* (John Lane, 1924), p. 68, p. 89, p. 128, p. 142, p. 215, p. 253, p. 259, and p. 270.

記録した。時には夜間にランタンをかかげて長時間の観察にいそしんでいる。観察だけではなくさらなるステップへと進んでいった。カッコウを解剖し、針ネズミの糞を調べて食餌を特定したり、ミツバチに聴覚があるかどうかを確認するため、拡声器でミツバチに向かって叫んだりもした。長年にわたる厳密な観察の成果として、ツバメが翼の上で交尾することを発見した。さらに自力だけでは限界があるので村で協力者を募り、移動してくる動物の到着や希少種を見たらその目撃を正確に報告させた。小川で魚を探す男を手配し、斜崖地にある高いブナに登ってウグイスの卵をとるようと少年へ依頼もした。

IV 地図と索引

索引 寿岳は索引について、「原版の索引はそのまま訳出したほか、本訳書のためにさらに詳細な索引を用意した」(上、p.7)と特記している。索引が注目されることはほとんどなかったが、最近ではその効用について知られるようになってきた。書誌学者であった寿岳は書籍、とくに研究書、学術書には本文を参照できる索引を必ず完備するように書物随想や研究書で早くから繰り返して訴えている。本の有用性を最大限に発揮されるためには索引が必要であると考えていたのである。索引の最大の機能として、読者や研究者が必要とする情報を探索する有効な手段を提供することにある。既読者でない未読の読者でも索引は本文内容を検索できる糸口を与えてくれる。よって書籍の索引は、本文中にある任意の情報を抽出するための適切な見出し語・語句をつけて、その所在(ページ数)を示すところにある。

寿岳は自著にはできるだけ索引を付けるようにしていた。最晩年に出した自らの来し方を語るオーラル・ヒストリーである自伝『父と娘の歳月』(1988)でも「主要人名索引」が付しており、読者には有益である。文中には姓のみが記載されているが誰か不明のときがある。それでも索引には姓名が与えられていて人物像が判明するのである。逆に、何度か言及される柴山全慶の早世した妻のように、索引に挙げられていないとあえて伏せておきたいという寿岳の気遣いが感じられる。朝日新聞社から出版された講演録『書物の世界』(1949)は、書物の印刷、構造などを説いたものだけあってみごとな索引が完備されている。「日本人の筆になる西洋書誌学の入門書として依然として最良のものである」という高宮利行の評価(『愛書家の年輪』、1994)はゆえなしとしない。『本と英文学』(1957)では本文194ページに対して、上下二段組40ページ近い索引が設けられている。甲南大学文学部英文科副手、松井朔子が寿岳から指導を受けて作成したものであった。大著『壽岳文章書物論集成』(1989)は、寿岳は助言を果ただけで編集に参画していないので1000ページ以上あるゆえか編集者が労を惜しみ索引は書略されてしまい、結果、読者は多大な不便をかこつことになる。索引があればもっと多くの読者を引きつけたであろうと惜しまれる。1990年、第4回の「物集索引賞」が特別賞という名目で寿岳文章に授与された。『『キルヤム・ブレイク書誌』(1929)をはじめ、書物に関して幅広い著作活動を展開したこと」と受賞理由が挙げられている。物集索引賞は、索引や書誌の作成を通じて学術研究あるいは社会に貢献した人物・団体を顕彰する賞であるが、いかにも寿岳にふさわしい賞であるといえよう。

書籍以外でも同様な検索ツールがある。たとえば郵便システムにおける郵便番号、電話通

信に対する電話帳、インターネットの検索入力などは同じ機能であろうか。後者の例は選択によっては情報の内容・方向・質量まで変化し、検索者の思索の方向性から知識形成にまで影響を及ぼすことになるだろう。

さて、翻訳された『セルボーン博物誌』には4種類の索引が付されている。「索引」は62ページにも及びきわめて詳細である。「アイスランドの噴火」から始まる「あ」から、「腕足類を出土する層」の見出しで最後となる「わ」まで、「あいうえお」順に立項され、索引化されている。

17 ページ分ある「原語索引」は動植物の表記が日英語では相当にゆれうごき同定できないため、また該当する名称が日本にはないという不都合さを埋めるため、ラテン語の学名で立項し、ABC順に索引化している。むろん土地の名称、人名は英語表記されている。この索引は自然史を専攻する者にはきわめて意味をもつことになるだろう。(下、pp. 63-79)

「原版索引」は上下二段に組まれ8ページ分あるが、翻訳の底本として初版を用いたため、本文に付随する「索引」も省略せず訳出されている。訳者はこの索引により著者ホワイトが本文をどのように作成したのか、という意図までくみ取ろうとしている。同時に読者にも本文の要点を示唆できるのである。「挿絵目次」も索引と同様に原書に倣っている。訳者の良心的な翻訳態度は、この「原版索引」の訳出によっても裏付けることができよう。初版では(Anne, queen, came to Woolmer-forest to see the red deer)が最初の索引項目になっている。寿岳はこれを「アン女王、アカシカを見るためにウルマの森へ行幸」と訳して、「あ」の欄の最後においた。著者ホワイトの手で整理された索引の項目は本文を要約したエキスとも考えられ、本文の一部ともみなしてもよからう。よってこのような初版索引を略さず付した訳者は原著の価値を熟知してしていたことになるだろう。「小川、セルボーン。そこで捕れる魚」、「コノリ、のため村のかみさん連中大恐慌」、「ツバメ、各種が、英国の非常に離れた三州に到着した月日」、「牝豚、一匹でも莫大な生産力あり」などの項目に目がゆくだけで、好奇心にかられた読者は、急いで本文のページに指をかけているはずだ。(下、pp. 289-96)

訳者の選択は本文の重点項目となって表われ、読者を誘う。たとえば「晴雨計」という見出しのもと、「一としての亀」、「高さを測定する一」、「セルボーンとニュートンの一」、「南ラムベスの一」、「空盒(気圧計)一による測定」と区分され、晴雨計が本文のなかでどのように機能しているかを明示してくれる。また、「セルボーン村」という項目のもとには、「環境」、「車道」、「井戸」、「河のみなかみ」、「地形と植物相」、「植物一覧表」とあり、訳者のなかでセルボーンの地勢、自然環境がいかに観察されて整理されているかを読者は知ることになり、改めて本文を理解する一助となる。「ツバメ」の項目は、「数」、「品種間競争」、「冬眠」、「渡り」、「ストルゲエ」、「タカ」、「昆虫」、「英国在」などに分割され、より読者の理解に資するところとなっている。『セルボーン博物誌』という項目も設けられ、「ギルバート・ホワイトと英国」、「諸版」、「刊本」、「出版当時の時代背景」と細分化され、この索引はいかにも書誌学者の手になったものにちがいない、と実感されてくるのである。(下、pp. 1-62)

地図

セルボーン村の景観については、「本文中に出てくる懸崖林から、セルボーン村を遠望

した銅版画を一つ複製しておく。Frank Buckland 版 (1876) の頭をかざるもの。同じ場所からの写真なども数多いが、恐らくこれが最もすぐれている」と自信あふれる見解を示し、さらに「セルボーン教区、ならびにその周辺の各教区を示す二葉の地図は、諸書を参照して特に本譯書のために作製したものである」(上、p. 8) とあえて自作の地図を挿入した。寿岳はこの翻訳の以前また以後も自作の地図をよく作製している。

かつて寿岳は児童文学の名作、ヘンリー・ウィリアムソンの『かわうそタルカ』を原著者の名前をもじった翻訳者名、入谷夢村(いりや・むそん)として、『川瀬一代記』を『週刊朝日』に訳出して連載を続けた。こまやかな愛情をもつ一匹のかわうそを主人公にして太古の営み続ける渡り鳥など他の動物たちとともに自然のなかに生きる姿が画かれる。人間はそうした動物を迫害する存在として登場する。訳者の寿岳がこの作品を翻訳する動機となったのは、「時局に対する私の抵抗精神」が核にあり、「自然描写にすぐれたこの作品を、私は日毎に自然さを失う苛烈な時局への解毒剤としたかったのである¹⁵⁾」と訴えている。人間たちがタルカを追いつめていく舞台は、イングランド、スコットランド、ウェールズへと英国全土にわたり、地域の詳細な地勢が必要とされる。動物と土地が一体となって描かれているから地理、地勢図は無視できない。そこで寿岳は一マイルーインチの実測図を丸善に通じて英国から取り寄せ、便宜をはかることにした。

このような反省と見解に立って、寿岳の「セルボーン地図」(上、p. 18) は作成されたといえよう。「イギリスなどでは、著名な文学作品にはそれぞれの地図も作成されているが、無い場合には、読者なり翻訳者なりが、自分自身の知恵と才覚で調製する必要が絶対にあるう」(「翻訳の苦労ばなし」) という強い信念に基いていた。晩年に翻訳した『神曲』にも内容を立体的に把握できる詳細きわまる、ダンテが彷徨する地図が作成された。

V ブランデンの序文

寿岳は翻訳の付記として、「本書の組版のおくれているのがかえってしあわせとなり、来朝中のエドモンド・ブランデン氏から、はからずも序文をいただくことができた。よろこび、これに過ぐるはない。昭和二十三年五月」(上、p. 9) と衷心から喜んでいる。この付記は昭和 23 年 5 月に書かれたことになっているが、岩波書店側の組版作業の遅延が時間の余裕を生み、ブランデンの序文ではからずも巻頭を飾ることができたと寿岳は単純に喜んでいるようであるが、どうやら遅れた理由は組版だけではなかったようである。甲南大学図書館の「寿岳文章文庫」に収蔵されている校正ゲラを精査するとかなり朱が入っている。初版が翌年の昭和 24 年 2 月であることを考慮すれば、寿岳が校正作業に相当な時間をかけた事実も一年以上の遅延理由のひとつに入れることができよう。

ブランデン

1896 年、ブランデンはロンドンの中心であるトッテナム・コート・ロードで生まれたが、幼少の頃、ケント州の寒村ヨールディングに移り住み、ここで成長した。田園のヨールディ

¹⁵⁾ 寿岳文章「翻訳の苦労ばなし」『寿岳文章集』(弥生書房、昭和 58 年)、pp. 114-16.

ングはまさに天国であった。あふれる陽が輝き、そよぐ風がささやく、広がる自然の世界は、ブランデンにとってはターナーではなくコンスタンブルの世界であり、イギリスの田園そのものがそこにはあった。この寒村から放散された自然の世界を生涯の糧として、ブランデンは永続的な影響力として詩作の基盤にすえた。落ちている羽毛といった誰もが見過ごしてしまう微細なものに、その現象をおこす不思議さに心騒ぐ感受性を身につけた。そこに住む人間は大地を友にして農耕にいそしみ、緑地ではクリケットに興じる村の住人たちがいた。だが、第一次世界大戦はブランデンの人格を根底からくつがえし塗りかえてしまった。ブランデンが塹壕で過ごした 2 年間という期間は異常に長く、戦争は記憶に悪夢をたえず揺曳させ、同じ体験を共有した友人たちといつまでも共通の話題であり続けたのである。「軍服に身をつつんだ無垢な羊飼ひ」、これがブランデン自身の自嘲じみた自称である。

第二次世界大戦後は『タイムズ・リテラリー・サプリメント』誌の編集者になり、ブランデンは退社までに 600 本以上の記事、評論、詩歌を寄稿した。すぐに日本に戻り、英国の文化使節として大成功を収めた。ある日本人は、「日本における占領期の最大の功績は、アメリカからマッカーサー元帥が派遣され、イギリスからは詩人エドモンド・ブランデンが使節になったことだ」とまで評価した。たしかにブランデンは敗戦国、日本の文化的側面の復興を順調にすすめるのに寄与したといえよう。国民から嵐のような賞讃をあびたブランデンは数々の栄誉に浴し、日本の各地には彼が揮毫した記念碑があまた建立されている。

1947 年、ブランデンの二度目の日本滞在は、「文化カウンセラー」として始まった。自らの使命を「詩人シェリーやヘンリー・ヴォーン (1621-95) のような人物のメッセージを復活させること」だと信じていた。つまり詩による精神の回復を祈ったわけである。家族とともに英国大使館の敷地内に住み、日毎に名声は高まり、日本の各地で熱烈な歓迎を受けた。ブランデンは「愛される天才」であり、拒否という言葉を知らなかった。日本人は非情にもたえず要求をつきつけたが、ブランデンは一切拒絶しなかった。結果、多くの人々が参集しブランデンは講演、朗読、揮毫などに余念がなかった。戦争で破壊された日本に戻ってきたことは、彼の誠実さから出た行為であった。英文学に対するブランデンの嗜好、鑑賞は作品に厳しい批判を下すものでなく、随筆家ラムを敬愛する姿勢などに見られるように日本人の文学志向とはなほだ合致していた。人気がよく出る由縁である。駐英大使となる友人ピルチャーを通じて、書物を愛するブランデンと寿岳はたちまち意気投合した。

序文の意義

さて問題は序文である。『ブレイク書誌』(1929) は処女作ということもあり、柳宗悦、山宮允から序文を書いてもらっているが、寿岳が自著に他者から序文を仰ぐことはブランデンを除いてほぼ皆無であった。だが、ブレイクの創作過程を明らかにするロセッティ手稿を書誌学的に論じた博士論文についてもブランデンから序文を得ている。この序文を寄せてもらった前後で寿岳は関西学院の校歌をブランデンに依頼し歌詞を書いてもらっていた。これは詩人ブランデンに対して寿岳が厚い信頼を寄せていたゆえであろう。

ブランデンは序文のなかで、先ず、ホワイトは自分の著作が日本で翻訳される不可思議さに驚いたであろうが、ブランデンはひとつの真理が地理的な障壁を容易に越境できると

信じていた。「聖職者ギルバート・ホワイトは、ただ一冊しか世に出さなかった自分の著書が、いつの日か日本で愛識されるようになる事を、もし生前に知り得たとしたら、あまりの意外に驚いたかも知れないが、しかし喜んだであろうことは疑いを容れない。その喜びは、自己本位のものではなかつたであらう。それは単に、わが影響の及び得る限界だと考えていた地域をはるかに越えて、自分の信念がわかちあわれてゆくの人を見る人の幸福感であつただらう。真理は勝つのである」(上、p. 3) とブランデンは確信をこめて主張している。

そしてブランデンはゆるぎない古典としての影響について言及をする。「英国では、あらためて言うまでもなく、ホワイトの『セルボーン』は多くの世代にわたって古典の地位を保ってきた。そしてこの作品の価値は、それがとり扱っている内容にのみ限られているのではない。この書物については、すべての批評家が楽しんで語る。博物学者たちは誤りを指摘することができるだらう。しかしかれらは、ホワイトが自分たちの先師の一人であることをはっきり認めている」(同)と、今日ではもっとも重要視されるネイチャー・ライティングの祖としての位置を認めることになる。古典たるゆえんはその文学性にあることもブランデンは指摘している。「村の風光、人物、また工芸品などに尽きぬ興味を覚える人たちは、ホワイトを読んで如実な記述を尊ぶ。散文体の鑑識に眼の高い人は、ホワイトの散文のもつあの明確な語彙、変化に富んだ韻律をとりあげて、いつまでも讃美を済まない」(同) とブランデンはいかにも詩人らしい評価を静かに下している。

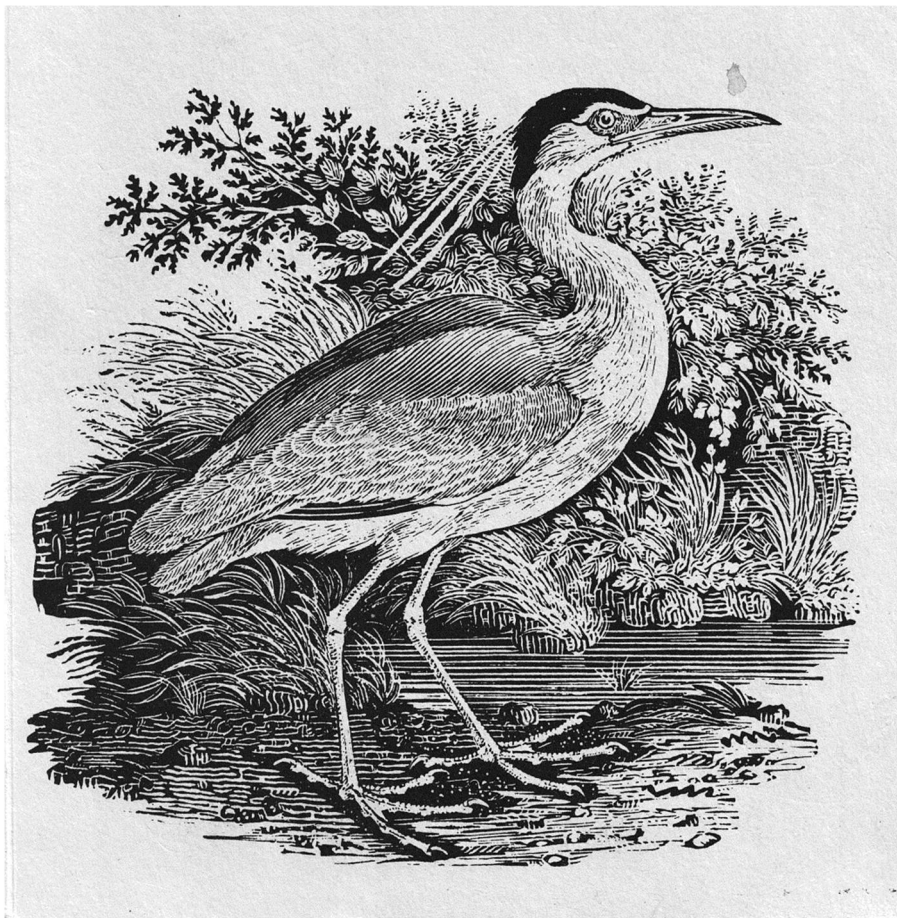
さらに序文のなかでブランデンは若き詩人ライとともにセルボーンに滞在したときの体験を語り出す。「最近、私は幸せにも、年若い詩人アントニ・ライといっしょに、セルボーンで数日をすごした。ライの書いた『鳥の旅籠屋』は、ホワイトの手法によっているのみならず、またどこことなく日本風な匂いを漂わせている。思うにそれは、この詩人が、自作の抒情詩のここかしこに、自作の絵を挿入しているためであろうか。彼のおかげで、私はホワイトが好んで訪れたそここの場所で、去りがての時を送ることができた。そうしてホワイトの亡魂が私の身に漂っているのではないかとさえ怪しまれる一つのこととらに出会った。ひでり続きの時期であった。ホワイトが行き慣れていた小さな河の一つへ私は足を運んだ。その小河で私は見た、野生の蜜蜂が、『実におびたしくまた実におびたしく』、平和に、たのしげに、優美に、水をすすりにやってくる光景を」(上、p. 4) と、詩人らしい筆致でブランデンは『セルボーン博物誌』の世界が顕現する瞬間を余すところなく語りつくしている。

序文におけるこの挿話によって、ブランデンは日本の読者に向けて、ホワイトが過ごしたセルボーンの村は現在も時が止まったかのように、何も変わっていない様子を伝えようとしている。ブランデンを幸福感でつつんだ一群のミツバチは、言うまでもないが、ホワイトが観察し、『セルボーン博物誌』に書きとめたミツバチの描写へとつながっていくのである。

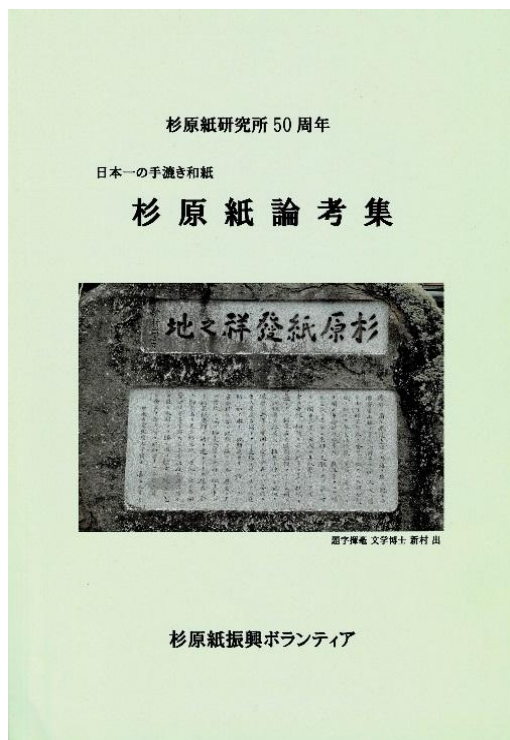
結語

18 世紀末に出版された当初、『セルボーン博物誌』(1789) は、革張りの書物が並ぶ書棚があるような貴族の書斎でしか読まれなかった。19 世紀になり田舎から工業地帯のスラム街へと移住せざるをえない労働者、故郷の失った緑地が記憶から去らない会社員、戦火の

塹壕で故国を追慕する兵隊たち、自然保護を訴える者などがこの博物誌を愛読するようになるまでには長い時間が必要だった。本書の表面的な内容は難解ではなく、誰もが楽しめることが楽しめるように書かれていた。だが、最初はそれゆえに本質が理解されにくかった。なぜならば、注意深く、何度も何度も読まなければならなかったからである。再読三読が強いられただけである。じつは読みやすそうな反面、無味乾燥な文体でつづられていて、読者を容易に寄せつけようとはしなかった。頻出する古典語、決して退屈ではないのだが、堅苦しい論述や専門的な用語と理論、なかには時代遅れな主張などが一般読者を苦しめ、遠ざける側面があったのは否定できない。寿岳訳はこうした難解な箇所を解きほぐすように訳文がつづられていて、この古典を読者に何とか近づけようと先述したような工夫をこらし翻訳がなされている。ブレイクと同時代の古典はまさに適切な翻訳者を得たといえよう。



ビューイックの木版画「ゴイサギ」
Night Heron in Thomas Bewick's *History of British Birds* ([1804], 1826), II, p.14.



【資料紹介】

「杉原紙振興ボランティア」の山仲進氏によれば、杉原紙復興を目的として「多可町立杉原紙研究所」が設立され、50 周年を迎えたと言う。慶賀の至りである。復興は、昭和 15 年(1940)8 月 23 日、新村出、寿岳文章が杉原谷調査をしたのが嚆矢となる。よって杉原紙の復興は 80 余年の歩みがある。先人の貴重な事績をとどめ、忘却せられていくのを防ぐため、杉原紙の歴史に関する諸論考が本書に再録された意義は大きい。また一般には目にとまりにくい研究雑誌、入手しがたい専門書に掲載されている論稿も少なくない。こうした資料の公開は次世代への確実な継承をうながすものになろう。本書の構成をここに挙げておきたい。

杉原紙振興ボランティア編『杉原紙論考集』（杉原紙振興ボランティア、2024）

まえがき

山仲進「解題」

寿岳文章「杉原谷紀行」 昭和 15 年(1940)

新村出「杉原紙源流考(上)」 昭和 15 年(1940)

寿岳文章「和紙風土記」 昭和 16 年(1941)

小野晃嗣「中世に於ける製紙業と紙商業」 昭和 16 年(1941)

堀部正「梶原紙筋記」 昭和 18 年(1943)

新村出「跋」昭和 20 年(1945)

藤田貞雄「故堀部正二氏の御霊に拙文を捧ぐ」 昭和 55 年(1980)

寿岳文章「日本の紙」 昭和 42 年 (1967)

藤田貞雄「加美町史略稿 杉原紙の歴史」 昭和 57 年 (1982)

朝日新聞「文学に登場した播磨の昨今」 昭和 46 年(1971)

寿岳文章「杉原谷紀行」

寿岳文章「播磨紙のふるさと」 昭和 47 年(1972)

寿岳文章「杉原紙復元の感動をいつまでも」 平成 3 年(1991)

久米康生「和紙文化辞典」 平成 7 年(1995)「杉原紙(すぎはらがみ)」

戸田善規「杉原紙 思い草の記(上)」 令和 5 年(2023)

あとがき

寿岳文章の絶筆に近い一文こそ、「杉原紙復元の感動をいつまでも」である。ここに再録し、未読の読者に紹介しておきたい。

「杉原紙復元の感動をいつまでも」

文学博士 寿岳文章

私も年をとった。来年3月、それまで健康が何とか許せば92歳になる。

最近の私は、ともすれば自らの歩んできた道を振り返りがちであるが、専攻の英文学とともに、深く思いをいたした紙漉きのことどもは今もなおあれこれを思い出したり、その将来を考えたりすることが多い。

加美町の人たちがとりわけ杉原紙生産の現況を語ってくれるのに心を躍らせつつ、私はまず今から50年余り昔の杉原谷行を思い出さずにはおられなかった。

同行は、今は亡き新村出博士である。

当時、もう漉かれなくなっていたが、史上名高き杉原紙の原産地を訪ねることは心ときめくものがあつた。

全国に杉原と称する紙の生産地はいくつかあるが、まずその地名は紙名に影響があるのは当然のことであろうし、中世以来、スギハラ、スイバラ、スイハ等々の名で重要な産品であつた杉原紙は、九分九厘この地が本家であろうと推察される。

昭和15年の杉原谷行が、ゆかりの人々の漉き語りの詳細のおもしろさ、さまざまの村人の心あついてもてなし等で忘れ難い旅となった。

新村博士の思いも同様であつたろう。現存の杉原紙の碑に新村、寿岳の両名がかかわることになったのも、まずはその日の感動があつてのことである。

しかも、私が心からの喜びとするのは、一度吹き消されたかに見えた杉原紙生産が戦後、藤田氏はじめ多くの人々のなみなみならぬ努力によって再興したことである。

日本の紙漉きは、まず十五年戦争によって瀕死の状況となった。

たぐい稀な和紙の美しさや機能に見向きもしない国家の方針に加えて、紙漉く人々を戦場に追いやった苛酷な日本の近代史は、とにかくやつと訪れた平和が、手漉き滅亡の歯止めとなるかに見えたが、戦後史の展開は和紙生産に悲観的な運命を与えた。

せっかくの平和でありながら、国家の経済政策は過疎を生み、地道な堂々たる努力に生きる人を否定した。

そうした風潮のなかで、かつての見事な杉原紙をよみがえらせた杉原谷の人々の活躍は誠に感動的であり、日本の確かな希望なのである。

『広報かみ』平成3(1991)年12月号

謝意

最後に、貴重な資料を贈呈してくださった山仲進氏に謝意を表しておきたい。(T. N)

【あとがき】

昨年 11 月 22 日、ビッグニュースが飛び込んできました。国の文化審議会が旧寿岳家住宅「向日庵」（主屋、門及び土塁）を**登録有形文化財**とするよう答申した、というものでした。2017 年 7 月に NPO 法人向日庵を結成して以来の悲願であり、「向日庵」の保存と公的活用の第一歩であることは誠に喜ばしいことです。これまで「向日庵」を保存・管理されてきた所有者、保存のために尽力いただいた向日市と会員諸氏の活動、そして景観の保全に留意されてきた地域の人たちなどの努力の賜物で、感謝いたします。さらに嬉しいことに、**向日市が「向日庵」を購入する事業費を新年度予算案に盛り込んだ**という報道がありました（2 月 28 日 朝日新聞）。市は今後の保全や活用を見据えて買い上げを決めたということです。早速 3 月 2 日、南禅寺・慈氏院の寿岳一家の墓前に報告ができました。

さて今年度は 2 回の講演会を開催することができました。6 月 2 日には「戦争の時代を生きる ―新村 出と寿岳文章―」として福家崇洋氏が「**戦時下日本社会と知識人 ―新村出と新村猛に焦点をあてて―**」。高木博志氏が「**1940 年代の寿岳文章**」を講演されました。福家氏は、新村出・猛の親子が戦時下に猛は欧米の反ファシズム文化運動の紹介に取り組み、新村出は言語学者として国の学術文化事業に参画し、それぞれ異なった言説と活動をしたが、戦後、親子の協働作業が『広辞苑』として結実した経過を明らかにされた。高木氏は戦時下、寿岳文章は英語や英文学への排撃が激しくなる中、向日庵本『紙漉村旅日記』（1943 年 9 月）という頂点になる仕事を成し遂げた。一方で、寿岳の思想は自由主義を根底としつつも、天皇を崇敬するなど日本主義へと傾斜した。高木氏はその苦悩が戦後の英文学研究や翻訳などの偉業を生み、民主的な言動の動因になったのではと提起された。ともに戦時下、知識人はいかに自らの学問・研究と向き合ったのか、多くの示唆に富む講演でした。

12 月 8 日には、会員で日本語研究会の遠藤織枝氏による講演「**30 歳代の寿岳章子 ―学び、働き、楽しみ、悩んだ時代―**」が行われました。先立つ 9 月に遠藤氏は『寿岳章子 女とことばと憲法と』（かもがわ出版）という寿岳章子の評伝を出版されています。講演は向日庵に残されていた章子の日記をもとに、戦時中の猛勉強や大学での地道な国語学の研究生生活とともに日常生活を楽しむ大切にする姿を紹介、日本語研究がジェンダー論の萌芽となったと説いています。評伝は地元京都では新聞各紙が書評を掲載し、寿岳章子は今なお後を継ぐ人たちに大きな存在になると再認識させられます。

和紙に関しては、会員で和紙造形作家の伊部京子氏が展覧会「**和紙物語**」を開催されました（6 月 7 日～7 月 26 日 中信美術館）。和紙文化の伝統に斬新さを備えた多様な和紙作品を展示、豊かな和紙の世界を披露されました。

8 月 3・4 日には「全国手漉き和紙青年の集い京都大会」が開催され（京都文化博物館別館）、当法人としては、多可町のご協力のもと「**寿岳文章が集めた紙**」を展示しました。玉城玲子氏が「**寿岳文章と『紙漉村旅日記』―1930 年代後半の全国手漉紙業調査―**」を講演され、寿岳文章の和紙に関する業績を広く知ってもらい意義深い催しでした。

実りある一年となりました。本紙に寄稿くださった方々、そして関わって下さったすべての方々に感謝いたします。
(NPO 法人向日庵理事 長尾史子)